316.82-B666ウ
1200500735267
316.82
56

獨立印度の黎明

×
複写

ラス・ビハリ・ボース著

始

316.82
B666

獨立印度の黎明

ラス・ビハリ・ボース著

照文閣版

破邪

頭山翁の著者に贈りし筆蹟と
著者の近影

945
58

序

私は今この序を書きながら、堅い決意と、無量の感懐に打たれてゐます。

この著「獨立印度の黎明」は、私が永い亡命の間に書いた數々の著作の、最後のものであります。

私はこの著に、虐げられた祖國印度の、萬斛の血涙と憤怒を込めて、印度人の決意を、私自身にも明かにしたのであります。

起ち上らんとする印度のために、私は今、一切の私情を離れて、死を決して天涯に向ほうとしてゐます。

私も、亡命以來、青年期から壯年期へかけて、早や三十星霜、——想へば永い隱忍の年月でありました。

夢寐にも忘れぬ祖國への愛情が、私の生理的に早や硬化しかゝる血管の中に、むずむずとう

づいてゐた感情の火が、再び青年期の若々しい火に還元したのであります。

大東亞戰爭緒戰の日、私は泣きました。嬉しくて、嬉しくて、萬感胸にこもり、涙が止度なく流れたのです。

そして私はこの涙の中で、再び青年の日の死行の蹶起を決意したのであります。

私の言はんとする處、叫ばんとする處、うつたへんとする處は、大體この一書に書き盡した心算であります。

――私は私のこの死行の決意を、この「獨立印度の黎明」に言擧げして、實行運動に投じて行きます。

もとより、迫害と、壓迫とは覺悟の前です。如何なることがあらうとも斷じて所信に向つて猛進いたします。

如何に印度が慘虐の壓制に苦吟したか、私は骨髓に徹した、この四億印度人の憤激を一身に體するが故に、印度獨立を繞つて、手をかへ、品をかへ、凡ゆる策謀を廻らす英米のあがきの前にこの好機を、逞ましく燃え熾る印度獨立の進擊の行手を、同じ血の繋りの同胞が、一時でも目前の陋策に迷はされてはならないが故に、私はそれを思ふと、一時でも靜止するに堪へないのであります。

獨逸に亡命中の同志ボース氏、及びネール、ガンヂー、ジンナー、サバルカル氏等の、それぞれの動きに對して、私は三十年の日本亡命の間の認識を提げて、陣頭に躍り込みます。

希くは、この書が獨立印度への魁の火となつて、日本の人々の感情に大東亞共榮圏の……ための、火を赤々と點ぜられんことを切願しつゝ……(昭和十七年四月)

於　山王ホテルの一室

著　者　識

目次

印度は必ず獨立する……九
印度の輪廓……一五
ガンヂーとネール……一八
英米文明の解剖……二八
亞細亞人の責務……四三
未開民族撲滅の非人道策……四九
假面せる英國の對印政策……七七
亞細亞は蹶起する……九一
英國に虐げられし印度……一〇〇
印度屈辱史と大兵亂……一二一
印度の國民主義運動……一三九
印度新憲法批判資料……一八四
印度最近の對日動向……二〇二
印度獨立と大東亞戰の意義……二一二
印度を狙ふ共產主義……二三九
印度の國民的指導者サバルカル……二五五
辿り來し道……二六〇

獨立印度の黎明

印度は必ず獨立する

私は茲に、確信を以て「印度は必ず近き將來に完全なる獨立を享有し得る」と斷言する。それは神の啓示であり、天の命であり、亦歴史の必然が命ずるところである。友邦日本が米英に對して、敢然宣戰の布告を行つた日から、印度の獨立は眞近な對岸の現實として我等十億の亞細亞民族の前にクローズ・アップされて來た。

嗚呼、想へば印度の屈從は實に永いことであつた。私個人としても、日本に亡命以來二十年未だ嘗つて一刻と雖も祖國印度の苦腦が我が胸を離れたことなく、我が肩を憩めたことはなかつた。幾千里を隔てた友邦日本に在る私でさへ斯うである。まして日夜現實に英國の酷烈無殘なる壓政下に苛まれた祖國四億の同胞の憂苦艱難の程は察するに餘りある。

だが、瀕死の印度は、今や日本の正義の力に依つて、蘇らうとしてゐる。これが泣かずに居られやうか。これが叫ばずに居られやうか。これが感謝せずに居られやうか。

私は、永い間の苦難と屈辱と憂悶とをサラリと忘れて、今こそ、敢然として青年時代の勇氣と雄心とを奮ひ起して、印度の完全獨立のために突進すべく決意した。

第一次歐洲大戰では、印度は完全に英國に欺瞞された。四億の我が同胞は如何に之を憤慨したか知れない。然し、結局我々は無力であつた。狂暴なる英帝國の前にはか弱き仔羊であつた。然し、一切は神の攝理に導かれる。天使日本が一度び激して起つや、我が印度の完全獨立は確實に約束されるに至つた。然し、私は想ふ。祖國印度は英帝國の桎梏を脱却したゞけでは、その國家的、民族的使命は決して達成出來得ないのだ。自己解放と獨立、それと同時に大東亞諸民族と合作共同して、大東亞の護りと相互の彌榮確立のために戰はねばならないのだ。その點から云へば、印度國民の本格的戰は將にこれからだ。然しこれからの戰ひは、過去の屈辱と憤懣に滿ちた苦しい闘ひではなくて、希望と光明とを孕んだ建設的戰ひであり、輝かしい目標を持つた愉快な進擊戰である。

私は、今こそ、戰ふ者としての充分な確信を以て、我が激しい魂をぶちまけやう、そしてその炎で英帝國のあらゆる不義、不淨を燒き盡さねば止まぬ。今こそ、單に武力的にだけでなく

思想的に魂的に英帝國を擊ちてし止まむ。擊ちてし止まむ。

印度國民は開闢の神ブラヂーヤチより開展した民族にして、神の啓示に依つて建てられたる一大使命を有し、またそれを實現すべき任務を負ふてゐる。數千年に亘つて、印度に榮えた過去の歴史は、國民がその使命を實現した結果である。その間、英國の侵入によつて、吾人は民族的試練の時代を經過せざるを得なかつたが、今や我等國民は凱歌を揚げて、この試練の時代から脱却せんとしてゐる。今、私は武裝せる英國の壓迫に對して武力無き我祖國の同胞が、臥薪嘗膽よく戰ひ拔いて來た世界に比類無き闘爭に對して、我が親愛なる日本國民が賞讃してゐるのを聞く毎に、誇りと歡びに胸が溢れて來る。此の機會に私は諸君の奮闘努力が成功の榮冠によつて飾られ、幾千萬の尊き過去の犧牲者も莞爾として成佛し、印度國民が外國の束縛を斷ち切つて、天より與へられたる使命に邁進すべき輝く日の近く來ることを確信してゐる。

彼等數萬の獨立愛國戰士と國民とは、不幸にも最後の目的に達せずして倒れたのであるが、然し今、日本が米英打倒のために雄々しく起上つたことによつて、是等英靈が生前に掴み得なかつた好機を與へられたことを知り、必ずや安んじて冥せられることゝ信ずる。

私は不斷の努力を以て、印度をして世界におけるその地位と使命とを自覺せしむるに至つた印度の亡き指導者達「ラヂヤ・ラム・モホン・ロイ」「デベン・ドラナート・タゴール」その他多數の先覺志士に對して、心からの敬意を拂ふ次第である。

更に印度人の印度を建設するために、私無き闘爭を續けてゐるガンヂー氏を始め現代の各指導者に對して、心からの感謝を表したい。それと同時に、印度教徒たるとイスラム教徒たるとを問はず、また印度教徒大會たると回教聯盟たるとを問はず、全印度國民は一切の宗派對立を拋擲し、互ひに融合學國一體となつて、英帝國の政治的、經濟的、思想的、文化的殘滓を擊攘し、眞に亞細亞の印度、印度人の印度を實現せんことを要請して已まない。これなくしては、自己解放後の印度は國内闘爭によつて滅亡する。

東條首相は本年三月十二日の議會に於て印度問題に言及して次の如く云つた。

「印度民衆に對しましては、帝國は素より之を敵とするものではないのであります。然し乍ら帝國は米英勢力を徹底的に破碎せんとする從來の決意には毫も變化なきことを重ねて玆に表明するものであります。今や「ビルマ人のビルマ」は出來上らんとして居ります。印度四

億の民の願望であります「印度人の印度」の實現するは正に今日にありと私は確信するものであります。英國は多年印度を欺き、之が壓制を續けて參つたのであります。前大戰の際英國の爲したる約束の正體が遂に如何なるものであつたかは、今猶印度人の記憶に新たなるところであると信ずるのであります。今やまた英國は、あらゆる甘言を以て印度を欺かんとして居ります。若し夫れ印度の指導者にして、この英國の甘言に誤られ、印度民衆多年の希望を裏切り、この天與の機會を失ふが如きことありと致しまするならば印度は永遠に救はれる機なく、四億民衆の不幸之より甚だしきはないと信ずるのであります」

日本軍が印度における英軍膺懲の火蓋を切るに當り、四月六日重ねて左の如き談話を發表し日本の意圖するところは一に英帝國の擊攘にあるのであつて、決して印度四億の民衆を敵とするものに非ざることを明かにした。即ち、

「皇軍は曩にビルマの要衝ラングーンを占領し、更に印度洋東部の戰略的要衝であり、印度獨立志士流刑の地であるアンダマン諸島を占領したのであるが、今回更に進んで愈々印度における英國の兵力及び軍事施設に對して一大痛擊を加ふることとなつた。かくの如くにして

米英膺懲の帝國の斷乎たる決意は着々として實行に移されつゝある。若し印度にして依然英國の軍事的支配の下に在るならば、この帝國が英國擊滅のために行ふ攻擊によつて印度が甚大なる戰禍を蒙ることも亦已むを得ざるところである。素より帝國の企圖するところは印度四億の民衆を敵とするものではないのであつて、この際戰禍を蒙る印度民衆に對しては、洵に同情に堪へない次第である。印度民衆に對する帝國の眞意は、さきに予が三月十二日帝國議會の演說において述べたるところに明かである。卽ち、予は今日こそ印度民衆が「印度人の印度」を建設して、印度本然の姿の確立のために全力を致すべき絕好の時機であることを確信するものである。今や、印度における英國の勢力が擊攘せられんとするこの秋に當り、予は重ねて、印度の指導者は素より、印度四億の民が沒落の運命の下に在る英國の甘言に誤られて無益の戰禍を蒙ることを避け、この天與の好機に際し英國多年の羈絆を破碎し、眞に印度人の印度實現のため邁進せんことを期待するものである」と。之に依つて觀るに、日本の對印度精神は昭々乎として明かである。我等印度人たるもの、如何にして此の正論義心に應へずに居れやう。大擧團結して英帝國の不正を討ち、對英獨立戰の放列を施かうではないか。

印度の輪廓

印度が今日、その自由と獨立との爲に、如何に鬪ひつつあるかは、時折の新聞紙が日本國民に傳へる通りであるが、印度の文化、その國民性に就ては頗る誤つた觀察が流布されてゐる。印度は或種の英國人が宣傳するやうな未開な國だらうか、それは現代的文明に何のかゝはりもなき熱帶の亡國に過ぎないだらうか。

印度は古い國である。その建國は遠くモーゼやフアラオの時代まで遡る。また、人口も南北アメリカを併せたより多く、支那に次ぐ世界の大國である。

歐洲が未だ文化が開けず、無知蒙昧の時代に、印度は既に最高の文明に到達してゐた。その文化の恩澤を被らなかつた國は無いであらう。現代の印度も決してそれ以下にはなつて居ない印度はアレキサンダー大王に對し、當時抵抗して、その野心を挫折し得た唯一の國であつた。印度は世界に於ける六つの大宗教のうち、その二つを生んだ。又、世界の七大敍事詩のうちそ

の二つを作つた。東洋のシェクスピアと呼ばれる、カリダーサ（Kalidasa）を生んだのも印度である。又、數學の根柢であり、近代科學の基礎である十進法を發明し、世界最初の文明に貢献したのも印度であつた。否、印度は殆どあらゆる科學の創始者であつたといふことも出來る。

今日でも印度はその憐れむべき奴隷の境遇にありながら、多くの著名なる學者を有し、其の或者は物理學の方面にノーベル賞を得た。

印度の建築はギリシア、ローマに匹敵し、殊に其の寺院建築は世界の驚異である。

若しH・G・ウエールズの言を眞なりとすれば、印度は世界六聖人のうち二名を有する。それは釋迦と阿育迦王とである。現代に於ても、世界最大の偉人の中へラビンドラナート・タゴール（Rabindranath Tagore）と、マハトマ・ガンヂー（Mahatma Gandi）を入れることが歐米の習慣になつてゐる。

印度は、文學、藝術、哲學、宗教方面に世界に貢献したのみならず、政治家、財政家、軍人技師等にも世界的な人物を輩出してゐる。

ともかく、世界人口の半を有する亞細亞の精神的の父は印度であつた。

その印度が貪慾飽くことを知らぬ英國の爲め、その富を奪はれ、自由を奪はれ、獨立を奪はれた。

斯の如き歴史を有し、斯の如き能力を有する印度國民は何時までも現在の奴隷の境遇に甘んずることは出來ないのである。今こそ吾々印度人は二千五百年の間、住みなれた領土を奪ひ返すために何ものを措いても我々はこの當然の權利と使命を、闘ひとらねばならないのである。

ガンヂーとネール

一

シンガポール、ラングーンの陷落、蘭印の全面的降伏につゞいて日本海軍のベンガル灣進出は、印度問題の重要性を急激に增大するに至つた。印度の向背が英帝國の運命を根本的に左右する鍵である以上、英國政府としてはこれが解決を焦らないわけには行かない。チャーチル內閣がその副首相格ともいふべき國璽尙書クリツプスを印度に特派した理由も勿論こゝに在るのである。クリツプスによつて携行された英國政府の印度問題處理案が果して如何なる結果を生んだかは別として印度問題の處理に當つて英國の直面する最大最後の敵手は國民會議派を中心として結成されてゐる勢力である。而してこの派の印度に於ける最高の指導者はガンヂーであり、現實的闘爭の代表者はネールである。從てこの兩人の人物を知ることは、印度問題今後の

動向を察する上に最も主要なことの一であらう。

二

ネールは若い時政治にあまり關係しなかつた。彼の父は財產も相當あり、インド國民會議派に入り、大立物となつて國民會議派を牛耳つた。その時にネールは政治に興味を持ち始めた。ネールは辯護士として英國の敎育を受け、辯護士として一生を終らうとしたのだが、インドの現實と世界の大勢はそれを許さなかつたのだ。

彼はヨーロツパ及びロシア等を廻つて歸つた時は左の方であつたが、極く輕い社會主義者といつた程度だつた。インドの將來に濠洲と同じやうな實現を要求してゐたガンヂー等が彼にとつては生ぬるく、ドイツに亡命してゐるボース氏と共にインド國民會議に、戰ひ拔くことを主張しインド獨立を宣言した最初の人が彼である。

インド獨立は三十四年前から唱へられてゐたことは事實だが、國民會議派の言論はネール程激しく鼓動してはゐなかつた。單なる自治體を要求したが、ネールは完全な獨立を主張したの

だ。

ネールの人氣はこの後に出て來て青年等から恐ろしい勢ひで讃美せられるやうになつたのである。

ガンヂーは漸進主義だが、ネールは急進主義だ。ガンヂーは非暴力主義だがネールは暴力でもなんでも獨立へ必要な手段はとらねばならぬといふ主張の下に闘爭した。そのため數回に亙つて投獄され、數回に亙つて壓迫を受け、一昨年再び投獄されたが、英國のインド國民會議派に對する懐柔策によつて幾何もなく釋放された。だがネールが出獄して見ると世界の情勢が一變してゐた。

ネールはかういふ狀態になつてはどうしても武力によつてのみ獲得出來る、といふ信念のみがあつた。ガンヂーの合法的不服從的政治運動の時代は最早や終つた、と彼は觀てゐた。

だがガンヂーとネールとは互に他を推重し敬愛してゐる。たとへば一九三三年五月、國民會議とインド官憲との闘爭が極度に激化した時、ガンヂーがエラヴダ監獄内において三週間斷食を行ふ數日前、獄中よりネールに宛てた書簡はガンヂーが如何に彼を親愛してゐるかを立證す

る。「事柄の眞相がわからぬ自分に何がいへようか、余は未知の國土で道に迷つた感がする。貴下のみが唯一の道しるべで、暗闇を手探りで歩まうとするが、蹉いてばかりゐる。何事が起らうとも、余の愛情と思想とは常に貴下と偕に在る」ネールはまたガンヂーに對して至深の敬意を拂ひ、彼の生涯に最も深刻なる個人的感化を與へた者は、彼の父モテイラール・ネール及びガンヂーだといつてゐる。

三

しかもこの偉大なる兩インド人はその性格において、その心情において最も著しい對象をなしてゐる。先づガンヂーの性格は徹底した宗教的なのに對して、ネールは飽くまでも理論的である。ガンヂーに從へば「結局我等はすべて神が考案せる劇中の人物である。シェクスピアの戯曲にあらはれる人物が、その役者に對してもつと同樣の關係を我等は神に對して有する」これが彼の根本心體である。だから彼は常に祈禱し、しば〳〵斷食する。「斷食は心を澄ませ雜念を去つて、根本的なるものと、時として宇宙の太靈と感應動交するためである。斷食潔齋しな

ければ、余は眼を失へるに等しい。けだし眼は外界を觀るものであり、斷食は內界を觀るものであるから」と彼は叫ぶ。彼はその性格並に哲學において、紛ふべくもないインド教徒であるが、キリスト教にも好意を示し、回教にも敬意を拂ひ、乃至一切の既成宗教を容認する。彼に從へば、インドは宗教の國なるが故に、決して政治家によつて統一せられることなく、たゞ聖者によつてのみ導かれるものである。

だがネールは宗教に對して何等の敬意をも拂はない。彼はいふ。

「インドは何をさておき宗教の國であるといはれ、インド教徒、回教徒、スイフ教徒及びその、他が、みな彼等の信仰を誇り、死を以てその眞實を立證せんとする。しかもインドの他面において、いはゆる宗教または少くとも既成宗教の現狀は余をして嫌惡の念に堪へざらしめる。余はしばしばこれを非難し、かつこれを掃蕩し去らんことを望んで來た。ほとんどすべての場合宗教は盲信と反動、獨斷と頑迷、迷信と搾取、既得利益の擁護に味方する。余は宗教にはそれ以上のあるものが存すること、人間の至深の要求に應ずるあるものが存することを熟知してゐる。しかも既成宗教はその過去が如何にあつたにせよ今日においては概ね眞實の內容を失ひ盡

した空虛なる形式に墮してゐる。個々の人間が環境と境遇とを超越して偉大なる精神的高峰に登ることは可能であらう。然も多くの團體または國民にとつては內面的向上の途を求むるために先づある程度の外面的發達を必要とする。經濟的事情の犧牲になり生きんがための苦鬪に束縛擊肘せらるゝ人間が、高い內面的自覺に達し得ることは至難である。蹂躙せられ搾取せらるゝ階級は、決して內面的に發達すべくもない。政治的並に經濟的に他國に隷屬し、束縛、擊肘せられ、搾取せらるゝ國民は決して精神的成長を遂げ得ない。だから內面的發達のためにも外面的自由と適當なる環境とが必須條件である。內面的發達を妨げる一切の障碍を排除するために、この外面的自由を獲得し、かつ環境を改善せんとする運動に際して、當面の眞個の目的を失敗に歸せしめるやうな手段は取りたくない」

ガンヂー翁が、手段は目的よりも重大だ。といつたのはこの意味であらうと思ふ。たゞしその手段は、目的達成に役立つものでなければならぬ。しからばそれは努力の浪費であり、時としてはかへつて內外兩面における一層大なる墮落に陷ることさへある。

かやうにガンヂーは宗教の大らかさの中に沒入した宗教聖者的人物なのに反し、ネールは、

宗教の極致絶對は認めるにしても、なほかつ我々はインド獨立のために働かねばならないとする、活者的、政治的理智の意欲の人であることがわかる。

四

兩者の風貌はまたその性格の相違するが如く違つてゐる。ガンヂーは鋼色の顔と肌と、灰色の坊主頭と、骨張れる頬と、優しい小さな褐色の眼と、ほとんど齒のない大きな口とを持ち、そして更に大きな鼻と、痩せた手足とを持つてゐる。あたかもアジアの最も醜く、最も貧弱な最も弱々しい男である。この醜く弱々しい風貌の中に最も美しくかつ強い魂と、最もたくましい精力とを宿してゐるのだ。しかるにネールは軀幹長大、眉目秀麗、態度また優雅にして莊重である。彼は平素國民會議制服の白衣をまとつてゐるが、そのガンヂー帽をかぶれる姿はわけても美しく見える。その上實物よりも寫眞が一層立派に見える幸運者の一人であるとつけ加へて置かう。

ネールの魂もまたその風丰の如く清純であるであらう。往々にして彼はあまり清廉でありか

つ潔癖であるために、政治家とし成功せぬであらうといはれた。ガンヂーは定義に拘泥せず、常に妥協し、しば〳〵讓歩し、その目標は不變であるが、この態度は變通自在である。かつてインド回教聯盟の指導者ジンナーは、ガンヂーが數回に亙つて發表せる「インド獨立」に關する七箇の互に相異なる定義を列擧し、そのいづれが眞實なりやを彼に向つて質問した。しかるにネールは飽までも良心的に定義を作り、嚴格にこれに從ふ。彼はその愼重に擇べる一路を邁往し、妥協を惡み變通を厭ふ。彼には微塵もいはゆる芝居氣がない。彼は謙遜で愼み深く、語る時には常に控目に物をいふ。政治的集會においては、彼の演說は大學教授の講義に似通つてゐる。

彼は自ら馴々しい態度を取らず、他人の無作法なる差出口を好まない。彼は群衆に親しみ、群衆もまた彼に親しむ。しかしながら彼は自分を忘れるほど群衆と親しくなれ得ない。彼は常に群衆の中にゐるが決して群衆のものではない。

ネールは寂寥の人である。彼は中世紀的なインドに生れ、西歐的教養の下に徹底せる近代人となつた。「余は、東洋と西洋との奇妙な混合物となつた。余はいたるところにゐづらく、どこ

にも故郷がない」と述懐する。彼は誠に西歐人となれるインド人、社會主義者となれる貴族主義者、民衆指導者となれる個人主義者である。彼はその複雜な性格、高貴なる品性、無比の健康、無限の精力、事務の才幹を以て、インド獨立の戰士として、その後二十五年の善戰健鬪を續けて來た。三十二歳の時に初めて獄に投ぜられてから下獄實に八回に及び、人生の最盛期を鐵窓裡に過した。

この鐵窓裡は彼をして偉大なる鐵心を造り上げたのである。

ガンヂーは大東亞戰爭の推移に判斷を下してこの國民會議派指導者の地位を退き、このジャワハルラル・ネール氏を彼の後繼者としたことは「後の人が暴力が必要だとあればその暴力を以て起て」といふ暗默の許可でなくて何であらう。おゝ偉大なる聖雄ガンヂーよ、とガンヂーに祈りを捧げると共に「我々はたゞ搾取され、不當に壓迫されてゐるといふだけで英國を憎んでゐるのではない。そも〳〵英國がインドを統治することが間違ひなのだ。英國が東洋にまで來て支配的地位にあることが根本の誤りなのだ」といふ信念を抱いてゐるネールの成功の早からんことを祈る。

印度獨立運動多難の歴史の上に印度國民的指導者としてのサバルカルの名もまた忘れてはならない。彼こそは二十世紀初頭に於て、印度獨立のために生命を賭し、常に印度獨立の炬火を燃やし續けた人である。この熾烈なる愛國心、勇氣、冒險の犠牲的精神の權化たるサバルカルに就ては後に詳しく述べることにする。

英米文明の解剖

西洋人は東洋人以上に種々の政體を使用して來てゐる。彼等は強制より逃れんがために、それを行つて來たのであるが、此の目的を首尾よく遂げることは出來なかつた。蓋し強制は人類社會に常に存するため之を逃れることは全然不可能だからである。

若し人間が社會を離れて隱遁生活をやるならば、その時に於てのみこれから遁れ得る望みがある。西洋人は政府の壓制を遁れんとして單に一の壓制形式に替ふるに他を以てしたのみであつた。否寧ろ今日の西洋の民主政體は、あらゆる手段を以て個人の自由を妨害してゐるのである。

西洋の政府は、古來貴族政體であると、民主政體であるとを問はず、人民の思想及び信仰に容喙してゐる。古代にあつてアテネの民主政府は、ソクラテスが彼の思想を町の青年に教へたとて死刑に處し、又プラトン、アリストートル、其の他の哲學者をも同じやうな理由で迫害し

た。中世紀に於ては、ユダヤ人が全歐洲諸國に於て迫害された。それより少し後になつて、新教徒政府はローマ・カトリック教國の臣民を迫害し、ローマ・カトリック教國政府は新教徒の臣民を迫害した。スペインの回教徒はグラナダ (Granada) の滅亡直後、スペインのキリスト教政府のため放逐され撲滅されたのであつた。

西洋の社會主義政府の支配下にあつても、個人自由の程度が非常に多いと云ふわけではない。何故ならば社會主義者は、個人を單に彼等の國家と云ふ機械の一部に過ないと考へてゐるからである。ロシアのボルシエヴキーキ・ソヴイエット政府の現狀が既にこのことを立證してゐる。

然るに東洋の專制政府は、古來個人の自由を西洋の民主政府の半分も妨害しなかつた。戰爭が嫌ならば個人の出征を強要もしなかつた。此のために印度人及び支那人の間には尚武の精神が發達しなかつた。彼等はその平和の本能のみを發達せしめ、東洋以外の國に起つてゐる戰爭には無關心に、農業であれ、藝術であれ、彼等の本職をやり續けた。印度及び支那の專制政府は又思想や信仰上に於て人民を迫害しなかつた。單にその說が容れられないために、印度や支

那から逃れなければならなかつた哲人は一人もなかつた。然し余は東洋の專制政府は缺點なきものと云ふてゐるのではない。

彼等も多くの缺點を有し、且つまたその缺點は非常に大なるものがあつた。唯余は全體より見て、その缺點が西洋の民主政府のそれにもまして重大であつたか否かをいぶかるものである

西洋人は個人を家族の羈絆より解放したと誇らしげに東洋人に語る。個人がその家族の年長者に依つて、過度の强制を蒙らないことは勿論望ましいことである。而して東洋に於ては家族制度觀念から、すべてを兩親のために犧牲にしようとする男女が現に澤山にある。然るに西洋に於て、個人の家族よりの解放は、却つて利己心を發達せしめるに至らしめた。それ故すべてを其の家族のために（恐らく、妻子を除いては）犧牲にしようとする人々の數は、次第に減少してゐる。西洋に於ける家族制度の崩壞は、また個人が公共の恥を感ずることを鈍らせつゝある。東洋人は强い家族的觀念より、自己の惡癖を恣にしてはやがてそれが家族に齎す不名譽を考へる。是に對し西洋人は往々にして個人のことのみを考へるので自己の惡癖に抑制がなくなる。

吾人は諸制度を年代的見地からでなく、倫理的見地より判斷しなくてはならない、一制度が良いと云はれるのは、人類の過半によりよき、又より高き義務の理想や自己犧牲を紹介するに力があつたからである。

東洋の社會は、社會の安定を理想とし、階級鬪爭を來らしめなかつた。東洋民族は確かなる價値あるものは動かすべからずと考へ、決してそれ等の價値を疑ふことなく、その社會を他の價値觀の上に建てなほそうとしなかつた。印度や支那の社會にあつては、聖賢は常に上位に置かれ手工業者は常に下位に置かれた。印度や支那の社會の立法者や指導者をしてさうさせたのは、不合理な偏見や人道觀の缺乏からではなかつた。彼等がさうしたのは聖賢の資質を有し學識あり、又叡智に富む人々は、國の文化を作る上に手で仕事をしてゐる人々よりも、一層影響を及ぼすことを信じたからであつた。無論肉體的勞働も必要である。然しながら、それは知的精神的勞働に優り、或は同等であると云ふ理由にはならない。文明と云ふ語が、若しも文化及び教養と云ふ語と同意語であるならば、その基礎として肉體的勞働を持たねばならぬと共に想像力と叡智を其の眼として缺くことは出來ないのである。

是に反し西洋の社會は進歩の理想を追求した。故に西洋の社會では、絶えざる階級闘爭の外は何ものもなかつた。西洋人は如何なる價値も永久的のものと考へることが出來なかつたからである。斯て階級闘爭は西洋史のページを先づ最初から赤く染めてゐる。古代ギリシア及びローマにあつては、奴隷と平民が彼等の主人、貴族に對して戰つた。中世紀に於てはバロン（大地主）が王侯に反抗し、現在では勞働者が資本階級、又、屢々他の階級も對抗してゐる。それ故共殺的戰爭は西洋の社會にあつては慢性病となつてゐる。然し、それが社會のためになると云へる人があるだらうか。それは唯團體的利己主義――一集團の他の集團に對する勝利の要求を齎すものに過ぎない。權力を爭ふ種々の集團の成員は常に言ふ――彼等の手に權力を收めない間は――彼等は最も高き理想のみを求むるものであると。然し乍ら一度權力を得るや彼等は前言を忘れ、彼等の前に權力を掌握せる集團の如く、貪慾なる集團的利己主義に奔るのである。

西洋の進歩追求の理想が本質的に闘爭創造の理想であると云ふことは、西洋の社會に性の闘爭を齎したと云ふ事からも知ることが出來る。西洋の婦人は自由をきめこんでゐる。さて其の

自由とは如何なる意味かは何人も云ふことが出來ない。絶對的自由は勿論人類社會に於ては存在し得ない。我々は我々の自由を社會の他の人達のために制限しなければならぬ。我々は我々自身のみでなく、他人の幸福を考へることにより、道德を創造する。それ故我々は男に、或は婦人が、自己を考へずに他人のことを考へると云ふ種類の自由を持つことを稱讃しなければならぬ。然るに東洋の婦人はこの種の自由を持つてゐる。彼女等は多くの西洋の婦人が考へてゐるやうに、社會のとるに足らざる動物でもなければ夫の奴隷でもない。妻はすべて、家庭的事件に於ては夫を支配してゐるのである。而して子供等は、あらゆることに於て、あくまで母に從ふ。妻は夫にもまして子供の教育及び結婚を監督する。

然しかくも精力を有するにも拘らず、己自身のことを忘れてゐる。彼女等は自分自身より以上に夫や子供のことを考へてゐるからである。

然し東洋の婦人が自己完成の理想を持つてゐないと考へてはならない。彼女等はそれを今日西洋の婦人と同じ程度に持つてゐるのである。唯自己の要求を彼女の家族の要求に次ぐものとする方が、家族に反抗する場合以上に自己を完成せしむと考へるのみである。之に反し近代の

西洋婦人は、自己の要求實現は沒我と相反するものだと考へるが故に、家族の要求に對抗し、自我を通さんとする。

民族の理想も結局は民族の特性の表現である。西洋人は本質的に好戰的である、斯て、階級鬪爭や、性の鬪爭が西洋の社會に起つたのである。

宗教は、決して西洋人のものとならなかつた。彼等は本質的に鬪爭的民族であるからだ。個人主義の發達は、又西洋宗教の發達を妨げた。個人主義は個人をして教育又は信條に服從する必要なしと考へさせ、彼自身一個の宗教を有することを得と思はせる。斯て社會に於て各個人間の結合體となるべき宗教は却つて乘離の源となりつゝある。此個人主義の結果として、西洋に於ては又度々新宗教が勃興し、東洋からも宗教を求めつゝある。然しそれは或る人々が考へてゐるやうに、西洋人が、宗教的になりつゝあることを意味するものではない、寧ろそれは彼等が非宗教的であることを意味するのである。何故ならば、人々に眞に信仰への歸依心がある時は、一つ以上の宗教を必要としないからである。一宗教は種々の民族により彼等の特性、或は時代の精神に適合するやうに、種々の樣式に解釋されるであらう。又惡性を思惟される際に

は改革すらも許さるれのである。

然しながら本質に於ては、種々の宗教は互に大なる相違を持つてゐないのであるから、他の宗教のために、從來の信仰を拋棄する必要はないのである。

進歩に對する熱情があるに拘らず、近代の西洋は教育に就ては進歩するよりも寧ろ退歩してゐる。抑ゝ古代ギリシヤに於て、教育は人間の圓滿なる發達を目的としたものであつた。然るに近代の西洋に於ては、教育は專門的になつた。それ故男子も婦人も往々にして四半分或は半分の發達しか遂げないものがある。近代西洋の教育に於て、注目すべき今一つの傾向は、知識に余り多くの重要さを置き過ぎ、人間の他の能力、特に道德性や、靈性を重視しないことである。

東洋は主觀的科學を數千年以前に發達せしめたが、西洋は未だそれ以上に進歩させることが出來ないのである。東洋は又客觀的科學を發達せしめた。エジプト人、バビロニヤ人、支那人、印度人、アラビヤ人はそれ〴〵歷史上、客觀的科學の指導者であつた。然るに第十八世紀以來西洋も亦客觀的科學を重視するに至り、第十九世紀及び二十世紀には之を東洋が凌駕し得ざる

までに發展せしめた。然しこの燦然たる科學の發達は、すべてが人類のためにはならなかつたそれは侵略的軍國主義を助長し、遂に人類を其の發明に依り一二世紀の間に自滅するやうになりはしないかといふからしめる程になつた。少くも科學的發明の惡の方面が將來人類に依つて濫用されないとは考へ得ないのである。

何となれば、人類は天使にあらず、又あり得ないからである。彼等は常に二分の一は天使、二分の一は惡魔と云ふ現狀を維持するであらう。

次に西洋產業主義の矛盾を觀察するに、それはよし滑稽でなくても、極めて妙なものである卽ち一方に於て、それは西洋の社會に個人主義を發達せしめ、又他方に於ては人間を機械化することに依り此個人主義そのものを破壞しつゝあるからである。又それは藝術家、工藝家をして、その作品の藝術的價値より寧ろ市場的價値を求むるに至らしめ、彼等の製作に對する悅びをぶち壞したのである。

それは又人間のくつろいだ氣持、及び知識のために知識を愛する精神を驅逐した。審美的科學及び思索の才能——人間の心的發展は、實にこれに依るのである——を失ふやうになつて來

た。またそれは彼等の幸福を失はしめた。西洋諸國は、目下失はれた幸福を探求するに忙しいが、然もその方向を誤つてゐる。西洋は欲求を減ずるよりも、寧ろ增加するに依つて、それを再び得らるゝものと考へてゐる。人類同胞の理想、社會の安寧の理想等が、近來西洋の社會に發達したのは、產業主義のつくり出した非人間的生活に對する反動の結果に外ならぬ。然し、これ等の理想は西洋の社會に深く植付けられてゐるのではなく、唯表面的のものである。何故ならば、それが東洋に於ける如く社會に深く植付けられて居る際には外部の知的表現は必要でないからである。

西洋がつくり出しつゝある藝術及び文學は、如何に西洋が民本主義的理想より貴族主義的理想に「進展」しつゝあるかを示してゐる。古代ギリシヤに於て、ホーマーの詩や、エストラスの劇は、すべての人々のために書かれ、又演ぜられた。中世に於てはトルーバドールやトルーヴルは彼等の歌を王侯のためと等しく、農夫のためにも歌つた。ゴシツク建築の寺院、又コチブエやヂョツトオの繪畫も亦あらゆる人々のために描かれた。然るに個人主義が西洋に發達したため、藝術や文學は、唯少數の者のためにのみ製作し初められた。ロバート・ブリッヂの詩

や、エプシュタインの彫刻は英人全部のためでなく、一部の英人のためにつくられた。近世の西洋藝術家は、彼等の作品を一部の人々のためにのみ製作することに依り、社會に於てそれ等一部の人々と、其の他の人々との間に深淵をつくりつゝある。西洋諸國の政府が其の人民の間に統一感をつくり出さうと努めてゐる間に、西洋の詩人や藝術家は彼等の人民を種々の階級に分ちつゝあることは、如何に矛盾したことであらう。

西洋の民族が進歩を以て理想とするのは、絶えざる變化こそは正しき方向に對する絶えざる進歩を意味するものと信ずるからである。彼等はその國の歴史を以て彼等を漸次完成に導く直線なりと考へてゐる。彼等は本質的に唯物的民族であるが故に、此進歩の理想を追求するのである。民族が歴史の或時期に於て、唯物主義的に絶えず進展するのは眞實である。然しながら民族の道德性及び心性がさうした唯物的發展と並行して發達しないといふのも等しく事實である。

近代西洋文明の例をとつて見よう。それは宗教迫害、拷問、奴隷制度、其他舊時代の惡弊を廢したであらうが、又新たなる惡、舊時代のそれよりもつと惡くないとしても少くとも同樣に

惡い習慣を創造してゐる宗教戰爭は、經濟戰爭に場所を讓つた。家庭内の奴隷は工場の奴隷制度とかはり、淫賣は前例なきまでに增加した。

近代の西洋は、完成——我々人類にとつて可能なるは制限ある完成あるのみ——は絶えざる變化に由るのでなく、適當なる撰擇と削除にあることを知つてゐない。一つの圓内に住すべし而してそれより、汝の完成の理想を挫きさうに思はれるものは、すべて除くべし。汝に全く適合せぬもの、又は汝の實現せんと欲する高き理想に抵觸するものは棄却すべし。古代ギリシャ人がこのことを理解してゐたのは彼等の藝術が示すが如くである。然るに近代の西洋人は子供のやうである。彼等は互に矛盾するあらゆる種類の知的、又唯物的觀念を結合せんと欲し、しかすることに依つて、完成に進みつゝあるものと想像してゐる。完成に到達するためには、吾人は綜合精神を創造しなければならぬ。然し西洋の國民は、綜合する代りに、人生を互に爭ふ幾多の斷片に碎きつゝあるのである。

更に産業主義は近代西洋人を時間の奴隷にした。懐中時計や柱時計は歐洲民族及びアメリカの民族の神々になつた。而してこの時間の奴隷は、彼等をせかせかの神經病にした。かくて彼

等をして適當なる道德的、精神的發達を成すは不適當たらしむるに至つた。何故ならば、せかせかの神經病者が非常に道德的又精神的であることが出來ないのは、明白なことであるからである。

知力の神聖視は勢ひ西洋民族をして知識と叡智を教授と教育とに混同せしめた。彼等は叡智と教育とは人間の分限內の圓滿なる發達の所產であり、知識と教授は人間の智力の目的なき擴張と展開を齎すに過ぎぬことを悟らない。

近代西洋文明は、ギリシヤ、ローマ及びキリスト教思想の混合物である故に渾沌としてゐるし、不調和なものである。ギリシヤ人やローマ人が追求した自負心、英雄崇拜及び此世の唯物的享樂に對する激情が、如何にしてキリスト教の教ふる人類愛、人道主義、聖者に對する尊敬と調和し得るであらうか。

西洋文明は、種々の民族の間に、他の如何なる文明よりも大なる敵愾心をつくり出した責任を持つ、アラビヤ人が黑人やスペイン人を其の民族的相異の理由から輕蔑したことは減多になかつた。彼等の偏見は——他の回教徒の如く——主として宗教的のものであつた。支那人は、

現在否寧ろ過去に於て他の民族に對して一種の反抗心を持つてゐた。然し彼等が他のすべての民族に優るものであることを立證するため多くの書物を著したことはなかつた。又彼等は現に西洋人がしてゐるやうに、民族の名目の下に、其の國民を刺戟して戰爭に奔らしめたこともなかつた。——人間の皮膚の色に對する偏見も亦、西洋文明の特徵である。支那人、印度人又はアラビヤ人は、自然彼等自身の肌色を重要視したが、決して近代の歐米人の半分ほども肌色の違ふ人種を輕蔑したことはなかつた。

民本主義が、實際は西洋諸國の過半に於て人民を充分に支配してゐないことを示す事實の一は、支配者がその人民に對し流行の魁をなすことに依つて窺はれる。例へば英國に例をとらうそこでは國王や皇后のなさることは、何でも人民によつて模倣せられる。或日、皇后がある特別の色の上衣を着用される。直ちに全社交界の婦人は同じやうにする。而してその流行は往々にして中產階級にまで模倣される。國王が柄のないフォークで特別な樣子で食事をなされば直ちに臣下も同じことをする。然し西洋の民族が眞に民主的であるならば、彼等は——彼等の國王や皇后の眞似をする代りに——國王や皇后に彼等を模倣せしめることゝなるであらう。民本

主義の國に於ては人民を代表するのが國王や皇后であり、國王や皇后を代表するのが人民でないからだ。

西洋人が好戰的であることはキリスト以前の時代より今日に至るまで余り多くの武人を重視し過ぎた事實から知ることが出來る。一日彼等の歌ふはアレキサンダー大王の功績であり、次の日にはナポレオンに夢中になる。三日目にはヒンデンブルグやフオツシュの如きを神の如く崇める。

西洋人は或場合には詩人をもてはやし、次には映畫の花形を三度目には又スポーツマンをもてはやす、それは彼等の眼前に道德的、若しくは精神的目標を持つてゐないことを示してゐる若し彼等が眞に品性の偉大さや、文學的又は藝術的天才を尊敬するならば、彼等は、決して夢にも是等の低き型の才能を有するものを稱讃はしないだらう。聖者若しくは哲學者の崇拜とフツトボール競技者の崇拜とは決して並行しないであらう。

亞細亞人の責務

英米系白人の覇權に反抗し、政治上及び經濟上に於ける地位を向上せしめんとする要求は、黑人の間にも浸透して來た。實に彼等黑人は、英米系白人帝國主義の下に、永い間非常なる虐待を受けて來たのである。過般ジヤマイカのキントガンに於て、第七回會議を開いた世界黑人大會は、彼等も亦人類當然の權利を要求する資格ありとした。凡そ地上に如何なる民族と雖も黑人程甚しく英米系白人の暴虐を蒙つたものはない。彼等は歐羅巴人、殊に英吉利人から、其の故國を奪はれた許りでなく、彼等自身は文字通り木樵りや水汲みの如き悲慘な境涯に陷つたのである。

黑人が英米系白人の下に受けた虐待は、世界史の最も忌まはしい汚點をなしてゐる。亞弗利加に於て彼等は今尙人間として見られず、まことに慘めな非人道的な取扱ひを受けてゐる。亞米利加には黑人が千萬人以上居るが、彼等も亦嚴格なる差別待遇を受け悲慘な境遇にある。其方面の權威アーチバルト・バツトレツヂ氏に依れば、亞米利加の黑人、殊に農場の黑人は、單

に雨露を凌ぎ飢餓を免るべき最低の衣食住にさへ窮して居ると云ふ。氏は黒人を稱して奴隷制度に依つて臺無しにされた民族であると云つて居る。追放、差別待遇、選擧權拒絶、私刑、これが彼等黒人の運命である。

然も今や黒人は、自力でその境遇を改善せんと努力しつゝあるが無力の彼等には此の運動が思ふ樣に進捗しない。然もこの問題は單なる黒人のみの問題ではない、それはまた亞細亞人の問題である。亞細亞がこれ迄の如く微力であり互に孤立して居る限り歐羅巴人は、亞細亞に對し易々として其の搾取を續け、まる〳〵肥ることが出來るのである。然し乍ら一旦亞細亞が亞細亞本然の姿に開放されたならば、全亞細亞は歐羅巴の搾取を拒絶し、彼等の力を排除することが出來るのである。而してその時こそ、黒人のみならず、地上のすべての被壓迫民族が救はれる時である。されば亞細亞民族は、人道上、重大なる責任と義務を負ふて居るといはねばならぬ。亞細亞の獨立は世界の解放を意味する、全亞細亞は亞細亞を自由且つ獨立ならしめんがため、瞬時も速かに渾然一體の努力を爲さねばならない。

アジアがナポレオン時代まで卽ち一八一四年まで(それは恰度、歐洲戰爭の勃發より百年前で

あるが)政治上、經濟上、文化上その他多くの點で歐羅巴人より遙かに進んでゐたといふことは、萬人の等しく認める事實である。卽ち亞細亞が退歩し初めたのはその時より後のことに過ないのであつて、その原因は歐羅巴が主として機械工業を採用したことに基づくのである。卽ち彼の産業革命は歐羅巴に急速の進歩をなす機會を與へた。而して亞細亞は機械力を用ゐることを躊躇した。かくて曾ては世界の指導者であつた亞細亞が、あらゆる方面に一歩一歩と其の立場を失ひ遂に日露戰爭に至つた。然しこの戰爭は亞細亞復興史に於ける轉換期であつた。

當時アジアの大部分の國々は、歐羅巴の屬領とされ、或は歐羅巴の勢力範圍とされてゐた。アジア人は歐羅巴の勢力に打たれ、殆ど催眠藥をかけられたやうになつてゐた。彼等は間違つてゐたことではあるが、英米系白人があらゆる點に於て非白人に優れてゐると信ぜさせられた。併し此の幻覺は長くは續かなかつた。日露戰爭に於て日本がロシアに勝利を得、その後世界の一等國の一として數へられるやうになつてから、アジアは眠より醒まされて正氣に立ちかへつたからである。

アジア民族の過半は、今時大東亞戰爭の起る迄尙、日露戰爭の意義を深く把握しようとしな

かつた樣である。彼等は單にそれを日本とロシアに影響を及ぼしたものとのみ考へてゐる。併し實はこの戰爭の結果がアジアの全部に大なる影響を與へたのである。數十年間深い眠りにおちてゐたアジアは初めて目を覺まし、自己身內に潛める力、世界の他の大陸の民族に少しも劣つてゐないといふ否定すべからざる事實を悟るに至つた。この戰爭は自然、アジアの男子、婦人、子供の一人一人の心の中に、完全自由の生活獲得に對する燃ゆるが如き要求を植え付けたのである。

アジア更生の運動が、この廣大なる大陸の各國に興つたのは、實に日露戰爭の時からであつた。彼等の國を外國の勢力範圍から自由にする目的を以て、青年トルコ黨がつくられたのも、青年ペルシャ人が祖國の獨立のために團結したのも、青年印度人の魂が刺戟されて獨立獲得運動に乘り出したのも、支那が眞の「支那民族で成り立つ、民族のための、又民族による」政府を夢み初めたのも、日露戰爭以後のことであつた。他のアジア小國も多年の昏睡から覺め、人類の進歩のために、今まで失つて來た時間を償ふべく努力し始めたのであつた。斯くアジアは全部新しき生命、新しき抱負、又新しき大望に胸をときめかし始めたのである。

斯てアジアの復興運動は日露戰爭の結果として眞劍に始まつた。而してこの戰爭は、ナポレオン時代以來、初めて「白人主義」又は「白人優越」の說を破り、且つアジアが歐羅巴に對し、あらゆる方面で自己を主張し得ることを論證したのであつた。

最近二十年間、この復興運動は、素晴らしい發展を遂げた、若しこの狀態で進展するならば而して現實は世紀を劃す偉大なる跳躍を遂げたのであるが——アジアは次の十年間に歐羅巴が幾百年もかゝつたことを成し遂げるであらう。然しアジアの使命は歐羅巴のそれと全く異るのである。西洋はその勢力と知識を人類のために使用せずに、自己の勝手な目的及び自利擴大のために用ひ、幾百萬の人間を犧牲にしたのであつた。之に反し、獨立及び自由を得たるアジアは、自己の利己的利益のためでなく、世界の平和のために、また階級、主義、皮膚の色及び宗教に關係なく此の地上の全人類の幸福と滿足のために盡力するであらう。即ち獨立アジアの主たる使命は、全人類を幸福にし得る新文明を產み出すことである。

故に、アジアの男子、女子及び子供の是非ともなすべき義務は、彼等の些細の意見の差異や論爭又は軋轢は互に步み寄り、この獨善利己主義的な英米系白人勢力を亞細亞の東と西の突端

より完全に放遂せしむるやう最上の努力をなすことである。

而して、名實共に亞細亞人の亞細亞と云ふ自覺に立ち還つた時こそ、神が全人類に與へた能力を、その神の子としての榮光に於て、各個の民族の本質と文化的感覺を繼承し、亞細亞人の亞細亞と云ふ全體を形成する各單位として、各も各もが全亞細亞復興の理念に歸一統合することに依つて、民族本然の姿に復歸するのである。

既に今次大東亞戰爭勃發に依る赫々たる日本軍の戰果と、猛く逞ましい威力は、十一億被搾取有色民族の血脈の中に、誇るべき血と、力の覺醒を與へ、全亞細亞解放の曉鐘を高らかに打鳴らしたのである。

未開民族撲滅の非人道策

一

西洋人は凡ゆる方法で全人類のために恩惠を施したと說く。家鄕を捨て異敎徒の中に出かけ異人種の利益をはかるのは、基督敎精神に依るものだと說いた。そして世界中が漸次その宣傳に聽從して來たのである。

然し果して彼等の口にするやうに、西洋人は他の人種の恩人となつてゐるだらうか。眞に高貴な精神から出た恩惠は、是を施すものが自ら說かなくとも、人間が啞でない限り自ら感じるものであり、感謝せよと言はれなくても凡ゆる手段を以て感謝せずにはゐないものである。然るに西洋人は他人種の中から起らない聲を自分達の仲間で勝手につくつてゐる。

然しなぜ斯く宣傳するかと云ふ大事な點が忘れられてゐる。この點は複雜な面に關係するが

若しこれを究明したら西洋人は幻滅の外は無からう。

今取り上げた點は二つある。その一つは曾つてこの世界に幸福且つ無邪氣な生活を營んだ原始人種が西洋人の活動の結果地球上から消え去り、今日その最後の言葉すら拾ふに由なく唯想像するより外ないことである。第二には今も生きてゐる同じ樣な原始人種が滅び去つた人種の跡を辿つてゐることである。さう云ふ不幸な人種が西洋人をどう考へてゐるか。又どう云ふ疑を持つてゐるかを知ることは勿論不可能に近い。

而して、このことは東洋の大問題として西洋人の間にすらこの事實が論議されてゐることを知るべきである。

西洋人の保護と稱するものほど呪ふべきものはない。その威勢に醉ひしれた西洋人は利己主義を組立て、あらゆるものを驅り立てて來た。而して無辜の人種が幸福な生活を滅ぼされし悲しみには耳を傾けなかつた。

さう云ふ狂暴な西洋的要素を持たない善良な英國の一旅行者は一八九八年アフリカの一湖上の孤島に住む極めて幸福なる一人種の運命を正しく憂へてゐる。ウェザレー氏は言ふ。

「幸福なる島よ、幸福なる島人よ。闘を近づけず汝等曾つて島の外なる世の事を知らず、何等の望みすら持たないかの樣である。わたし達は欲しいものを皆持つてゐるのだと汝等は言ふであらう。文明があらゆる害毒を持ち來すことなくかゝる狀態がいつまでも續けられ、平和と幸福とに滿ちてあれ」

嘗て多くの人種が滅びてゐるが吾等は西洋文明人の彼等がなせることを明かに知り得ない。而して多くの人種が今も尙文明の惠みに浴せずにゐるが、滅び去つた人種が今尙生きてゐるとして果して幸福な生活を續けただらうとは考へられぬことである。

タスマニヤ人やオーストラリヤ人は如何なる運命に陷つたか、西洋人がタスマニア島に入ると忽ちその常套的な干涉をやり反抗する者には非人道的な處置をした。この非人道的な虐待は遂に土着民の堪へ難きものとなり、驍て侵入者の若干を××する復讐となつた。玆に西洋人は凡ゆる成人と兒童を捕縛して慘殺した。かくて土着民の人口は西洋人の入り始めた時七千人居たが一八三二年には僅か百二十人に減少し、更にあちこちと逐ひ立てられ一八四七年には男が十四人、女が二十二人、子供が十八人になり、遂に一八六〇年には全部で十六人、一八七六年

には最後の一人が滅びて行つたのである。

二

オーストラリヤの土人も、タスマニヤ土人と同様、西洋人の同化策に反抗したため、非人道的な虐待を受けた。西洋人はオーストラリヤの土人を賤み、人間と見ず犬同様に取扱つた。植民地を擴げて行くほど黒人の命はカンガール並になり、後にフアン・デイメンの地方で行はれた様に、黒人とカンガールは無暗に射殺された。一日のスポーツとして黒人もカンガールも差別なしに射たれた。ひどい奴になるともつと極端に、土人の通りさうな處に毒藥を入れた食物を撒いたりした。

南北兩米のインデアンも同様だつた、南米を征服した西班牙人は土人を一掃し全滅したのである。壓迫がひどい爲、不幸な土人部落が申合せ毒藥を用ひまたは首を縊つて自殺したのである。また親は子供達を殺して後に自殺し、ある土地の土人は申合せて愛妻と別れることにした。「文明の普及」が斯の如くに續けられてゆく間に次ぎ〳〵に種族は死に絶え、あとには文明のみ

が殘つた。エスパノラは以前人口三十萬であつたが、五十年間に亙る文明人の活動に依り、五百人に減り後には最後の一人が消え果てた。ペルーでも、チヤンケーでも其の他の土地でも同様であつた。

北米でもインデアンの毛髪のついた頭の皮に懸賞金をつけ、インデアン慘殺が行はれたことがある。而して僧職にある者がその面白さを人民に說きさへした。かう云ふことが大仕掛けで行はれた時には一種族全部が一度に獵られ、そしてその獲物は大人と子供とに分類され、大人は奴隷に、子供は市場で賣つたのである。

黒人種の國アフリカでは、西洋人大好物のスポーツが出來た。世界は黒人の野蠻なことを語り合つてゐるが、それこそアフリカにゐる西洋人の人道的感情を語るものだ。恐ろしい食人獅子、虎などの猛獸が西洋人の心を躍らした。そして所謂高尚な冒險が行はれるのだ。黒人の中に這入つた西洋人が何をしたかは明かになつてゐる。壓し××された××、所謂文明なるものゝ騷音である。

三

次に吾々は今日忘れかゝつてゐる昔を思ひ出す。それは西洋人がアフリカに入り、ぬれ手で粟の金儲けをやつた奴隷賣買のことだ。家族と愛人の手から引き離し、簡易な草屋暮しの樂しい鄉土からもぎ取られ小動物のやうに荷造りされ、外國に賣り飛ばされた奴隷のことである。

その途中の船で幾萬人が死んだか、誰も心にとめた者はゐない。そんなことよりうまく賣らうと云ふことだつた。さう云ふ西洋人自慢の商賣に關し面白いことが一つある。それは奴隷賣買の法を敎へて呉れたのは實はアメリカの敎會にゐた敎父の一人であると云ふ事である。當時アメリカのインデアンは强制勞役のため急速に滅亡して行つた。そこで信心深い心からインデアンの勞役を輕くするため黑人を船一杯につんで輸入したのである。かう云ふ商賣の善惡はとに角として、西洋人には西洋人として考へ方があるのだらう。然し一體西洋人のどう云ふところが文明人と呼ばるべきものであらうか。

それは既に過ぎた事だ。今はもう無いと云ふ。實はもう買ひ手がないからである。然し法律

が禁止してゐても、やつてゐないとはいひ切れない。唯うまい具合に忘れてゐるのである。

「今でもアフリカの鑛物や、農產物は强制勞働でやつてゐる。アフリカで無くなつたのは奴隷といふ名だけだ」とセシル・ド・バーンズ敎授は言つてゐる。英領南アフリカには最近恐るべき法律がつくられ、西洋人の地主や農業家は、土人とその家族の自由を拘束する樣になつたがその中には體刑が認められてゐる。コンゴーで白耳義人がやつてゐる壓迫はよく知られてゐる。バーンズ敎授によると、

「レオポルド王の代になりコンゴーの資源開發は停止した觀がある。それは曾て千二百萬あつた人口が歐洲にゴムを供給するため、二十年間に八百萬に減少したからである。」と云ふ。

一八九九年にはパリの四十の會社は佛領コンゴーを完全に支配したが、これも土人に强大な强制勞働を課し、歐洲に賣り出すゴムを作らした。また佛領アフリカでは强制兵役を課して同樣恐ろしい害毒を齎らしてゐる。兵士になると家族から引離され、病氣で役に立たなくならぬ限りは歸されない。偶に歸つて來るのは肺病人か梅毒患者である。こゝでは十年間に四百九十五萬人が二百八十二萬千九百八十人に減つた。ポルトガル領でもリベリアでも同樣である。か

くて文明的産業に滅び行く種族はおびゝ切つてゐる。「最初の探險家が肥沃にして豊穣と觀た土地も今は沙漠となつた」のである。最近コンゴーの土人は堪へ切れなくなつて叛亂を起した彼等は椰子園に逃げ出して森にかくれたが、西洋人は忽ち機關銃を持ち出して數千人の土人を射殺した。

四

種族滅亡の活動には、前に書いたやうな直接的方法の外にもつと間接的な狡猾な手段がある。その手にかゝる種族は、文明人の方では原住民を保存するなどゝいふが、結局は滅亡の外はない。土人の中に文明を強制移入することは、土人の道德習慣を無視し、その能力の順應を考へない結果は、社會組織を破壞し種族を廢頽せしめるのである。卽ち土人の社會組織を支へてゐたあらゆる訓練は失はれて行く。この不可避の廢頽は西洋人の乘ずる處となり、土人の婦女と混交してその肉慾を充足する。その結果は混血人種をつくり傳染病を蔓延せしめる。

傳染病の起源は兎に角、曾て傳染病を有しなかつた土人に傳染病を持ち込んだ責任は誰にあ

るか。ムンツに依ると

「白人との混交は免疫性を有しない土人に恐るべき多數の傳染病を持ち込んだ。最初白人を拒んだ種族もその肥沃なる土地を逐はれ、瘦地にかくれて生を保つ樣になり、西洋の衣食住飲酒の習慣を取入れると共に、土民の生活力は破壞されて行つた」

勿論傳染病の全部が白人の混交に依るものではなからう。然し外來者の負ふべき責任であることは言を俟たぬ。大抵は白人に接した土人の女が傳染病を貰つて土人の中にふりまいたものだと言へる。

傳染病の中恐ろしいものは、天然痘、梅毒、結核、チブス等であつて外來の力强い文明が土民を頽廢せしめ、變つた病氣に對する抵抗力のない土民を弱らせ、殆ど土民の全部を滅亡させる樣なことになつた。然し傳染病に罹つたと知つた土人は文明人のところを逃げ出し、元の原野生活に歸り、寒さと風にさらされると始めて恢復する傾向を見せた。

種族混交も原始種族の減少する大きな原因である。頽廢は墮落となり、容捨なき西洋人の威勢に伴ひ土人は恐怖して小さく縮こまる。かくて西洋人は思ひのまゝに土人の女を手に入れて

その慾を充たす。而して混血兒が多くなつて純血の土人は急激に減少してゆく。

南北アメリカにある純血のインデアンは、全體としてはその大多數が混血である。ムンツに依ると「純血インデアンは減少する一方で結局は滅亡するだらう。極北のエスキモーも同じ目にあつてゐるとのことである」ムンツは又、曰く

「グリーンランドは殆ど全部が混血で西海岸で純血のエスキモーを求めることは困難である。又溫熱帶の土地に美しい肉體美を持つてゐるハワイ土人は、水で浴みし漁をし樹の實を食ひ、僅かの土地に少しの蔬菜をつくり、歌と踊りと折々の鬪ひを樂しんでゐたが、西洋人が來ると共に基督敎に入れられ着物を着るやうになり、商人は酒を賣つて飲酒を敎へ、驕て梅毒と結核に罹るやうになつた。卽ち文明になると共に土人は死んで行つた。一八三二年十三萬人ゐたのが一九二〇年は二萬三千人となつた。一九二九年の統計では二萬四百十九人となり、最近では一萬六千人となつた」

亞細亞大陸には多種の種族がゐるがこれも良い狀態ではない。强制栽培制度と傳染病が西洋人に依つて持込まれ、又混交のため混血した。

メラネシヤのフエート島などは曾て人口が多かつたが、今日では原野に住民が見られなくなつた。僅かに海岸に少々見出す位だ。アオア島の海岸には陶器の破片が殘され、相當多數の住民が居住したと見られるが、今は僅かに三人だけである。タンゴアには三大部落があつてそれ〴〵の言葉を語る種族がゐたが、今は小さな一部落が殘つてゐるに過ない。その他かう云ふ例は枚擧に遑がない。

ルイ・フエブルによると

「メラネシヤ諸島の人口の減少は驚くべきものだ。エロマンガ島は一八四九年に八千人ゐたが、一九一〇年には三百七十九人、サンタ・クルス群島には一八二二年の三千人が一九二二年には八十二人、ニユカドニアでは佛蘭西政府に反抗した爲一八五三年の十萬人が一九二一年に二萬七千人餘に減ぼされた。……」

J・フランクリンと云ふ英國の人類學者は、未開種族の滅亡に就き同情深い文章を書いてゐる。そして原始種族の滅び行くことを悲しんでゐる。

以上はかくれもない事實で、世界文明の名に依つて如何なることが進められてゐるかを知ら

ねばならぬ。そして滅び去つた種族の貴重なる生命を意味あらしめねばならぬ。

五

以上に於て余は西洋人の行動が如何に多類少民族を逐次滅亡に導いたかを示した。然し彼等の行動は單にそれのみではなかつた。彼等は他種族の根絶及びダーウインの適者生存の法則を自ら行つて得意になつてゐる。彼等は他種族の文化文明に對し、大規模の侵略——或場合には致命的なる——を行つて誇負してゐる。彼等は彼等と異なる獨自の文明を持つ國民なれば、直に是を破壞するに至らねば滿足しないのである。

例へばアズテク族、マヤ族は中米に獨自の偉大なる文明を築いてゐるのである。今日發堀される其の遺蹟は彼等の文明的業績の驚異すべきものであつたことを示すのである。彼の曆石、或は太陽石として知らるゝ刻碑は年紀を記し、アズテク族の宇宙觀、世界創造論を示してゐる。彼等の文學は宗教的歌詞と內省的詩文に富んでゐる。彼等は屋外で種々の見事な樂器を用ひ音樂會を開催した。彼等の造つた陶器は藝術味の頗る豊かなものであつた。また彼等は金、

銀、銅、硬玉其他の貴金屬を以て美しき裝飾品を造つた。彼等は織物及び羽毛細工の製造にも巧みであつた。マヤ文化に就きスピンデン氏は次の如く述べてゐる。

「マヤ族の彫刻其他の製作が世界最高の水準に達せることは藝術家の間に於て定評があり、またマヤ族の天體運動觀測に基く曆法の進歩は今日の天文學者の驚異するところである。加之彼等は特異の象形文字を發明して種々の事實、事件を記し、また新世界の他に見られぬ豪壯な石造都市を建設したのである」

ミルバヌス・モーレイ博士は、マヤ族の遺趾に就き詳細なる研究をなし、紀元五世紀時代の古き文化の重要なる證據を示し「コロンブスに依るアメリカ發見以前の西半球に於て最も進歩せるもの」であつたとしてゐる。

斯てアズテク及びマヤ族の燦然たる文化が西洋人の注意を惹くに至つたが、現世紀の偉大な獨逸の哲人オスワルド・シュペングラーは其著「西洋の沒落」に次の如く述べてゐる。

「是は文化が暴力を以て滅ぼされた一例である。それは餓死、壓迫、威脅されたと云ふのでなく、宛かも向日葵を切りとる如く最も華かなりし時に於て擊ち碎かれたのであつた。是等の

國は世界の大國、または一つの聯盟以上のものを含み、其版圖資源は希臘、ハンバル時代の羅馬を凌ぎ、其の政策、整頓された財政、發達せる法制、チヤールス五世の大臣等が想ひも及ばなかつた行政組織と經濟制度、傑れた文學、西洋の及び得ない大都市に於ける知的に傑れた鄭重なる社交――是等すべては、彼等が熱情を驅られた戰爭を行つて破壞されたものでなく、數ケ年の中に一群の匪賊のために跡形もなく一掃されて了ひ、今日その遺民は、其の當時の文化の痕跡すら有しないのである。」

南アメリカに於てもインカと稱する土着民に依つて同樣見事なる文明が建設されて居、善政とは人民の幸福と寧樂を增進し、壓制を排することであり、文明政府とは運輸灌漑を高度に發達せしめ、各種技術の進歩を計るにありとすれば、インカ政府は將に是等の名に値するものであつた。道路、灌漑水路其他インカ族の公共營造物は當時の歐洲に存在せる如何なるものよりも勝つてゐた。彼等の建設は堂々とした立派なものであり、其の陶器、裝飾品等は希臘人、エトルシヤ人のそれに劣るものではなかつた。彼等は金、銀、銅等の細工に傑れた手腕を示し、彼等の言語は洗錬され、優雅にして且つ豊富なものであつた。彼等の法制は只管統治者の福祉を

計らんとするものであつた。就中彼等の統治上に於ける寛大主義は當時の世界に於て彼等の地位に立たしむるものである。

ペルーを征服した最初のスペイン人マルキオ・セラ・デ・レジェアマは其の死の直前、スペイン人がインカ族を如何に遇し、また如何にして彼等の燦然たる文明を破壞したかを卒直に告白した。彼は良心の荷責に堪へず、スペインのフイリツプ王に總てを告白し、其の苦しみから逃れんとした。「インカ族の統治の下に於ては一人の盗賊、一人の不貞の女も居なかつた。男子はすべて正直にして相當收入のある職業を持つてゐた。森林鑛山其の他の財産は公平に分配されすべての人は各自の所有する財産の限界を知悉し、訴訟は一つもなかつた。インカ族は其の支配下の民族から統治能力ある民族として恐れられ、服從されまた尊敬されてゐた。然し我等は彼等の土地を占領し、スペイン政府の支配下に置き、陛下は余のこの陳述が余の良心を滿足せしめるためになすものであることを御諒解願ひ度い。何となれば我等はこの民族を良からざる方法を以て破壞させたからである。彼等の間に犯罪の少しもなかつたことは、金銀一萬枚を持つインデアンが家を留守にする際その入口に留守の標としてステツキを置くだけで誰も中に這

入らうとしなかつたことに依つても知られる。然るに彼等は我等が錠を用ゆるを見、それが盜賊の用心のためであると知つて、我等を輕蔑したのである。余はこの事を陛下に申し上げるのは、余が斯の如き立場にあつて良心の苦痛を感じ是より解放されんことを願ふためである。余は神が余を許されんことを願ふ。何となれば、すべての遠征者、征服者は悉々に物故し、内外に生存するものは余のみであるから、余の良心を救ふため、出來るだけのことをしたいのである」

然も悲しい哉、死の前の懺悔を如何に行はうともインカ文明を復活せしむることは出來ない今日ベルーに「打碎かれた骨の如く」分散する遺蹟は、其文化が世界文明史上誇るべき地位を占めた偉大さを示してゐるのである。然しその遺趾は西洋人の無考へ、無慈悲を示すものである。彼等は他人の美點を諒解することが全く出來ず、彼等と異る者を屈服せしめ、その相違を特色づけるものを破壞することを誇るが如くである。

亞細亞に於て西洋人の渡來當時、社會的文化的に、顯著なる發達をなしてゐた若干の島國は西洋人の侵略に抵抗し、斯て哀れなるアズテック及びインカ族同樣の運命を免れ得たのであ

る。恐らく島國人の自然の活力が相當發達せる文明と共に、斯の如く爲し得しめたであらう。彼等初期の鬪爭は、勇敢なる精神、比類なき武士道、强烈なる愛國心の輝ける證據を示した。彼等の雄々しき行動に批難の打つべき點はなかつたが、然も不幸にして彼等は陰謀、粉飾、詐術に就て訓練を持たなかつた。斯て西洋人との競爭に當り、公平にして卒直なる爭ひは效果が無く、右の如き西洋式術策には全然缺けてゐることが判つた。卽ち是等術策に無智なることは西洋人を有利ならしめ、その結果亞細亞側は競爭に敗北の余儀無きに至つた。

然しそれは最初部分的敗北、政治權力のみの敗北であつた。故に西洋人はその勝利を完全ならしめんとし、競爭は依然つゞき、今日未だ終つてゐないのである。

例へば大東亞戰爭以前に於けるフイリツピンにその例を見よ。この美はしき群島は、支那と太平洋との間に横はり、その人民は古代既に獨自の見事なる文明を有してゐた。彼等は印度、支那其の他の隣邦と文化的通商交通を行つてゐた。而して科學的研究の結果に依れば、西歷紀元前數世紀に亙つて、印度と比島との間に文化的聯繫があり、就中印度文明は比島文明に著るしき影響を與へてゐたのである。

然るに一九二一年比島はスペインの有名なる探險家フェルヂナンド・マゼランに依つて所謂「發見」されたのである。然も東洋人にとつては、西歴紀元前數世紀より近隣の大文明國と文化的通商條約關係を維持してゐた國が一五二一年發見されたと歴史にあるのは、洵に笑止に堪へないのである。

それは所謂西洋人の「發見」のいま一つの例を思ひ起させる。卽ちアメリカの發見であつて歴史は一四九二年クリストフア・コロンブスが發見したと敎へ、世界は是を眞理と敎へられてゐるのである。然し吾等はコロンブスの祖先の生れる前、既に或る民族がアメリカを尋ねたことを知つてゐる。アメリカに移住したインデアンが今日の海峽植民地より出たと云ふ說を眞理とすれば、彼等こそ最初のアメリカ發見者である。またこの說を眞ならずとするも、コロンブスは未だアメリカの發見者となし得ないのである。是等の冒險者は印度を原住國とする開化せられたるポリネシヤ人に外ならない。また有名なる古代文獻學者——その大多數は南米人であるが——の有力なる證言に據れば、アメリカは絕えずメラネシヤ人及びポリネシヤ人の移民先であつたのである。古代學に對する世界的權威、レストリー・ミツチエルは一九三一年六月ア

ンチクイティイ誌に次の如く述べてゐる。

「歴史上のポリネシヤ人は、パーシー・スミス、A・フオルナンダー、A・C・ハドン諸氏の研究並びにリバース博士の補足的說明に依れば、アリアン人種であつて、紀元前四百年頃より印度の南東地方に向け移住したものであつた。最初の移住民は數世紀前の間にジヤワを越へオセアニアに至り次にサモア及びトンガンに定着した。第二の移住民は同じ經路を經、遂にニユージランド最初の移住民となつた。第三は北東及び東に向ひ、布哇マルクサス等東部に進出した」

是等の進取的メラネシヤ人及びポリネシヤ人がアメリカを含む以上の地方に西暦紀元を去るはるかに昔より移住したものとすれば、世界は何故にコロンブスがアメリカを發見し、マゼランが比島を發見したと云ふが如き誤つた說を改めないのであるか。

是等の發見說はアメリカ乃至比島がコロンブス若しくはマゼランに依り初めて西洋に知られ、初めて西洋の搾取の對象となつたことを示すに過ぎない。この意味は右の二つの發見土地のその後の歴史を見れば明かである。我等は既にアメリカの二民族の悲慘なる事實を述べた。

然らば比島の事實は幾らか勝つてゐたであらうか。

マゼラン以後この島國に渡航する民族はアメリカを侵略しかの偉大なる二民族を亡ぼしたと同一の西班牙人であつた。彼等の多數はアメリカに於ける活きた經驗を持つて來たもので同樣の仕事をなすに洵にあつらへむきの資格を持つてゐた。

なぜなら、彼等は其の仕事を成すに法王の祝福を受けてゐたからである。然し土着民の强硬な抵抗の爲彼等の同胞がアメリカに於て成し遂げた如く迅速且つ完全に成功することは出來なかつたが、それは彼等にとつて時の問題に過ぎなかつた。次に比島に於ける彼等の搾取方法を略說して見よう。

間もなく西歐人は被征服民の間に彼等の文明を擴め始めた。被征服民は十字架及びそれが意味するすべてのものゝ受納を要求された。次いで教育制度、更に又西洋神學——隨つて國民性剝奪の意義を有するものであるが——に依つて人民は彼等固有の文化を捨て、數千里を隔てる支配者の國を母國とすることを强制せられた。斯て比島人の心は狂言的牧師達の支配下に置かれる（その靈魂も勿論新しい信仰に依つて救はれるのであるが）と共にその環境よりあらゆる

「異教的」迷信を一掃されたのである。人民は往時の習慣が非クリスト的である故を以て、是を捨棄することを餘儀なくされた、幾多の寺院及びその中に藏せられた貴重なる文獻は悉く破棄せられた、西洋人が始めた仕事は新しい精神、新しい眞理、新しい信仰を植えつけることであつた。人民が自ら築き上げ、永年に亘り保存して來たものが破壞されたばかりでなく、非クリスト教的なものに對する偏見、排擊を彼等に强制し、往時のものを彼等の記憶より一掃したのである。それは當時のものの復活の機會を阻止するに巧妙なる措置であつた。斯て比島人は彼等の歷史が西洋人の渡航に依つて始まりたるが如く考へ、不法なる外來者が母國に侵入することを防ぎ戰ひ、以て全國民を屈服より救はんとした勇敢なる彼等の祖先が、何等文明を有しなかつたかの如く考へ始めた。唯最近比島大學の一米人教授の古代研究に依り、スペイン領有より遙かに昔、卽ちクリスト紀元前より優れた文明を有してゐたことが發見されたのである。然し永年に亘り民族的自尊心のあらゆる記憶を奪ひ取られ、尤もらしき西洋主義の洗禮を受けて來た人民は、恰も外國人ででもあるかの樣に、是を古代學的興味を以て見るに過ぎないが、或は彼等も嘗つて古代文明を持つたと云ふ一時的の國民的の誇りを感ずるのがせい〳〵で

ある。斯の如く何等の民族的、文化的個性を外來文化の眩惑の中に無視してしまふのは、西洋人が比島に對し、如何に恐ろしき破壞事業を行つたかを示すものに外ならない。それは比島民が最も價値ありとするものは恰も暴力に依つて掠奪破壞し、恐るべき神學と、堂々たる風を裝ふ僧侶主義を以て恐怖屈從せしむる催眠術的暗示を與へたものであつたことを知らしめらるゝのである。

勿論スペインの開拓者達は、嚮て自由主義的な米國に依つて政權を奪はれ、今や更に比島人は廣汎なる政治的自由を有し、嚮て眞の獨立を獲得せんとしてゐるが、然もこの比較的自由な空氣の下に於て、比島人が如何に徹底的に西洋人の影響を受けてゐるかを看取し得るのである。嘗つては此の島國人も民族的個性を保存せんがために外來文化の侵入に對し絶えず抗爭したのであるが、外來文化の組織的勢力の爲に遂に全く挫折したのである。西洋人は比島人が今回何等固有の文化的水準を有せずと云ふ。勿論現在固有のものは殆どなく、彼等は自ら及び他の東洋民族に對し、西洋人同樣の考へ方をする。彼等は東洋に於ける比島人なる存在を忘れ、生活の凡ゆる部門に於て西洋人の模倣を欲する。

斯て彼等の思想、感情、趣味傾向、風俗習慣、否すべての制度、理想が單なる模倣に過ぎないのである。而して是等は西洋人に取つて如何にも追從的なことは明かであるが、彼等は比島の文明が著るしく進歩したと公言するのである。その文明の意味は勿論西洋模倣の意味であつて、比島人もまた兩者の間に差異は認めないのである。少くも比島人は自ら他の東洋諸國より進歩せる文明を築いたと自任してゐるのである。彼等の文明の教師達同樣、彼等のものを見る眼はひがみ、東洋の偉大なる文明を取るに足らぬものとする。西洋の教化の下に彼等は近隣諸國に對して拔くべからざる偏見、卽ち凡ゆる東洋の理想、感情を蔑視する偏見を有する。斯てこの島國は、西洋主義が東洋を攻擊する戰略基地として着々準備を整へたのである。

東洋が西洋人の行動の如何なるものであるかを理解するに當り、比島の例は善き教訓となるであらう。

次に比島の少し南に蘭領印度として知られる今一つの重要なる群島があるが、その名は同島民が今次大東亞戰に於て陷落するまで、西洋文化を受けつゝあることを示すものである。

然しこのことは彼等が嘗つて文明を持たなかつたと云ふ意味ではない。何となれば嘗つてこ

の地は比島、臺灣に至るまでの近隣諸地域の偉大なる古代文明の中心地であつたからである。紀元五世紀頃榮えたマジヤパヒツト帝國の中心であつた此の地にはその後回教徒が侵略的文化を以て渡來し、土着民族の大部分は一掃し得なかつたのである。この島國人は當時回教の侵入を認めたが、それは外面のみであつて、內面的には猶ほ古代文明を維持してゐたのである。

然しそれは西歐人の侵略後に於ても維持し得たであらうか。玆には今や西洋より渡來した宣教師、商人、栽培者、軍人、海員が本國政府の開拓事業を扶けつゝある。而して土着民と他の東洋諸國との交通連絡は、新來の開拓者に依つて巧みに監理されてゐる爲、吾人は彼等土着民が果して眞相を語る機會を有するか否かを知らないのである。數年前比島人の教育家數名がジヤワに視察に赴き、同地官憲の監視の下に行つた視察の結果、次の如き悲慘なる結論に達したのである「ジヤワは富裕であるがジヤワ人のものでは無い」また彼等の一人は、マニラの新聞にジヤワに於ける和蘭の政策が土着民を滿腹せしむるも、その頭腦を空にさせるものであらうと述べてゐる。彼等は西洋植民者のあの恐しき强制栽培制度、奴隷の如くに勞働を强制する制度に就てすら發表し得ないのである。

ジヤワの開拓者より受けたと稱せらるゝ各種恩惠に就き發表を强ひられてゐるのに、何故眞相に就て沈默を守るのであらうか。勿論ジヤワ人自ら進んでその恩惠を語るのであれば開拓者にとつて甚だ心地よきことであらう。然し進歩せる人間の判斷よりすれば、開拓者のかゝる自己稱讃を眞實なりとなし得ないのである。嘗つてジヤワに起つた叛亂は、政府が共產黨の宣傳に依るものと辯護するに拘らず、我等をして大なる疑問を抱かしめられたのである。人民が幸福ならばどうして叛亂が起るであらうか。何故世界は人民から直接叛亂の眞因を聽き得ないのであるか。ジヤワは東洋の一部分であり、ジヤワ人は血族的、文化的に幾多東洋人の同胞である。彼等が生活部面に於て、東洋人と密接なる關係を有することは當然である。しかも同國は、スペイン治下の比島の如く注意深く近隣諸邦より孤立せしめられてゐる。是を要するにジヤワ人は嘗つて比島人の如き文明を受けつゝあるのではないか。

印度支那及び馬來半島は島國でなく、亞細亞本土の南端に位置してゐる。印度支那はその名の示す如く印度と支那とに屬する。この事は特に文化的意味に於て眞實である。と云ふのは古代この地に成育せる文明の特色は、印度的及び支那的のものであつたからである。然しそれは

西洋人の力に依つて根絶され、今やジヤワの如く嚴格なる移民制限に依つて近隣諸國より孤立せしめられてゐる。然も開拓者は人民が滿足し、恩惠的强化政策の下に顯著なる進歩をなしつゝあると云ふのであるが、若しすべてが滿足すべきものであるならば、西貢に彼のスターチンバーと同樣の所謂コミツション・クリミネールなる特別法廷を常設する必要がどこにあるか。何故に無辜なる幾多安南人が當局の假裝的罪惡の下に單に治安の故を以て長期投獄、追放、强制勞働、死刑等に處せられるであらうか。斯て少しものごとを詮索する東洋人は、この國の進歩を疑ふのである。幾多の調査に依れば過般同國に人民の叛亂があり、その結果「一九三三年一月十四日エンバイ事件以來三千人の政治犯及び七千人の人民が處刑を受けたが、彼等の多數は老人、婦女子であつて、その罪は減稅、下士官の營業に對する干涉の排除、普通選擧等々を要求せるに在りとせられてゐる」

當局は例に依つて共產黨の宣傳、或は進步黨に對する保守派の反動等と、辯護してゐるのであるが、吾人は今の國々に起つた同樣の事件より見て、異つた結果を導出するわけにはゆかぬのである。洵に斯の如き事件は印度支那の文明が如何なるものであるかを示すのである。而し

て治安は回復せりといはれても公平なる識者は如何に多くの人々が永遠の平和へと念がしめられたかに就き疑惑を禁じ得ないのである。

六

以上は何れも東洋に於て歷史古く、且つ歷史の記錄開始前遙かに昔より個有の輝ける文化を有してゐたことを示すものである。幾十世紀に亘り、是等の文明は人民の性質を鍛へ洗練し、氣高くし、斯して人々は現實以上に理想を愛し、理想的生活をなし來つたのである。斯て西洋人は是等人民の善性に眼をつけ、是等古き國々に侵入したのであるが、彼等の開拓方法は決して單純なものではなかつた。彼等西洋人は他の場所に於ける如く、バイブル、酒、劍を以て臨んだのであるが豫期した結果は猶ほ得られず、是等東洋文明に最後の一擊を加へるは彼等の常に夢想する處である。故に彼等は失望してゐない。彼等は他の國に於ける成功に鑑み、彼等自らの任務と信ずる處に向つて邁進してゐるのみである。

然らば現に西洋人の開化を受けつゝある人々は、東洋には東洋固有の文明ありとし、西洋人

が東洋に於ける其の得意の開化事業を中止したならば、如何に考へるであらうか。是等の國民は西洋人の遣り方は唯一の文明方法であり、各國が是を採用するは世界の爲なりと信ぜさせられて來たものである。若し是等の文明開拓者が、是等の國に於て土着民自らの方法を選ばしめ彼等の事業を中止することになれば、彼等こそ困難な立場に陷るであらう。それは彼等が、彼等の文明が唯一でないことを暗默に承認することになるからである。その結果は是等西洋の文明を享けた人民をして從來彼等の國になされ來つたことを疑はしむるであらう。

然し彼等は今日最早かゝる暴虐なる搾取を續けることは出來ない。

彼等は今日彼等の支配する國の文明が千年五千年の永き試練を經た結果として、その文明が如何に偉大なるものであつたかを、今こそ思ひ知つたであらう。今こそ彼等の獨善的優越感と暴虐、專斷が、徹底的に地に叩きのめされたことを知つたであらう。

嚴正な神の最後の審判の廷に立たされた彼等の周章狼狽の醜體こそ、嘗て彼等が虐殺した未開人種の魂魄の前に狂氣した哀れな姿でなくてなんであらう。

假面せる英國の對印政策

一

「英國人に信義はない、英國は印度の教派と教派とを對抗せしめてゐる。印度の自治の爲に盡瘁するベサント夫人は大戰の際「英國の不利は印度に有利なる時」とし自治運動を開始したが、我々は英國政府を信じ是に反對した。其際英人であるベサント夫人は「卿等は英國人を知らぬ」と言つたが夫人の言が正しかつたのである。今日行はるゝ彈壓の如きは我々は英國統治下に於てあり得べしとは思はなかつたものである。最後に我々は今や人間でなく、獸の心を持つたものと取引しなければならないことを知つた」

（マラビア　M. M. Malavya）

「我々は新しき統治機構をつくらうとしてゐる。然し人民が名實共に「統治階級」に入らな

ければ、腐敗せる基礎は上部構造を破壞するに至るであらう」

（ラムゼイ・マクドナルド）

英國の印度統治史は約束破棄と不信の歷史である。英國は危機に際し重大なる約束をなし、危機去れば是を弊履の如く顧みざる點に於て世界的定評がある。印度が英國の爲に支那、アフリカ、歐洲、メソポタミヤ、アラビア、アフガニスタン、チベット、ビルマ其他に於て戰つたことは世界公知の事實である。世界大戰の時だけでも印度は一億千三百六十萬磅を獻金した。加之國外に派遣せられた印度軍の爲三千三百二十萬磅を支出した。世界大戰に仆れた印度兵六萬七千、負傷者六萬七千に達する。(印度議會に於ける報告より)

印度は大戰當時將來の自治を約束されたが故に是だけの犧牲を忍んだのである。然かも其代償として現はれたものは戒嚴令同樣のローラット法と戰後數ケ月にして行はれたアムリツサアルの大虐殺であり、其他各地に於ける射殺、投獄であつた。それらのものの中には十歲から十二歲の少年が、英國王に逆心を抱くとて罰に問はれたものがあつた。加之一九二一年より一九三七年迄に二十五萬人が投獄され、三千人が銃殺を受け、數千人が笞刑を蒙り、或は馬蹄の下

に蹂躙せられた。今日と雖も猶三千の青年が審理を經ず投獄されてゐる。然も從來英皇帝及び閣僚は印度に就き以下に示す如き言を發したのである。

一九二一年五月十五日印度總督に對する勅語に於て次の如く言はれてゐる。「印度が自治領の中に加へらるゝを目的とする旨議會が決定せるは欣快に堪へざるところなり」

一九二八年七月二日時の英國首相曰く、「余は數年以內でなく、實に數ケ月內に今一つの自治領が出來ると思ふ。其自治領は他民族の國であるが他の自治領と同樣の地位を得るであらう。其國とは印度のことである」

一九二九年十月三十一日アーウイン總督 lord Irwin は時の英國內閣を代表し次の如く述べた。

「一九一七年の宣言に含蓄せられるところは印度の憲法的發展の當然の結末が自治領制の達成にありとの意味である」

印度の青年は彼等の指導者が此のクリスチヤン總督の言を信ずることに反對したに拘らず、指導者は是に信賴したが、其結果ガンヂーは失意の裡に圓卓會議より歸り、忽ち投獄せられね

ばならぬこととなつた。

一九二九年十一月七日ボールドウイン Baldwin は英國下院に於て次の如く述べた。「印度に責任政府が確立される時如何なる自治領制が生れるか豫斷し得ぬが、それが劣れる性質のものでないことは確かだ。吾人は印度人が劣れる性質のものに滿足するとも思はぬ。而してそれが劣れる性質のものならば我々の印度統治は失敗といふべきである」

然も新憲法は果してボールドウインの言に背かないものであらうか。新憲法は印度に責任政治を許與するものといはれるが、自治領制に就ては一言も觸れてゐないのである。

一九三三年八月二十八日ウイリンドン卿 Willingdon 曰く「政府の政策は他の自治領同樣の達成に向ひ印度政治の改革を進むると共に、治安の確立を計るにある」

次いで同年マドラスに於ける演說に於て曰く「余の總ての行動は唯一の目的、卽ち平和且滿足すべき雰圍氣をつくると共に、印度をして帝國內の平等なる自治領たらしむべく憲法的發達を計ること――に從ひ行はれて來たのである」

英國は果して印度が平等の地位に置かれてゐると思つてゐるのであらうか。

チャーチル Chuchill は一九二一年の帝國議會に自治領相、植民相として次の如く述べた。

「今日印度は有力なる盟國として此會議に臨んだ。吾人は一九一四年フランダースの戰線の兵力缺乏せる時、印度軍二軍團が現はれ援助せられたことを想起せざるを得ない。吾人は印度に負ふところ多いが、印度が何時の日か完全なる自治領制を得んことを深く期するものである」

然るに其後十年を經てチャーチルは英國兩院協議會の席上「右は儀禮的に述べられたものである。儀禮的に世辭を言ふことはどこの政治家でもやることだ」と公言した。更に彼は曰く「如何なる時と雖も閣僚が印度に自治を賦與するなど考へたこともなく、欲したこともない」

吾人は英國の政治家の低調なる、僞瞞に寧ろ憐憫の情をすら催すものである。

一八七八年五月三日時の總督リツトン卿曰く「印度政府は是迄常に約を破つて來たことに對し滿足なる辯解の辭を持たない樣に思はれる」

今回の新憲法も亦例の如く英國の前約破棄の僞瞞政策を思はせるものである。

「過去百五十年間英國は、國民的敎育に於て何等の措置を講ぜず、今日の印度に於て讀み書

きし得る者は、英國侵入當時に於けるよりも少い。また英國侵入前の方が印度人は富み榮えてゐたのである。一七五〇年頃まで印度の村落には必ず學校があり、人口の六割は讀み書きが出來たのである。然るに今日九割卽ち三億三千萬が文盲であつて、過去百五十年間讀み書きをなし得たもの丶總數は二千二百六十萬にすぎない。かゝる英國が果して印度を統治するに適するであらうか」

（チャールス・ラツセル）

「一八三五年の政府統計に依れば、人口四百に就き必ず一つの學校があつた。教育の普及は宗派間の對立の如きを解消するに最も效果がある」ライオネル・スミス卿 Sir Lionel Smith

世界大戰にアメリカを引入れた英國の巧妙なる宣傳機關は、世界に對し、印度人は英國の侵入前より文盲であり、今日も人口の九%が讀み書きし得るにすぎないから印度は自治に適せぬと稱してゐる。

此の宣傳は一時は世人を誤魔化し得たかも知れぬが、史家は將來必ず英國の虛構なる宣傳の罰を指摘するであらう。英國は過去二世紀間に印度人の讀み書きし得るもの丶率を六〇%より

九%に低下せしめた。日本は七十年間に被教育者率を九九%に引上げ、ロシヤ、土耳古は十年間に著るしき效果をあげたが、英國は印度に於てマイナス五十二%の效果をあげたのである。然も英國は厚顏にも印度の文明の初步を敎へつ丶ありと說く。

ケア・ハーディ Keir Hardy 曰く「マツクス・ミュラーの調査によれば英國の侵入前ベンゴールに八千の小學校があり、全印度に亘り子供の讀み書きを敎へるところがあつた。然るに今それらは何處へ行つたのであらうか」

英國は印度三億五千萬の國民が、ロシヤ其の他から合併されぬやう、その幸福を計るため統治すると云つてゐる。また英國の或宣敎師は、英國の印度統治が神の命に從ふものであり、之を放棄し得ないと云つてゐる。果して左樣であらうか。故ロバート・ナイト氏 Robert Knight は曰く「印度から利益を得てゐるのは英國の商人のみではない。印度總督及び知事は英國貴族の野心の的であるが、その外に英人副知事、顧問、判事、徵稅官等何れも莫大な收入を受けてゐる。又印度には千乃至千二百の英人醫師があり、その實力の如何に拘らず莫大の收入を擧げてゐる。また敎會、學校、印度軍、鐵道すべてに於て英國人は高い地位についてゐる」

シジウイツク少佐 Maj Sedgwick は曰く「我々が印度を失へば英國の東亞貿易は亡びるであらう。印度が我々の手から離れたら、我々は市場を失ふだけでなく、印度は豐富なる資源と低賃銀勞働を以て東亞の市場を獨占するに至るであらう」

ウリイアム・ジョインソン・ヒツクス卿 W. Hicks は曰く「我々は劍を以て印度を征服したのであるから劍を以て是を保有せねばならぬ」

ジョージ・チエズニー卿 George Chesney 曰く「印度は我々にとつてパンとバタも同樣であるから、是を手離すわけにはゆかない」

アーサー・ムア卿 Arthur Moor は曰く「英國は最初貿易港を目的として印度に來たが次第に貿易よりも寧ろ印度の爲統治することを考へるに至つた。而して此責任は英國人の才能に働き場所を與へるのである。學校卒業者は印度に於て尊敬すべき職に就くことが出來、他方英國民に稅の負擔をかけず軍隊を養成することが出來る。

我々は印度を印度人以上に愛した。然し今や印度のために統治するといふ觀念は消滅しつゝある。英國には失業問題があるに拘はらず、印度に赴くものは少くなつて來た。印度に於て英

國官憲を惡魔と叫ぶ國民運動が勃興し、英國商品はボイコットされ、英國輸出業者、工業家は低賃銀の武器を有する印度人と競爭しなければならなくなつた。然も猶我々は印度が好きで、是を手放してはならぬと考へるものである」

米國外交官チヤールス・エドワード・ラツセル C. E. Russel 曰く「我々は英國が印度の爲を計り、印度人が感謝してゐるといふ事を聞く。然も百六十年に亘り恩惠を受けながら、印度人は其主を倒すべく起たんとしてゐる。政府が善政を行つてゐるのに、人民が絶えず其支配脱脚を計劃しつゝあるといふことは果して考へらるゝことであらうか」

二

英國の外交政策は常に印度保有を目的とし、印度に至る交通路は外國の干渉を許さぬ建前を以て進んで來た。埃及ワフド黨は英國の埃及支配の目的が印度領有にある事を批難し續けて來た。カーゾン卿が波斯分割を策したのも印度を他國が窺ふ事を防止せん爲であつた。また今日コワイト・マスカツト・バレイン・アデン・ペリムの英國駐在官の費用は印度から支拂はれて

ゐるのである。英國が今日パレスタイン及びイラクを其勢力下に置いてゐるのも印度が目標だからである。亞細亞の各地に禍害がもたらさるのは一に英國の印度領有に基くのであつて、アラビアの國民主義者が印度の惡運を悲しむのも當然である。ザグルル・パシヤは英國が印度への交通路の爲、埃及を解放せぬので苦惱の裡に沒した。ローレンス大佐は大戰中彼がアラビア國民主義者へなした約を英國が遂行せぬ爲、失意の中に死んだといはれる。

然るに最近伊太利のエチオピア併合に依り英國の地中海及び紅海に於ける制覇權危ふくなり印度への通路が脅かさるゝに至つた爲、今や英國は亞細亞諸領への交通路吟味の必要に迫らるゝに至つた。即ちスエズ運河の交通は外國の好意に依らなければならなくなる爲ケープタウン迂回路が注目せらるゝに至つた。

一方アラビア人は英國への忠誠の代價として高價なる要求をなしてゐるから、英國の立場は益々困難となるわけである。而して英國が伊太利に對し北阿弗利加領土に就き讓歩せざりし故に、今次の世界大戰に於て英伊は相衝突するに至つたのである。畢竟するに英國の野望は崩壞の一路を狂進しつゝあるのである。

然るに英國が手を引けば印度はアナーキー（無政府狀態）に陷るであらうといふものがある

「外國人が武力を以て强制する政權こそ最大のアナーキーである。印度は英國侵入前に永く繁榮して來たのであるから、英國が退去しても同樣繁榮し得る筈である。他の國は皆英國の支配なくして獨立してゐるではないか。我々が統治の能力ありや否やは外人の關與を許さず我々自ら決すべきことである。自治はすべての國民の生れながらの權利であり、印度のみが其例外たり得べきではない。今日迄英國の爲にのみ支配されて來た印度に於て平均收入は英人の四十分ノ一となり、平均生命は英人の五十年に比し二十二年の有樣である。印度が獨立しても獨立を繼續出來ぬであらうといふものがあるが、獨立を獲得せるものは是を維持し得る理である」

C・F・アンドリュス Andrews は既に二十年前英國は決して印度に自治を與へぬであらうと述べてゐる。世間には英國が印度に對し、印度自治政府の何等かの形體を結局承認するものと、素朴に信じてゐる人々が相當にゐる。即ち驕て政治的妥協が成立し、印度國民が、カナダ及びオーストラリヤの如く、その祖國を統治する權利を受諾するであらうと思惟してゐる。然

らば果して英印間の政治的妥協は可能なりや？　假令遠き將來と云へども、否である。政治的妥協は、兩國の利害關係に共通性が存在して始めて、成立する可能性があるに反し、英印間の問題には、兩國間の妥協を可能ならしむべき何等共通なる利害關係が存在してゐない。その政治的、經濟的、軍事的乃至文化的關係は明白に相反するものであり、何處に於ても如何なる日にも衝突してゐる有樣である。

オーストラリヤやカナダはその國民が同じ英國民族の流れをくむものであり、且つ同じ慣習風俗、傳統、宗教並に言語のみならず、數多の重要事項に對し共通な關係を有するが故に單に此の意味に於て英帝國内に本當の自由を獲得し得るのである。されば、オーストラリヤ及びカナダの國民が英帝國を自己のものとして揚言するは、全く正しく理論的である。併しながら、印度の場合は全く別問題である。印度は慣習、風俗、傳統、宗教、言語の全然異なる民族の國であつて被征服國である。されば印度の利害は明らかに英國の利害と衝突してゐる。以下述べる確乎たる理由に依り、英印間の政治的妥協は不可能にして好ましからざるものと云ひ得る。

一、兩國内に社會的類似關係なし。

一、英印兩國の文化に殆んどその共通點なし。

一、經濟的見地よりすれば印度は英國の原料供給國であり、英國製品の消費國である。他方、印度は自國製品に依る自給自足を望み、又原料のみならず製品を輸出し得る製造國たらんと欲してゐる。

一、印度は現今英本國に對する最大市場の一である。依つて印度の產業發展は英國の經濟發達關係と反比例する。

一、印度は國内の軍隊及び民政に關與せる若き英人に職業を與へてゐる。併しこれは印度發達上邪魔になるものであり、印度としては自國同胞の子弟をして全部これに代らしたい。

一、印度は充分に健康であり、英本國の援助或は保護を要せずして自立し得る資力を完全に有す。この點に於て印度の地位は、所謂英國の他の植民地のそれとは全然相違せるものである。

一、印度は長期に亘り英國に利用支配されてゐたゝめに兩國民の政治的妥協成立に際し印度

は損をし英國は得をする立場に到るべしと云ふ懸念がある。永年の束縛苦役の結果として、印度は國際的に見下されてゐる。この觀念は印度が完全に英國から獨立せぬ限り存續するであらう。

一、印度は自國の國旗、陸海軍、國防力を有し更に數多獨立國の首都に使節を派遣し得る自由獨立國の地位を希望す。斯く人を鼓舞し生氣づける自由がなくては、印度國民は一人前には決してなれぬであらう。獨立は印度にとりて心理的に、倫理的に、文化的に、經濟的に、將又政治的に緊要であり、これこそ印度興起の本質である。今後印度が望む獨立は、カナダやオーストラリヤに於ける「領土自治」ではなくアメリカ合衆國或は佛國の如き完全なる獨立である。

一、印度が英帝國のものである限り、他の英領土に居住する他の印度人の利害を印度は保護し得ない。英本國の重壓は、常に印度人に對し白色人種の味方となつてゐたものであり、又常にかくある事であらう。然るに印度が獨立すれば、英帝國の他の領土に居住する子弟に對する待遇改善を實現し得る。

斯樣な理由で、印度英本國間の妥協成立の根據の存在せぬ事がうなづけよう。依つて、必然的に若しも印度民衆の指導者が、この根本の事實を看過せぬならば、その協定は存續せぬであらう。若しありとせば、それは一九二一年三月に結ばれた「ガンヂー・アールウイン協約」の如き至つて短期のものであらう。

今や印度國內に汾湧してゐる社會的、經濟的、政治的勢力は、印度の正當な要求が充足されねば印英間に平和は見られずと云ふ事を物語つてゐる。更に大東亞戰爭がもたらした偉大なる衝擊は遂にクリツプス派印、蔣介石訪印となり、世界の話題は一つ一つを具體的に表示されつゝあるのである。印度獨立の歡聲擧る日は近し。

亞細亞は蹶起する

世界の政治地圖を一瞥する時、人は世界に君臨する英米系白人種の壓倒的覇權に戰慄を禁じ得ぬ。

世界大戰迄地球上五千三百平方哩の陸地（極地を除く）の内、僅か六百平方哩の地域のみが白人の支配下にあつた。然るに大戰後、廣大なる非白人の土地の多くの部分が更に英米系白人に依つて殺ぎ取られた。

ベルサイユ條約は、實に大戰中トルコを分割せんとして聯合國間に商議された數個の秘密條約を基礎としたものであつた。而して後セーブル條約が修正されたにも拘らず、オットマン帝國は遂に起ち得ず、その諸領國は英國及び佛國に依つて分割されるに至つたのである。

大戰勃發の當時トルコがチュートン諸國に加擔するや、英國は先づエジプトを保護國にする旨を宣言した。又ヴェルサイユ會議が終るか終らないうちに、英國はペルシアとの協約を發表した。而してこれは少くもペルシアを、よし事實上でなくとも、名目上英國の保護下に加へん

とするものであつた。

斯して近東及び中東の非白人諸國、所謂獨立褐色諸國は大戰中及び其の後に於てその完全獨立性を失つた。地圖の上では、如何に描出されてゐようとも、それ等の國々が以前にもまして英米系白人の政治的勢力下に陷つたことは明白である。

然しながら地圖には別の見方がある。領有關係でなく民族關係から見れば、世界地圖は全然反對になる。白人の世界は、二千二百平方哩に止まり、有色人種の世界は三千百萬平方哩に亙つてゐる。

十年前地球上の人口約十七億の内僅か五億五千萬が白人であり、十一億五千萬が有色人種であつた。アジアのみで九億以上の人口——即ち地球上の總人口の殆ど半分を有してゐる。有色民族の總計は一に對する二の割合で白人に優つてゐた。

統計は明示してゐる。「全白人の五分の四は、全歐洲土地の五分の一以内の面積の區域に集中し、殘る白人の五分の一（約一億一千萬人）は地球の端々まで散在し、その十一倍の人數の有色民族の壓力に對し父祖傳來の土地を衞らなければならない」と。この有色人種の壓力はまだ

組織だつてゐないし、又意識的になつてゐないけれども、白人の膨脹に對する威嚇である。而してこの白人にとつて好ましからぬ民族不均衡をさし措いても、今一つの侮り難き事實が現れ、白人種消滅の恐怖を高めてゐる。卽ち有色人種の出産率がそれであつて、白人種の率に殆ど倍してゐるのである。

白人の政治的膨脹と、大民族が蠶食して行くことは避け難き一つの結果を生ぜしめる。卽ち侵入者を徐々に排出すと云ふことである。

全有色民族世界——黃色、褐色、黑色及び赤色人種の世界——は英米系白人の侵入者に對し既に動き始めてゐる。英米系白人支配下の各國に於ては既に幾多の難問題が續出してゐる。アジアの大半、アフリカの殆ど全部、中部及び南部アメリカの大部分をゆるがし始めてゐる國民主義者の覺醒運動は有色世界に於ける英米系白人の强制的支配に向つて必ずや爆擊するに相違ない大暴風の前兆を示してゐる。山雨臻らんとして風樓に滿つる狀態である。前途は不吉である。

以下のメレデス・タウンセンド Meredith. Townsend の言葉は、印度の場合にあてはめるよりも、全有色民族にあてはめるとき、幾百萬倍もの意義を持つ。曰く「黃色人種が一週間罷

業をやれば、「帝國」はカルカツタで組立てた家のやうに崩潰するであらう。支配者は一人一人自分の家の中で餓えたる捕虜となるであらう。彼等は動くことも食物をとることも水を得ることも出來ない」

これ等の言葉は、白人の政治地圖に示されてゐる表面堂々たる政治現象にも拘らず、その礎石が政治的であり民族的のものでないため、全然あてにし得ぬと云ふ根本的眞理を示す。卽ち英米系白人に對する有色民族側の單なる受動的抵抗が瞬く暇に地圖面を變へ得るからである。

現下有色民族諸國に種々の形に於て示されてゐる反擊の兆は、良き政治と見せかける白人の專制を排擊せんとする有色人種の決意を示すものに外ならぬ。ギルバルト・ミュレー氏 Gilbert Muray はイラクに於ける英人による「良き政治」の範例を示し、白人の支配下にあるあらゆる有色國民に適用し得るとしてゐる。曰く「稅金を四倍にしたり、人民を何度も射殺したり、死刑に處したりする政治は、たとひ灌漑を發達せしめ又は進步的理想があつても、認容され得べきものではない」而して有色人種はもはやさう云つた種類の「良き政治」で滿足することは出來ず、自治を要求してゐるのである。

有色人種は大戰中に於ける聯合國の宣言、卽ち大戰は「小國家の權利とすべての國民の自由」の爲、新世界を建設するために戰はれたといふ如きことの虛構にすぎざるを知つた。ヴェルサイユ會議は、白人列强が中東、卽ち西南アジア及び近東に於ける彼等の制覇を弛める意志なきこと、又堂々たる數々の公言が白人帝國の政治的國境をおびやかす鋭き危險を減じ、若しくはその危險の到來を遲らすと云ふだけの目的を持つてゐること、又媾和協定は有色民族及びその土地の上に白人の支配權を依然として持續せしむる帝國主義的秘密條約に基礎を置いてゐたことを明瞭に示したのである。

有色人種の自立發展、及び彼等が其父祖以來の土地を讓り、或は所有すると云ふ要求を支持せんと云ふ國際關係の公言も、大戰中に叫ばれた幾多の聲高き言明と類を同じくするものである。有色人種に對する英米系白人支配權の維持の日毎に困難になりつゝあることが、白人に明白になればなる程、彼等の利己主義の聲色は一層誇張されるのである。

白人列强は、白人及び有色人政府の間に於ける外交儀禮の交換の背後に彼等の平和と善意の公言に暗影を投ずるものゝ隱しおほせないことを認めてゐる。白人列强は、有色人の間に、血

液、言語、宗教、文化の相違あるにも拘らず、一億一千萬の白人を驅逐するため、十一億五千萬の有色人聯結の動向の既に決定的なることを知つてゐる。

全有色人終局の目的は、その目的を達する手段方法について相違あるにしても、英米系白人の抑壓から解放を期することに一致してゐる。而しその中最も穩和的なものは、表面上、白人の絶對權の守護の下に局部的自治政治を以て甘んずるものである。然るに青年の間にあつては所謂「白人の負擔」卽ち「劣れるもの」へ「優れたる」の文化を與へると稱する英米系白人の「博愛主義」の最後の結論をもたらすべく、意見の一致を見、その目的の下に運動が展開されつゝあるのである。

斯の如き有色人の反擊卽ち白人の政治的侵略に對する力强き反抗運動の根本的原動力をなしてゐるのである。有色人は西歐人の比類なき侵略より政治的に解放されるべく、汎有色人同盟を結成せしめんと努力してゐる。而して目下猶ほその一致共同は、積極といふよりも寧ろ消極的であるが、自國内に於ける白人覇權、及び凡ゆる侵入を排除する「不滅の權利」を主張しつゝあることはこの決定的傾向に於ける最も力づよい要素である。

有色人種の希望卽ち自國より白人蠶食を排斥することは歐羅巴、北アメリカからリオ・グランド、南アメリカの南部、アジア洲のシベリア及びオーストラリアから有色人を排斥せんとする白人の希望に相對應するものである。卽ち有色人青年は英米系白人との政治的隔離を望み同時に彼等の生れた土地から英米系白人が完全に引拂ふことを要求す。而してこの相互の排擊は、早晩爆發すべき火藥庫の導火線をなすものである。

有色人が寧ろ强くなると云ふことは、ハルマゲドン（大戰）以來、衰退して來た白人と比し當然の結論にすぎない。ヴエルサイユ條約の砂上の樓閣の上に築かれた國際聯盟、今にも爆發せんとする英米系白人陣營內の對立はとりもなほさず英米系白人文明の凋落であり、英米系白人制覇の自壞、全英米系白人間の壞滅に外ならぬことを有色人青年達は知つてゐる。而してこの英米系白人の此鬪爭心理を知る有色人は、歐洲大協商國、小協商國の諸提案及び軍備縮少會議が單に嗤ふべき道化芝居たるに過ぎずとしてゐる。

有色人は、歐羅巴列强の間に日毎に高まりつゝあるこの內部的對立、隆盛期の白人につくられた結束の瓦解に英米系白人文明の分解の風潮を見る。而して一層不吉なことは、第一次歐洲

大戰以來國家主義的帝國主義及び各個國民の野心の異常の發達に依り、彼等の種族の利益を考慮することに無關心になつて來たことである。

有色人はこの白人界の分裂を嚴かに見守り、白人の協力の失敗に歸することを豫想してゐる彼等は白人間の隊伍整はざることがやがて彼等自立の機に至るものとして注意を怠らない。彼等はまた白人領土內のどの範圍に種族的反逆が生ずるかを氣付いてゐる。この大戰中には双方共、出來るだけ有色人の軍勢を募つた。此行動は國境外の有色人の軍隊を動員することに依つて「白人の內輪喧嘩」をするものとして、普く非難されたに拘らず、交戰國の無條件の是認を受け、白人の無力を愈々明かにした。若し有色人が、白人が同胞殺戮に使つたその力を白人逆襲のために集結すれば如何であらうか。

かくの如きは白人衰微の明白な兆であり、それは白人隆興の週期の終止、卽ち有色人種の興起の爲に衰微しなければならないものなることを示す。この二つの目立つた種族の間に決定的調整がなされて後、はじめて眞正の國際平和が樹立されるであらう。

英國に虐げられし印度

英國の印度統治とは本當のところ何を意味するか？

印度と云ふ廣大なアジア領を持つが故に、異常な政治的威力を加へた英國政府や、印度から生活費と財産を搾取してゐる英國官吏の立場からでなくして、永い榮光の過去を持ちながら、百五六十年前に、不幸にも征服されて、外國の支配下に立つことを余儀なくされてゐる三億五千萬の人々が現實に嘗める經驗を土臺にして見るとき、英國の統治とは一體なにを意味するか？

エドムンド・バークがワーレン・ヘスチングスの印度に於ける失政を彈劾して以來、英人の中にも英國の印度に於ける暴政の數々を指彈する勇氣ある人もないではないが、然し彼等の聲は英國で不評判であり大抵揉み消されて仕舞ふのだ。有りの儘に述べることが非愛國的だとか反逆的だとかいつて罵られることも稀ではない。然し凡ての言論を壓迫しきれるものではない

印度に於ける征服、統治も、他の場合に於ける征服、統治と本質的に變らないものだと云ふ證據が、英國でも印度でもしば〳〵擧げられてゐる。こゝでは少し上手に行はれるとか、あそこでは少し慘酷だとかいふ差はあるにしても、凡ての場合、同時代を通じてその根本的な性質は同じものだ。一國の外國征服、外國統治は武力に根底するもので、正義に根ざすものではない。その結果は治者も被治者も深い害惡の底に落ち込む。劍に依る支配の行はるゝところ、劍の柄を持つてゐるものはともあれ、支配せらるゝものは常に冷い刃の切尖を無氣味に感じてゐる。それは悲慘といふよりも罪惡だ。それは被征服者を背德ならしめ、腐敗させ、捨て鉢にならせる。自尊心、向上心、自制力はすつかりなくなつて奴隷心理が生れ、希望と意思は消えて仕舞ふ。人道上最も深い害惡だ。

そも〳〵英國は印度にとつて何者だらうか。英國は何しに印度に乘り込んでそこに腰を据えてゐるのか。

若し印度が發見された當時のアメリカの樣に、いはゞ空つぽの土地なら、英國人がそこに移住して生活の根を下ろす理由も分るが、印度はすでに印度人で一杯だつた。また實際において

も英國人が印度を永住の地とするものは殆どない。假りに印度が未開野蠻であるとすれば英國が彼等を征服して統治した名目も一應は成り立つかも知れぬ。しかし彼等は英國よりもずつと古くから立派な政治組織を持つてゐた。英本國の誕生以前に、もはや燦爛たる文化を示してゐたではないか。

カーゾン卿は一九〇一年印度總督時代にデリッヒ (Delhi) 政廳で、演說した中に――「英國人が森林の放浪者であつた頃、英領植民地が荒野藪林であつた頃、すでに印度は富み且つ榮えてゐた。印度は人類の歷史の上に、哲學の上に、宗教の上に、地球の如何なる民族よりも偉大な足跡を印した」と讃美してゐる。その印度が英國に征服されて、しかも自由なき屬國として扱はれてゐる。光輝ある過去を持つ印度人は、今や自らの運命についてさへもすつかり發言を封じられてゐるのだ。

カナダ首相ウイルワレツド・ローリエ氏はエドワード王戴冠式の際、ロンドンに開かれた植民地會議の席で、――「ローマ帝國は奴隷國家から成つてゐたが、英帝國は自由國家の星座である」と述べた。しかし印度は果して自由國家であるか。

一九二七年九月ゼネヴアに開かれた國際聯盟總會でオースチン・チヤンバーレン氏は、英帝國を「自由平等の國民の合衆國」と稱した。これ等の政治家は反對の事實があることを百も承知してゐながら、どうしてそんな口がきけるのであらうか。

英帝國の五分の一の自由國民とは印度人は「平等」ではない。自由の代りに壓制を受けてゐる。つまり英帝國は五分の一の「自由國家の星座」「自由平等國民の合衆國」と五分の四「奴隷國家」から成り立つてゐるといふのが僞らざる事實だ。恐らくこの世界に於て、責任を持たぬ權力ほど危險なものはあるまい。英國は印度に對していかなることをしようとも、印度から責任を問はるゝ事なく、絕對權力を揮つてゐる。責任なき權力の行使といふやうな試みには、いかなる國家も堪へ得ないであらう。危險が大きすぎる。不正、暴政も甚だしい。英本國では支配者が國家に對して嚴重に責任を負ふ、そして危險を避けてゐる。カナダ政府もカナダの住民に責任を負ふてゐる。自由國家は凡て責任統治に依つて政府と人民と双方を保護するのである。

ところが印度では變則である。英國は印度を統治する。しかし印度に對して微塵も政治的責任を持たない。たとへ印度人が或る人類の自由とか特權を得るにしても、それは全然英國のお情

けで與へられた賜物に過ぎない。少しの政治的自由でも、政治的勢力でもそれが印度人の正當な權利として、印度人に屬するといふやうなことは、一瞬間でも英國人の許すところではない。本來それは印度人が正當な要求として堂々と英國に求むべきであり、また英國は要求されゝば拒む權利のないものであるにも拘らず英人の意志は直に最高の法律となり、印度は一も二もなくそれに絶對服從を強ひられる。

それで結果はどうなるか。印度の利益と權利は擁護されるだらうか。被政治者に對して責任を負ふ政治、即ち自己支配なくして、いかなる國民がその權利を保全し得るだらうか。印度を見よ、親しく印度に赴いて見るがいゝ。印度人が自由と自治を求むる印度人の闘爭、の意義を理解するに必要な鍵をそこに見出すことが出來る。

ロンドンから印度へ、巨船に乘つて航海する船客は、商人あり旅行者ありその他いろいろの人がゐるが、特に印度政府の官吏や印度駐屯軍の士官にして、休暇を家族と共に故郷で過して今任地へ歸還するといふ風な英國人も澤山交つてゐるだらう。ボンベイに上陸すると、そこはパリーやロンドンやニューヨークやワシントンを想はせる樣な立派な都市だ。そこのホテルは

英國式に經營されてゐる。ステーションへ行く、ステーションとしては世界有數の建物を見る。そこからカルカツタ行きの汽車に投じて約千五百哩を走つたのち、「宮殿の市」と呼ばれ、しかもその名にふさはしいカルカツタに着く。

だが一體乘つて來た汽船や通つて來た航路は誰のものだ。誰があの壯大なボンベイのステーションを作つたか、英國人だ。カルカツタへの汽車は誰が作つたのか、それも英國人だ。カルカツタに聳えてゐる宮殿みたいな建物は誰のものか、大てい英國人の所有だ。カルカツタでもボムベイでも貿易の隆盛ぶりを目擊したが、あの巨額な貿易を握つてゐるのは誰か、英國人だ英國政府は直接間接に約四百哩の鐵道を敷設し、印度全體を巡る郵便、電信も作つた。本國式の裁判所も建設した。そして印度をヨーロッパ文明と同列に置くやうにその他いろ〳〵の施設を爲した。印度を訪問した者が——「何とまあ英國は印度のために力を盡したことか、英國統治の印度人にもたらしたものは何と素晴らしい恩澤だらう」と、讃美の聲を漏らすものは怪しむに足りない。

しかし見落しはないか。もつと違つた一面がありはしないか。かう云ふ物質的な繁榮の裏に

その土臺となつてゐる隱れた事實がありはせぬか。目に付いた繁榮のしるしは印度人が繁榮してゐるのであらうか。それとも主人だけの繁榮のしるしではないかしら。英國人が安樂に贅澤に暮してゐるのなら、印度人も同じ樣に暮してゐるかしら。英國人が住んだり事務所にしたり或は貸したりしてゐる壯麗な建築の費用は、實際誰の懷から支拂はれたものであらうか。さういへば鐵道はどうだらう。電信はどうか。その他一切のものはどうか。果して英國人が拂つたか。若しかすると世界中で一番貧乏に惱されてゐる印度人の懷から取りあげられた血のにじむ樣な稅金でもつてそんな費用がすつかり支拂れたのであるまいか。

通り一遍の旅行でなく少し變つた觀察をするがよい。都市の印度人ばかりでなく村落の印度人の中へもは入つて見るがよからう。さうすると印度人の約八割は「ライオツト」と呼ばれる印度特有の農民だ。生活資料を土地から直接に取つてゐる貧農だ。果して彼等の生活は年々よくなりつゝあるか、或はだん〳〵慘めになつて行くのではないか。面倒がらずによく見ることだ。

ことに印度には世界に知られた飢饉がよくある。飢饉の原因は果してどこにあるか。印度の

暗影たる惡疫、ことにペストの流行はどうして起るか。

そこに印度の一面がある。それをまづ捉へなくては、とても印度問題の眞相を理解することは出來ぬ。近世の印度政治史が暗影に鎖されてゐるのと調子を合せる如く、非常に惱ましい悲慘な事情を生んだのは打續く大飢饉とペストの流行である。

こゝに名高い英國官吏が其の著書にものした描寫がある。彼は永らく印度に奉職して印度の裏面もよく知つてゐた。尤も彼は英國人だからウツカリするとその英國人としての偏見に捲き込まれる恐れがあるが、かれリリイ氏は其の著「印度と其の問題」の中に書いてゐる。

「十九世紀の初から八十年間に千八百萬人の印度人が飢饉のために斃れた。ヴイクトリア女皇が女帝の位に卽かれた年、一年間だけで南印度に五百萬の餓死者があつた。自分のよく知つてゐたベラリー地方では、一八七六年から一八七七年にかけての飢饉で、全人口の四分の三が亡くなつた。予は終生飢饉の經驗を忘れることは出來ぬ。每朝馬に乘つて役所に出掛けると、路上幾百幾千の死骸が累々として野犬と禿鷹の貪るに委せられ、更に傷ましいことは世の中の福の神であるべき子供たちが、母からさへ捨てられたらしく、言はれぬ悲しさうな顏をして目

だけを引込んだ穴からキラキラさせ、肉はゲツソリ落ち、殘つてゐるものは骨と皮ばかり、頭はシヤレカウベの如く、弱少な體格は汚はしい病氣に滿ちてゐさうだつた。その病氣も餓から來たもの、その餓の中に生れ育てられたのであらう。その光景と感想は、永久に髣髴として予の心に殘るだらう」

ヨーロツパの繁榮から離れて飢饉の際の印度へ行つて見た者は、右の記述が良く眞を寫してゐることを知るだらう。

リリイ氏は前世紀の八十年間に於ける餓死者の數を千八百萬と算してゐる。靜かに思へ、カナダとニュー・イングランドとデラウエヤーとフロリダの全人口に等しい人間が、食物のないばかりに死んだのだ。フランスの人民の丁度半分死んだのだ。而も飢饉の慘狀は年と共にますます激しくなるのだ。試みに第十九世紀を四つに分けよう。二十五年づゝになる、最初の四半世紀には五回の飢饉に約百萬人の人命を失つた。第二の四半世紀には飢饉が二度あつて約四十萬人の死者があつた。第三の四半世紀には飢饉が原因で死者五萬を算した。最後の四半世紀にはどうか、實に飢饉に襲はれること十八回、死者の數すべて千五百萬乃至二千六百萬と云ふ驚

くべき數に上つてゐる。

飢饉は事實として殆んど印度の年中行事となつた。政府の發表しない時でも印度には飢饉がある。世界は印度に飢饉があるといふことを知らずにゐる。降雨潤澤、穀物豐饒の年にも飢饉がある。印度の何處かで屹度數十萬或は數百萬の生命を奪ふ程の飢饉がある。そんなことは英國政府から出る文書には少しも書いてない。印度へ行つて目のあたり見て始めて分る事實である。熱病や赤痢などのために死亡したと英國政府から報道する數百萬の人民は、實は長期の恐るべき食物缺乏、つまり飢えから來る衰弱の爲に斃れたのが大部分である。ペストやインフルエンザの如き流行病が疾風の枯葉を卷く樣な勢で忽ちの間に蔓延して行くのは、永い〳〵間の飢渴に依つて人民の身體が弱り切つてゐるからだ。

かくして印度人民を根絶さへし兼ねないほどの大飢饉が續けざまに起るのはどういふわけか。普通には降雨の不足からだと云はれる。而し百年前に比して量が非常に減つたとは思はれない。それは兎に角一雨量の不足が何故に飢饉を齎すのだらうか。否印度では雨量が少いと云つても、人民全體に充分な食物を給し得るだけの生産物が出來ないほど、雨量が少くないと

いふことは明かな事實とされてゐる。然らば何故餓死する者があるか。それは決して眞の食物の缺乏から來てゐるものではないのだ。たとへ一地方に不足があつても、鐵道その他の方法で他の地方から食物を運ぶことは雜作ないことだ。印度の食糧生産物は決して不足していないのだ。歐洲大戰のすむ頃までは、印度に於ける食糧品の價格は、あまり高くもなし、安くもなし大たい中庸を得てゐたと云ふことは、英國人民の二つの委員會から別々に調査した結果期せずして一致した報告である。にも拘らず數百萬の人民が喰ふに食なくして斃れるのだ。

その原因は筆紙に盡し難い貧困にあるのだ。印度飢饉の根本原因に就て、徹底的に探究した結果は、農作の年に於ても、餓死に一歩を距てるほどの貧窮のために、緊急の備などは夢想もし得ない狀態だから、一たび凶作に見舞はれると萬事休し、救恤慈善によつて救はれない限りは坐して死を待つより外はないのだといふことが明かになつたのである。

永くアツサンの長官を勤めたチヤールスエリオト氏は――「農民の半數以上は、三度の食事を完全に食べた時の心持がどんなものかを知らないのだ」と云つてゐた。また總督顧問であつたゴカノル氏も、――「六千萬乃至七千萬の印度人は一年に一度でも、ひもじい氣持を忘れた

ことはない」と書いてゐる。

而もかゝる狀態はます〳〵惡化するばかりだ。最も信頼すべき證人とも云ふべきマハトマガンヂー氏やシー・エフ・アンドリニー氏の意見も、現在のところ改善の望みは全くないと云ふに一致してゐる。

印度の裸像を瞥見したそれは通り一遍の旅行者が、ロンドン風やパリー風に經營されてゐるホテルに泊り、その英國顯官と接觸することに依つて知り得るやうな印度でもなければ、英國人が印度を世界に紹介するための書物や、商業上の報告書などに「誇りをもつて描かれた印度」でもないのだ。重税の下に喘ぎ〳〵外國人に依つて統制される政府のための、巨額の費用を負擔させられてゐる虐げられたる印度人の印度だ。飢饉に會へば餓死する外ない哀れな人々の印度だ。自分の國が外國人から搾取されることを免れるため、從つて貧乏と困窮から脱け出さんがため、自由と獨立のために戰ひつゝある印度人の印度だ。苦しめるものゝ內面的生活の描寫だ。印度はしかし何故にこれほど恐るべき貧困に陷つたのであらうか。

ジョン・ブライトは之に答へて云ふ。「豐饒な土地を持ち、あらゆる種類の生産物を持ちなが

ら、しかも其の國民が極度の貧困に惱んでゐると云ふことは、その國の統治の方針に根本的の錯誤があるからだ」と。

印度の貧困の原因は重税にある。

イングランドとスコツトランドに於ける課税はたしかに重い。人民は絶えず怨嗟の聲を放つてゐる。しかし印度はどうだ。印度人はイングランドの二倍、スコツトランドの三倍の重税を默々として負擔せねばならぬ運命に置かれてゐるのだ。

英國下院に於て、カスカルト・ワツトソン氏はかう叫んでゐる。――「印度の課税の生産に對する比例は他の國の二倍である」

イングランドやスコツトランドに、よしや重税が課せられてゐるとしても、それらの地に於ては、人民の收入がそれに相當して多額なることは印度人の比ではない。

ハーバート・スペンサー時代に、すでに、――「印度住民の收穫の半ば以上に達する苛酷な課税」と彼は痛烈に攻擊してゐる。彼の時代から今日に至るまで、いかに人民が慘憺たる窮狀に陷つてゐやうと構はずに、課税は重く〳〵なり勝るばかりである。

一例を鹽稅に取つて見る。一體、鹽と云ふものは今日世界の文明國に於て、最後に課稅せらるべき物質の一つである。その理由は、一つは鹽が國民の日常生活に絶對に必要なものであるからだ。二つには、その必需品に課稅すれば、貧しき人々に重擔をかける結果となるからだ。しかしながら鹽稅は、收稅上の簡便性を持つてゐるから稅率を高くすれば、政府の收入は非常に多くなることは分りきつたことだ。人は鹽なくしては生きて行かれないからだ。

英國政府は、印度人に重い鹽稅をかけることを不變の方針としてゐる。印度では、保健上缺くべからずと認められる鹽の量の半分も消費されて居らぬと云ふことは、衞生當局の調査に依つて明かにされてゐる。もつて如何に印度鹽稅が過重なものであるかを知り得るではないか。

貧窮の第二の原因は、英國の統治により、印度事業の破壞である。

英國人が始めて印度の舞臺に現はれるまでの印度は、世界の最富國であつた。英國人の貧弊な目を印度へ惹きつけたものは實にその富なのだ。その巨額の源は主として生產事業の繁榮にあつた。印度の綿製品、ショール、ダツカの毛斯綸、アーメダバツト市の金巾、毛織物、シンド、陶器、寶石、金屬品などは、唯にアジアのみならず、全ヨーロツパや、北アフリカの主要

市場に於ける寵兒であつた。これ等の生産業に依つて榮えた數百の町や村はまるで廢墟と化してゐる。仕事を失つた數百萬の印度人は四散して、疲弊し切つた農民の中へ割り込んで行くより外なかつた。

何故さうなつたか。英國は印度にその商品の市場を求めたのであつた。印度が印度人自身の製品に依つて自給される狀態にある限り、英國商品は容易に印度へ侵入することは出來ないから、そこで印度製品が血祭りにあげられたのだ。英國は先づすべての權力をその手に收めると次には印度の生産事業を破壞する爲に、關稅制度を設け種々の法律を作つた。そして印度はすつかりマンチエスター製品や、バーギンガム製品の市場と化し去つたのである。縛られてゐた印度人は關稅に反對する力も何もなかつたのである。

昨今では製絲、製麻、製毛などの工場が少しづゝ復活しつゝある。しかし、これらの工場から産出する富は、もはや昔日の如く印度及び印度人に何の寄與するところもなく、徒らに工場の所有者や、資本家の懐を肥やすに過ぎない。しかも工場主や資本主の大部分は英國人であるそれ等の工場は印度人勞働者に職を與へてはゐる。しかし、かれら勞働者は、低廉な賃銀で長

時間の勞働を、衛生設備の行き屆かない中で强制され、不潔な小屋の中に住はされるといふ虐待をうけてゐる。

印度の貧困の第三の原因は、莫大にして且不必要な政府の經費である。

印度の稅制を論ずる者の一樣に指摘するのは、政府の經費が世界に冠たることである。その理由は至つて明白だ。卽ち印度における政府はその土地の人民によつて組織されてゐるのではなくして、遠い英國の人々に依つて組織されてゐるからである。外國人たる英國人が凡ての權力を掌握してゐる以上、英國人が自分の思ふ儘に官職を設けたり、俸給を定めたりする權力を持つてゐる。それから自然の成り行として、彼等は職制を設けることの少きに過ぎたり、俸給や恩給を貧ること輕きに失すると云ふやうなことは決してないのである。印度に於ける高位の官職は、すべて英國人をもつて占められてゐる現狀である。制度の表面上は文官の地位が印度人にも開放されてゐるが、實際にはいろ〳〵の障壁があつて印度人は下級官吏の地位以上に上ることは許されない。その俸給の一部分を以て有能印度人にやらせる方が、遙かに良く運用されるに相違ないと云ふことは誰しも認めてゐることである。しかしそれを實行することは、そ

の利益多い地位をその子孫に傳へようとする英國の決して望む所ではないのである。

哀れな印度民衆は、英國官吏の豊かな俸給と恩給を貢ぐために血と汗をしぼつて働いてゐる英國官吏はます〳〵増へ、その俸給と恩給は増すばかりであるから印度農民は飢えに瀕せざるを得ない。しかもその俸給、それより遙かに莫大な恩給は一度支拂はれると永久に印度へは歸つて來ないのである。

次に印度人の負擔を余儀なくし、彼等を貧困に追ひやるものは巨額の軍事費である。これ等の軍隊が、印度防備のために必要なる限度に於て、維持されるならば問題はないが、その軍隊は、遠くアジアの各地や、アフリカや地中海諸島や更にヨーロッパにさへも派遣される、且つまた印度以外の所で行はれる多くの戰爭に出兵した場合も、印度軍隊の費用は、一切印度の負擔と云ふことになつてゐるのだ。印度は印度人の利害休戚には何の關係もない戰爭、つまり英國が他の民族を征服し、自分の勢力を擴大することのみを目的とする外國戰爭に無關係の印度が、强制的に負擔された軍事費は前世紀を通じて四億五千萬弗に上つてゐる。

その罪惡の中で最も許し難きものは、英國が印度の自由を全く奪つて仕舞つたと云ふことだ

印度は自らの運命を定めるに就て、針の先ほどの自由も許されてゐないのだ。カナダ、オーストラリヤ其の他の英領植民地は、自由と自治を許されてゐるに引きかへ、印度は完全な隷屬關係を強ひられてゐる。その人民は大部分アジア最優等民族たるアリアン人種であり、彼等の中には智識、才能、誠實その他の資性に於て英國人に匹敵するもの、その數に於ても劣るものではない。この民族を壓制に依つて征服せしめることは實に、英國人が絶えず誇とする自由正義に對する明瞭な反逆冒瀆でなくして何であらう。又印度統治に當つて、英國が自國の利益のみを計り印度の利益を少しも顧みないのは實に、驚くべき短見者流の政策と云はねばならぬ、すでにこれあるが爲に英國はアメリカ植民地を失ひ、カナダを失はんとしたではないか。今にしてその過誤を正さざれば、やがて印度は英國の手から放たれるであらう。

印度はどうしてこの災禍と負擔から救はれるか。いかにして印度人は沈倫の底から浮び出し得るであらうか。

その一は租税の輕減である。無論これは必要、いな焦眉の急を要する問題だ。しかし印度に苛酷な租税を改正する力が與へられてゐない以上は、何等の期待を抱くわけにも行かぬ。政府

は重税を課して自分の思ふまゝにそれを使つてゐる。それでもまだ足らずとして税率を引上げ誅求に誅求を重ねてゐるのではないか。人民怨嗟の聲も彼等には馬耳東風だ。近年も租税は増すばかりで英國人の誇としてゐる一九一九年の「新改革」に於ても、微かな輕減さへ認められなかつたばかりでなく、むしろ租税は引き上げられた。

第二の救濟策は破壞された産業の復興だ。それがために適當な方法、その他の手段を講ずると云ふのである。これは眞の印度の欲するところに違ひない。しかし印度が自活の力を持つてゐれば、その實現も難きにあらずである。しかし自己の利益のために一たびこれらの産業を破壞した英國政府が、たやすくその復興に贊成するだらうか、これも云ふべくして行ひ得べからざることである。

次に提唱されるのは、不必要かつ不條理なる軍備の縮少である。これも云ひ易くまた道理ある主張であるとは云へ、英國政府が永年のしきたりとして軍費を要求するに對して印度はこれに反對して縮少する力を與へられてゐない現狀に於ては空論に終る外はない。

英國へ富の流出するを阻止する方策も唱へられてゐるがこれもまた富の流出を欲し流出の道

を開き、それに依つて富み、それを繼續せんとする英國の手に一切の權力がある限り印度人は富の流出を防ぐ方向に一足も踏み出すわけに行かぬ。

以上の種々の對策は、一つとして實現される可能性はない。それは根本に於て印度が外國人によつて支配されてゐる隷屬國奴隷の國であると云ふ事實に基因してゐる。これがためには印度は自己の利益を守ることも、不利益な法律に抗議することも、發展の策を行ふことも出來ないのだ。

言葉を換へて云へば、印度の經濟的窮乏、政治的衰微其他凡ての禍から、印度を救ふものは一に印度の自治あるのみだ。

しかも印度はこれを渇望してゐる。この理論はいづれの時いづれの處においても誤りなき眞理だ。英國にもそれは理解されてゐる。若し英國が他の國に支配されることある場合には、英國人はむしろ死を選ぶだらう。カナダ、オーストラリヤ、ニュージランド、サウスアフリカのいづれも彼等が自己の法律を定め、自己の運命を保護開拓するに就ての完全なる自由を得ない限り、英帝國の一分子としては一日も留ることをいさぎよしとしなかつた心事も首肯し得るの

だ。

印度の望むところは英國のパートナー（組合員）として、他の植民地と同様に完全なる自治を要すると云ふことではなく、英國とは何等の關係なき獨立國となることである。

以上は自由のために戰ひつゝある印度の苦鬪が何を意味するかを理解するための根據であるが、あまり永く服從の下に置かれた大民族の正當かつ必然の覺醒であり、抗議である。それは曾つて光輝ある歴史を有し、傳統の優越感を失はざる家族が、汚辱の中から立ち上り、囚へたる足枷手枷を斷ち切つて雄々しく振ひ立ちたる努力である。それはジョン・スチュアート・ミルのいはゆる「人間の牧場」を脱して、彼等自らの國を再建せんとする者の雄叫である。

印度屈辱史と大兵亂

一

多くの人は英國が今日の地位を獲得せる上に印度が如何に重要な役割を有するか？を理解することなしに、印度を「英帝國の王冠」の最も輝かしい寶石と稱する。然るに二百萬平方哩に達する印度の搾取こそは、英國をして歐洲の覇權を制せしめたものであり、印度人三億の市場を制御せることこそ、英國の工業を刺戟し、十九世紀初期に於て凡ゆる競爭者に打ち克たしめ得たのである。

資本主義的英帝國主義は印度搾取の上に打ち樹てられたものであるが、その形態は英國の經濟發達如何に依つて異つてゐる。卽ち十七八世紀に於ては專ら印度の富を略取し、その蓄積を以つて工業資本を得、十九世紀に於ては印度の富を搾取する一方、印度をして英帝國の製品の

主要販路たらしめたのである。今日印度人の勞力の搾取及び英國の投資は英國の凡ゆる權力によつて擁護されてゐるが、是れこそ印度搾取の段階であつて、その中には既に自壞の萠芽を抱藏してゐるのである。

三億五千八百萬の印度人に對し、在印歐洲人は二十萬に過ぬが、蘭領及佛領に屬する小面積を除き、悉く英國の支配に屬してゐるのである。所謂王侯國は名目上王侯の主權下にあるが、彼らは事實英國の有給使用者に過ず「最高政府」の意に從はざる限り、其他位、高給を失ふべきことは彼等の最もよく知るところである。王侯國は印度封建制の遺物であり、英國權力の支持なくば、新らしき經濟制度の發展と共に當然消滅すべき存在である。自然彼らは彼らの保護者に對し忠誠を示さざるを得ず、一般印度人に對して常に反動的役割を演ぜしめられてゐるのである。

王侯領土は全印度の三割九分に當るが、其人口は全印度人口の二割三分に過ぎない。其中最大なる王侯國はハイデラバード國であり、面積は伊太利一國に匹敵し、人口千二百萬を算す、王侯國の國防、外交は全く英國の手中にあり、內政上に於ける地位も英領印度と同樣の地位に

ある。ヘンク・コント卿は王侯の地位に關して次の如く述べてゐる。

「封建王侯の地位を餘り高く考へるのは同情なき見方である。彼等は自らを守るに無力であり、上訴すべきところもない。彼等の利益を監視する輿論もない。理論的には英帝國主權より獨立してゐるが、事實は全然その支配下にある。その位階勳等は彼等の王宮に英國を代表駐在する英國官吏がシムラの英國政府と秘密に打合せ、勝手に與へるものである」

人口二億八千萬以上、面積百萬平方哩以上に達する英領印度は英國政府の直轄統治地であり是を支配するのは英國官吏、就中總督を指揮命令する印度事務大臣である。總督は英國王に依り任命せられ其任期は五ケ年である。印度は國際聯盟參加國であり、王侯國を含む代表がゼネバに派遣せらるゝが印度が被征服植民國であることは是れに依つて何らの影響も受けないのである。

二

印度に達する海路は一四九八年喜望峰を廻り印度西岸カルカツタに達したヴスコ・ダ・ガマ

に依つて發見せられた。其の結果印度人と葡萄牙人との交易が始まり、十六世紀を通じ、葡萄牙人はカルカツタ及び其對岸に倉庫や商社を建設した。是に次いで和蘭人が來印したが、間もなく印度の絹織物、綿織物、阿片、香料等の商賣の儲かることを聞き込んだ英國人が、その利益に均霑せんとして來印するに至つた。

一六〇〇年末倫敦の商人は東印度會社を設立し、印度に於ける英國の貿易を獨占する特許狀を得、その特權は斷續はあつたが一八一三年迄是を享有したのである、當時に於ける對印貿易といへば、印度人の手工業者から、無理矢理に安値を以つて買ひ取つた品物を歐洲に送ることであつた。而して印度手工業者はその生活程度の低いこと、その製品の對外價値に就いて無智であつたことの爲、易々と犧牲に供せられ、東印度會社は莫大な利益を擧ぐるに至り、その配當は年十割乃至二十五割に及んだのである。

最初の中會社は封建王侯より商租地として小面積の土地を借入れまた購入したが、軈て彼れらは其の權益を守り、また競爭會社に對抗するため城塞を築くに至つた。一六三九年會社は始めてアドラスに相當面積の土地を獲得し、玆に聖ジョージ城塞を築いたが更にチヤールス二世

は葡萄牙人より得たボンベイの土地を一六五八年會社に交付した。

會社は間もなく競爭者を驅逐する方策を執り、流血の慘事を起し先づ葡人、蘭人を逐つたが一六六四年設立された佛蘭西の東印度會社は强敵であり、印度爭覇を繞る英佛の確執は十八世紀に於ける兩國對立の樞因となつたのである。軈て印度帝國の壞滅、各地方王侯の抗爭は、外國會社が陰謀術策、賄賂を以つて土地、權力、商權を得るに格好の機會を供した。就中佛蘭西は各地方王侯を利用する戰術に最も長けてゐたが、英國も軈て是に匹敵するに至り、殊に本國政府より資金、兵器の潤澤なる供給を受けてゐた。英國の遠征はカルカツタを根據として一六八六年に行はれ、その後印度人傭兵を以つて大部隊を編成した。

三

印度に於ける英國の領土擴充の基礎は東印度會社書記であつたロバート・クライブが南部に於いて佛軍を破りベンゴールを支配し得るに至つたことに依つて確立せられた。卽ち一七五七年プラシーの戰に於てクライブが印度王軍の將領を買收したことに依つて得られたのであつ

て、一方ベンゴール王に擁立せられた叛徒から多額の金を支出せしめたのである。クライブ自身土地收入年三萬磅の他に二十萬磅の金を得たのである。而して此の傀儡の擁立に依り、傀儡王に一部分の土地所有權を名目的に認めたる外、ベンゴールは事實上東印度會社の支配下に歸したのである。

ベンゴール初代總督クライブの行動は東印度會社職員も亦是に倣ふに至り、次の如き結果を生ずるに至つた。

東印度會社は印度の政治的支配の他、茶の貿易、支那貿易を獨占するに至つた。然し沿岸貿易並に國內貿易は會社の高級社員の獨占するところとなつた。鹽、阿片、その他の獨占は莫大な利益をもたらした。社員らは自ら價格を決定し、不幸な印度人を勝手に搾取した。

洵に錬金術師も及ばぬ利巧さをもつて無より金をつくり出すのである。故に一日にして大財產が出來た。ワレン・ヘスチングスの審問の結果斯うした事實が無數に現れた。例へばスリバンと言ふ男は阿片地區から他へ轉任するにあたり、阿片契約權をビン某に四萬磅を以つて賣却した處、ビン某は是を卽日六萬磅で他へ賣却した。然も最後にこの契約を實行した者が、猶且

つ莫大な利益を得たといふことである。また英國會議に提出された表に依ると、一七五七年より一七六六年までに會社及び社員が印度人より貢納金として受領した金額は六百萬磅に達してゐる。更に一七六九年から一七七〇年に亙り英人は米を買占め法外の値段でしか賣らなかつた爲事業饑饉がもたらされたのである。

マコーレイはクライブ卿に關する論文に於て東印度會社の統治狀況を左の如く活寫してゐる。

「社員は會社の爲でなく、自分の爲、凡ゆる國內貿易を獨占した、彼等は土着民をして安く賣らしめ、高く買はしめた。彼等は土着民のその若干を部下としてゐたが、是らの者が現れるところには必ず荒廢と恐怖がもたらされた。是等英國人社員の部下はその主人の權力を振り廻し、その主人は會社の權力を振り廻した。カルカツタでは莫大な產が容易に出來たが、他方三千萬の人民が極貧の底に苦んでゐた」

英國の侵入前、印度に於ける支配階級の經濟力は、村落より徵集する地租が主なるものであつた。然し村落は自ら資力がなき故に支配者が灌漑の世話をしなければならなかつたが、土地

の絶對支配權といふものはなく、收獲は耕作者と國王乃至國王が地租徵集官として任命せるものの間に分配せられた。

收獲の中から支配者に納むべき割合は各地方及び時代に依つて異つてゐるが、ヒンドゥ帝國時代は概ね收獲の六分の一と定められ且つ現物收納を認められてゐた。其後地租は增加せられたが、アクバル帝の時代（一五五六年―一六〇五年）行はれた土地及び生產力に關する調査の結果收獲價格の三分の一を現金にして政府に納むることゝなつた。更にその後印度帝國が沒落に瀕するや收稅吏は漸く人民を誅求し、十八世紀末に至ると農民は收獲の半以上を地租として納付することを强要せられたのである。

英國が印度を統治するに至ると新らしい時代が始つた。是より先き村落長老の地位は漸く變化し、村民の信賴する公吏は王の官僚的代理となると共に他方に於ては大地主、ゼミンダル（地租徵收を引受ける地主）の手代となりつゝあつた。

印度帝國の崩壞は中央政府の重要なる機能をおろそかにしつゝあつた。卽ちそれは印度農村にとつて最も重要なる灌漑設備の維持發達といふことである。

四

一七六五年ベンゴール・ビハル・オリツサを手始めに東印度會社が印度各地を支配するに至ると共に、古くから此社會設備は次第に荒廢に歸せしめられた。然も會社役員は舊支配者の建設せる灌漑設備を維持せんともせず、また地租の根柢となつてゐる此社會組織を理解することも出來なかつた。土地收入に村落が共同して責任を有することを無視し村落經濟には全く新しい英國式私有產制が植ゑ付けられた。既にゼミンダル、徵稅吏は大地主とせられ、農民より出來るだけ稅金を搾り取る樣に仕向けられた。また他の地方では土地の有力者を新たなゼミンダルとなした。而して今や新たに登記された地主となつたゼミンダルは會社に一定の稅を拂ふ他は土地及び耕作者に對し完全な自由權を獲得し、土地の賣却擔當をなし得るに至つたのである。而して右に伴ひ一種の手代制度が發生し、農民は是等總てのものに對し自己の勞働を以つて貢を納めなければならなくなつたのである。

一七六八年ベンゴールに參議會議長が會社理事會に宛てたる書翰に曰く、

「收稅員はゼミンダル、大農より出來るだけ收入を擧げることを計るも、ゼミンダル、大農は彼等を使ふ小農より出來るだけの收入をとる權利があるわけである」

斯かる政策を執れる結果一七七〇年ベンゴール州に於いて印度歷史上未曾有の大饑饉が發生するや、千萬人が餓死するに至つたが、會社に對する稅は依然として徵收されたのである。

一七七〇年五月九日カルカツタ理事會の文書に曰く、

「現下の饑饉が餓死者、乞食を生めることは未だ嘗て他に其類を求め得ぬ。かつて豐穣なりしブルネー縣では三分の一以上の餓死者を生じたが、他の地の慘狀も略々同樣である」

一七七二年ワレン・ヘスチングスは理事會に次の如き書翰を送つてゐる。曰く

「該州の人民は少くとも三分の一餓死し、從つて收獲の減少を來せるにも拘らず、一七七一年歲入は一七六八年のそれを凌ぎたり。慘狀前述の如くなるに對應し、歲入の減少を豫想されしに拘らず、然らざりし所以は前年度の標準を萬難を排し强行せる爲なり」

印度國王の徵稅吏が一七六四年—一七六五年に集めた金は八一八、〇〇〇磅であつたが、一七六五年—一七六六年東印度會社の支配下に於ける收入額は一、四七〇、〇〇〇磅となり、一

七九〇年—一七九一年には二、六八〇、〇〇〇磅となつた。また會社の收入に歸する地租は一八一二年—一八一三年四百九十萬磅より、一八二二年—一八二三年千三百六十萬磅、更に所謂印度兵亂（實は印度人の排英革命）の起つた一八五七年度には千五百七十萬磅に增加したのである。

尤も右增加は新地域の征服、耕地面積の增加にも依るものである。會社にとつて地租以外の財源として鹽及び海關稅收入があつた。所謂大兵亂當時會社の總收入に對する地租收入の割合は三分の二で鹽及び海關稅收入が夫々四分の一程であつた。然も其の後會社の收入は著しく增加し、會社統治始まつて以來、六年間の歲出入報告書に依れば一七六五年の總收入の二、二六〇、〇〇〇磅が翌年度三、八〇〇、〇〇〇磅となつたが、是れより徵稅費、會社の軍事的行政的事務費を差引き猶一、二五〇、〇〇〇磅の餘剩を來したのであつて、是は總て英本國に送金せられたのである。一七六五年—一七七一年に至る歲出入は次の如くである。

總收入　二〇、一三三、五七九磅

純收入　一三、〇六六、七六一磅

經費	九、〇二七、六〇九磅
剩餘	四、〇三七、一五七磅

然し右の如き純收入の三分の一に達する剩餘だけがベンゴール經濟資源の搾取でなかつた。英國の役人は印度商人を正當な職業から驅逐し、莫大な產をつくるに至つたからである。ベンゴール富源の搾取に就てはベンゴール知事（一七六七—七〇年）ベレルストが編纂せる一七六六—一七六七、一七六八年間のベンゴール輸出入統計に依つても知ることが出來る。

輸入總額	六二四、三七五磅
輸出總額	五、三一一、二五〇磅

儲つた金は英本國へ送られ、英國は是を以て印度の產物を購入し、是れを輸出販賣して更に一層の儲けを得た。斯て一七九五—一八一一年迄の間會社の投資は一、三二二、八七七磅を計上せられるに至つた。

會社がベンゴール・ビハル・オリッサから非常な儲けを得たことは、更に他の地域を獲得する野心を起さしめた。而して一七六一年ボンディシェリーに於て佛蘭西が敗退せる後英國の領

土併合は着々進行し、一八五七年の大兵亂に迄至つたのである。此の間マソイール、カーナチック、タンビョール、ラジプタナ、ビルマ、パンジャブ、シンド、ウードが併合され、又は英國の保護下に置かれることゝなつた。而して是等は賄賂または謀計を以つて遂行し得られなかつたので、幾多の血醒き事件の發生を見るに至つた。卽ちマーラッタに於ては三回、マイソールに於ては二回の戰爭があつた外、シック、グルカ、ビンダリ、アフガン人との間に夫々戰爭が行はれた。斯かる代々總督の併合政策はダルシー卿（一八四八—五六年の總督）時代其の極に達し、同總督は、印度王侯が養子をなす權利を奪ひ、實子なき地方王侯より其の領土を奪ふの擧に出でたのであつて、斯て一八一四年時代の英國領有面積四八〇、〇〇〇平方哩は一八五六年九八七、〇〇〇平方哩に達し、其の結果從來英國に友好的であつた地方王侯も一齊に英國の敵となるに至つた。

五

此の間東印度會社の地位は大なる變化を遂げ、印度に於ける英國の經濟政策も亦大いに變化

するに至つた。英國の貿易商人はかねて會社の利潤大なることを嫉視してゐたが、當時漸く勢力を得つゝあつた英國工業者階級は、印度問題に關し議會に於て大なる發言權を得ることに成功し、其の結果一七六八年—八四年迄會社は年々英國大藏省に巨額の納付金を支出せる他、英國の特定物資を印度へ輸出せしめられ、且つ遂には其の領土を英國皇帝任命の監督局の管下に置かれることゝなつたのである。

過去二世紀間英國に積出された富は、大規模の資本主義工業を發達せしむる基礎となり、資本家達は英國議會に於て勢力を得るに至ると共に、印度開發に拍車をかけ始めた。斯てダット氏の言へる如く、

「英國の機械工業の侵入は印度の家內的工業を破壞すると共に印度は英國製品の大なる市場となり、又資源の供給地となつたが、其れは印度の經濟的發達を犧牲とし、英國資本主義を躍進的發達に驅り立てた。斯て印度統治の形式に變化を生ずるに至つたのである。卽ち印度開發の利益は、英國資本家の獨占するところとなつたから、英國資本主義の代行機關が印度統治を掌握することゝなつたのである」

既に一七〇九年英國議會は棉及び絹の輸入が英國製造業者に不利なりとし、印度人が絹又はキヤリコを着し、又は是を織る事を禁ずる法令を通過せしめた。また十八世紀中を通じ印度の工業家は、英國に市場を奪はれ、その製品は大陸方面へ再輸出される場合に限り、英國に輸出せられたのである。他方に於て英國の棉業家は印度の資源を搾取すると共にその製品を印度に賣り付けるに至つたのであつて、十九世紀までに、印度には多數の英國棉業家が入り込むに至つたのである。

英國は斯て印度の資源を、英國の資本を以つて開發するに至つたが、此の發展期に於ては、幾多流血の慘事が見られたのである。これよりさき印度の社會機構が逐次壞滅せしめられ、英國の工業家、金融家に對する不滿は漸次破裂點に達しつゝあつた。一八五七年の印度兵亂と稱せられるものは、決して單なる傭兵の兵亂ではなく、英國の併合政策、東印度會社職員に依る壓迫的土地制度及び印度手工業の壞滅に基づく印度人の反抗的革命であつた。

六

印度「兵亂」はメールートの印度兵の反亂に始り、それは軈てベンゴール軍隊に派及したが英國にとつて何よりの脅威はそれが、人民の不滿の最も激しき地方に起つた事であつた。軈て反亂の報は全國に傳はり、それと共に各所に反亂行爲を見るに至り、一時は英國の支配は中絶するかに見へた程であつた。

土地を奪はれ、所得を掠められた、王侯豪族は奪はれた特權財産の回復を願ひ重稅と凡ゆる誅求に苦める農民はその窮狀を愬へ、手工業者は外貨の競爭よりの保護を要求し、甘蔗及び藍栽培地の勞働者は直接に外國資本家の搾取に苦しんでゐた。而してこれら總てのものが、今や團結し英國に挑戰するに至つたのである。

當時英國にとつて最も危險なりし區域は、アグラ、ウード、ノース、ウエスト、フロンチアー州を含むカルカッタよりメールートに亙る地域であつた。これら地域は總べて反亂を起し、都市の小市民並びに勞働者が是れに參加しカウンポール、ラクノ、デイリーに於ては猛烈なる市街戰が行はれた。地方有力者が反亂を指揮し農民がこれに呼應した。ベンゴール、ビハル、オリッサに於ては農民及び栽培園勞働者が反亂を起したが、適當な指導者を缺いたため、遂にゲ

リラ戰に出でざるを得なくなつた。

パンジヤブ州に於ては農民の抗爭激烈を極めたが、英國政府は同州が國境に位置を占むる重要なる地域たるに鑑み、地租を比較的安くしたので、同州は遂に英國側に加擔するに至つた。斯て印度大兵亂は遂に失敗に歸したのである。その結果老幼男女に對し、言語に絶する暴虐が行はれた。反亂中に於ても老幼男女は村と共に燒かれ、差別なく射擊が行はれたが、軈て軍法會議が開かれ、老ひたるも、若きも一齊に絞殺に處せられた。斯して三ケ月間に六千名が絞殺の刑に處せられたのである。

一八五七—八年事件は、東印度會社が、印度を領有することの不當なるを敎へ、玆に强力なる中央政府が創られることになつた。又印度の如き大國が、交通通信機關の整備なくして政治し得ざる事に鑑み、從つてここに大資本を投じて鐵道、道路、通信を設備する事が大部隊の守備隊を常駐せしむるより、經濟的なる事が判つた。斯て英國は是れを機とし反動的王侯、地主と結托するに至つた。東印度會社は株式に對する配當のみを受け、政府の監督局は廢され、その代り英國議會が印度事務大臣を通じ、印度總督及び在印度英國人官吏を監督することゝな

つた。

重工業の發達に伴ふ、英國資本主義の要求は大兵亂を機とし印度投下資本を增加せしめ印度資源の獨占を强化し、新らしき帝國主義時代を樹立するに至つたのである。

印度の國民主義運動

印度獨立のための、印度國民主義者の運動の特質を明かにするには、次の事實を先づ云つておかねばならぬ。

一、キリスト紀元はるか以前に於て、印度國民は、世界に比類の少ない文明と教養とを發達せしめてゐた。英國などが其の國民的統一を得る遙か以前に於て、印度に於ては、既に都市國家（共和制的）大なる王國及び幾多の王國が繁榮してゐた。例へば、アソカ大王の帝國は、少くとも今日の印度全土ぐらゐの廣大な領域であつた。而して又、印度國民は、哲學とか宗教方面のみならず、純正科學ならびに應用科學の分野に於ても、數學とか物理、化學、さては機械醫術等に亙り、人類に貴重なる貢獻をした。でこれ等によつて見て、印度國民は將來に於て偉大を成し得る能力を有すると云ふことを認識し得よう。

二、事實として忘れてはならないことは、印度は特別の事態により、特に彼等自身の過失に

依つて、白人の勢力の下に服從せしめられたのであるが、それ故をもつて、直ちに印度國民は彼等みづからを治め、且つ、外國の羈絆を脱する能力がないと思考してはならないと云ふことである。

歐洲諸國民の多數も、過去に於ては被征服人であつて、其のうち許多の國民の如きは數百年の間、外國の屬國となつてゐた。併も彼等は支配者の羈絆をはね脱けて、自由となり、且つ獨立を贏ち得たのである。斯く歐洲、アジア、及びアメリカの多數の國民が、過去に於て達成し得たことは、又印度國民に於ても、或る年月を待つて、同樣に達成し得べしと云ふことは承認出來よう。

現存の被壓迫國民にとり、其の自由を回服せんが爲に最も緊要なることは、其の國民——少くとも其の主要分子が國民的獨立を主張して、斷乎たる決意と實行を以て、其の目的に突進することである。印度國民の間に於て、英國の壓制統治から解放を得んとするの機運が兆候しつゝありやとの問ひに對しては、吾人の答は簡單である。——印度の事情にさして通じてゐない人々と雖も、最近數年間に於て印度獨立を目的とする運動が、其の容量と質度に於て、重大な增

進を來したことを否定しない事實を見て吳れと云ふのである。事實に於て、今日の印度を吹き流れてゐる嵐は、英國の支配に對する公然の反抗と云ふ主題である。この反逆氣運の特色は、それが漸く數百年以前に於て起つたと云ふことゝ、而して、以來、漸進的に絶えず進展しつゝありと云ふ點である。嘗て印度で官吏をしてゐた一英人は云つてゐる——

「印度國民主義の觀念及び獨立の要望は、今日では印度人個々としての事でない。——印度全土に於ける斯樣な狀況の中に於て、やがて擾亂の到來は避け得ないことであつて、而して其の來たるや——吾人の專ら恐れるのは——更に一層熾烈なものでなければならぬと云ふことである」

印度獨立の運動は、一八五七年「セポイ・ミュチニー」に先んじて既に存し、それがこの「ミュチニー」に依つて表現されたに外ならない。而してこゝに注意すべきは「セポイ・ミュチニー」は國民的革命の勃發としての、すべての要素を具備してゐることであつて、當時、叛亂は全印度に擴がり、ヒンヅー族もモスレム族も、均しく印度を白人の支配から解放すると云ふ究極の目的の爲に合流して、此の鬪爭に從事した。で、若しこの爭亂が成功して、英支配者を印度か

ら驅逐し得たならば、この戰亂犧牲者は、國民解放戰の英雄として、世界の賞讃を受けたであらう。併しこの獨立戰爭は種々の原因に依り、殊に――

一、最も有力なる或る王族が、兵員、金力其の他の供給に依り、英人を援助した。

一、バンジャブの人民、殊にシック族が、この國民運動の奮起に加はらず、却つてシックの或る王族は密かに英人を援助したこと。

一、英國側は國際的應援を得たるに反し、印度革命は何等外國の後援なく、殊に當時回教世界の教父にある土國皇帝は、英國の友として、而して露國の敵として、宣言を發して、土國領内の印度人回教徒、殊にハイドラハード國王をして英國を援助せしめたこと。

一、印度革命黨側に、兎角統帥が缺けてゐたに對し、英國側は組織的軍略に依り、恐ろしく强硬なる態度を以て之に當つたこと。

等に依り失敗に歸した。

革命不成功の直接結果は、常に壓迫である。而してそれは印度に於ても同樣であつた。恐怖支配の下に於て、獨立運動は表面姿をかくし、唯だ少數の人々に依り、將來のよりよき日を待

望しつゝ、所詮、地下的行動に移り入つた。それ故この獨立戰失敗の後、少くとも二十五年は印度獨立の運動は、全く遲々たる行程に沈んだ。獨立の大望を胸に懷く人士も、主義を公然と人々に說き得ざるに至り、從つて民衆把握の效果は殺減されざるを得なかつた。

そこで印度國民の指導者共は、假令、局限された成功でも、それを納め得る唯一の機會は、合法的反抗運動にありと感ずるに至つた。武裝なく且つ味方なき國民は、薪木に臥して膽を嘗めるの苦を經過しなければならない。

以來一八八四年まで、印度國民主義運動は休眠した。尤も上級階級、殊にインテリゲンチヤの間に於ては「憲法運動」を思ひ立ち、小規模の宣傳鬪爭を企劃した。此の休眠期間に於て、印度は歐洲の社會的、政治的及び教育方面の思想的影響を受けた多數の新人隊を作り上げた。而して彼等は「印度國民會議」運動の名を以て活動を始めた。

此の所謂「憲法運動」が、今日に至り遂に革命運動の形をとるに至るまでには、逐次に種々の段階を經て來た。即ち彼等が國民的要求として主張したところの印度人民の、

一、法律上の平等地位

一、法律を自ら執行する權利

一、外部的關係なしに法律を作るの權利

等、これ等の事項を英政府が容易に認めるときは、政府側との友好的了解が出來て、流血の革命は避け得るのであるが、併しこれ等の要求が、唯、國民の甚大なる努力と苦鬪とに依つて漸く實現されねばならぬとするならば、この憲法上の權利だけでは、革命もしくは國民獨立の運動は避け得ないであらう。此の間の事情は、米國の獨立史、又は佛國、愛蘭、ロシヤ、支那等の革命史に見ても明かである。印度に於ける憲法的運動——全印度國民會議も究極の目標としては、やはり革命の行程を追つて居るものであると云はねばならない。

一九〇五年までは、全印度國民會議は憲法的運動に專ら力を入れて、これにより印度政府及び英國人の好意に訴へてゐた。で、彼等は國政上の種々の改革を懇願した。——例へば、印度に於ける司法と行政の機能を劃然と分離することの如き、或は又、文官採用試驗は、從來のやうに英本國に於てのみならず、印度に於ても同樣に行つて、以て有爲の印度人に對して、英人と均等の機會を與へることとか、尙ほ又、印度人も均しく政府の高級官吏たり得ることとか、更

に又、法律の制定については印度人にも、相當の發言權を與へること、等々をひたすら求めた併し乍ら、歎願まさに二十年、何等の效果を得ざりしに於て、玆に始めて新しい思想の新しい極端派が出現した。それは印度インテリゲンチヤの間に於て、英帝國に對する一般的不滿が增大しつゝある際、偶々印度總督カーゾン卿は印度の高壓的統治を企劃し、例へば、ベンガル洲を、印度の猛烈な反對に拘らずこれを二洲に分割のことを强行せんとした。玆に於て洲民はインテリゲンチヤに率ひられて、一齊に立つて、一九〇五年、英本國に對し、分割反對を陳情した。英國政府は「總督の處置は既定事實」であると稱したが、根强い反對運動は效を奏して英國政府は此の「既定事實」を遂に變更するの餘儀なきに至つた。これは印度インテリゲンチヤの國民主義運動の最初の勝利であつて、卽ち、反抗壓力に依り、白人政府から其の意志に反して權益を獲保し得たものであつて、印度國民主義運動の新しい紀元が、此の時に始つたのである。

所謂「極端派」は、全印度國民會議の中に於けるインテリゲンチヤ指導者共に依つて引率せられ「自治と自助」を以てスローガンとして居る。而して彼等は、日本をしてロシヤを破らし

めた所の「アジアの自覺」に依つて刺戟せられ、又、かの微小の南阿ボアー共和國を、英國が屈服せしむるに當り、英軍の嘗めた四年に亙る苦戦は、同樣彼等を鼓舞せざるを得なかつた。

で、一九〇五年以來、この極端派は印度國民運動の鬪爭分子となつて、全印度國民會議の統制を獲得し、而して遂に其の方策を、彼等の目標通りに轉換させるに至つた次第である。

印度獨立運動の思想的指導者としては、二十世紀の始めに於て、かの印度國民歌の作者である故ビー・シ・チヤツタージエー（B. C. Chatterjee）故エス・クリチュナヴアルマ（S. Chrichnavarma）詩人アール・タゴール、故ビー・ジー・テイラック（B. G Tilak）、エー・ゴーシュ（A. Ghosh）エル・レイ（L. Rai）其の他がある。而してこれらの人々は、自由の信條を宣布するために大なる役割を演じた。詩人タゴールは一九〇四年「Swadesni Sama」を書いて「國家の内に一國家を建設する」の教理を宣傳した。而して此の效果は、ガンヂーが所謂「非協力運動」の包衣の下に爲した所よりも遙かに過激なる政治的觀念を普及せしめた。

青年インテリゲンチヤの國民主義は、年長穩和派の反對を受け、又、他方に於て英政府の迫害を蒙むる。併し、それにも拘らず、彼等は彈力ある地下的活動を繼續して、印度大衆に喰ひ

入ると云ふ絶えざる努力をなし、全印度に亙り、一大組織網を——勿論、場合には秘密結社的に構成するの働きを續けてゐた。

玆に於て、年長穩和派の指導者共も——全印度國民會議の創立者であるが——自分等の職能につき、餘程悟るに至り、彼等に於ても、青年インテリゲンチヤ一派の進歩的見解及び勇敢なる活動に應じて、一つの新綱領を立てゝ前進するにあらざれば、彼等はやがて國民的政治運動に於ける足場を失ふであらうと感ずるやうになつた。一九〇六年、カルカツタの全印度國民會議に於て、故デイー・ナオロジ（D. Naoroji）は議長となり、印度國民の要望に添ふ提議なりとして、年長穩和派と、青年派との間に入つて、印度獨立と云ふ目標のため、二者の融合を試みて述べた——

「凡ては一言を以て盡し得る。曰く、植民地にあらざる「自治政府の要求」である。此の政治組織が、我々の唯一の救濟であつて、此の自治政治の中に、我々の希望も力も、又我々の偉大も横たはつてゐる。結合せよ、而して堪へよ。——然らば幾百萬の民衆は、貧と飢えと疫病の死地から救はれ、更に又、幾千萬は物資窮乏と飢餓の壓迫から免れ得るであらう。而して我

が印度は、やがて昔時の誇かな地位を、歐亞諸大國の間に再現し得るであらう」

これが全印度國民會議に於ける「自治政府」運動の初めであつて、會議は極端派の强要に依り、次の綱目に關する要求決議を採つた。

一、自治政府

一、家内及び内地生産業の保護

一、英國家に對するボイコット

一、國民教育の促進

而して右四綱目は、後日ガンヂーが創めた非協力運動の基本となつたので、ガンヂーの此の運動に對し、印度國民主義者は其の地盤を提供した譯であつて、ガンヂーの教義は、國民主義に肥やされた土壤に、非常な速力を以て增殖するに至つたのである。

一九〇八年、シュラート・(Surat) の全印度會議に於いて、印度獨立主張者連は、會議の全組織を自己の掌中に收めんと試みた。しかし、故ゴカール (Hon. Gokale) 故エス・バーナージェー、故アール・ビー・ゴーシュ等の指導の下に、穩和派は、極端派に抗爭し、そして遂に

穩和派の所謂「機械的改革」は勝を制して、其の結果、極端派は憲法的運動の綱領に從ふか、しからざれば、全印度國民會議を去るかの一つを選ばねばならぬ破目に立ち至つた。

極端派と穩和派との政策の基本的相違は、前者は苟も印度愛國者たる以上は、總ゆる可能の手段を以て、獨立の爲現實に働くべきを主張し、これに對して後者は、其の活動の憲法的運動の範圍に制限し、而して自治政府に於ける過半數の票決權の獲得に依り、結局、所謂「自治領制」の出現を目的とするにある。

一九〇九年、英政府をして所謂「モーレー・ミントー改革」を容認せしめたのは、印度絶對獨立をかざして立つた極端派の革命主義的活動の結果であつて、此の改革に依り、印度の立法部は餘程改造せられ、而して其の權限も、擴大せられた。併し乍ら此の改革は元來、英國側に於ては、これに依り穩和派を懷柔して、以て極端派に當らんとするの動機に出たものに過ぎずして、決して、印度國民派の主張する責任議會政府の設立に至らしむる一段階としての改革案でないが故に、例へば、會議に於ける議員の動議提出權とか、質問權等を認め、而して勿論これらの權利は印度側に依り極力利用せられたが、結局會議に於ける論議は凡て總督が掉つてし

まへることになつて居る。それ故立法部に對する執行部の制御は依然として存續して居る譯である。

で、この理由に依つて、この改革は穏和派にとつて何等實質的獲得とはならなかつた。そこで彼等の多數は、これに不滿足として却つて極端派に近づくに至つた。

印度獨立を唱導する國民主義運動は、其の活動を國際的規模の上に始め出した。

而して、その支部をロンドン、パリ、東京及び米國の主要都市に置き、そして一方、國民主義者の印度に於ける活動は、恰度帝政ロシヤ時代に於ける革命主義者の行動と類似の行動をたどり、從つて又、同樣の待遇を英政府側から受けてゐる。

一九〇七年「新時代」の主筆が、騷擾の廉で訴追せられたとき、青年國民主義者ビー・ダット (B. Dut) は法廷に於て言明して——「吾々は完全なる印度の獨立を主張するものなるが故に、英米系白人の政府に依つて維持せらるゝ司法法廷を認め得ない。從つて、斯の如きものは、吾人等黨員を審理するの權能がない……」と抗爭した。

かの非暴力、非協力運動が、ガンヂーに依つて起されて以來、約十五年であるが、此の間、

此の教理は多少修正せられた形で矢張り使用せられ、非暴力、非協力運動者連は、英法廷に於て、此の教理により審理を拒否した。併し乍らビー・ダット一派の態度は、ガンヂー派に比し遙かに革命主義的であつて、ガンヂー等は英政府の法律を侵犯するは有罪としてゐるが、此れ等一派の國民主義者達は、白人政府の作つた不正の法律に抵觸するも、それは何等犯罪責任は無しと主張するのである。

やはり其の前後、ベンガルの國民主義者達の尖鋭的一派が謀叛及び爆彈事件のため訴追されたとき、ビー・ケー・ゴーズは其の代表者として、法廷に於て——「自分等は何等謀叛人ではない。只憎むべき外人の羈絆から自分等の國を解放せんが爲に、其の手段として壓迫者に對して公然の戰爭を開始せんと試みたに過ぎない」と公言した。

で、この樣にして、印度は一九〇七年以來國民運動として一つの重大なる段階に入つた。即ち其の大膽なる思想に於て、はた又、現實的には權利獲得の實行に於て、凡ての可能なる手段に依つて、國民解放のための革命を目ざす道程に上つた。

獨立運動のこの進展に就き、インドのインテリゲンチヤの功績は、最も目醒ましいものであ

つて、彼等は、理想主義者として、其の國民的待望を實現するためには、生命を投げ出して其の事業を遂行することを恐れない。開拓者としての彼等には、成し置くべき困難な仕事が澤山あつた。彼等は印度に於て、はた又、國外に於て、萬難を排しつゝ、自由のための選手として有效に働いた。

非協力運動に對し其の素地を作つたのは、彼等インテリゲンチヤの活動であり、また彼等の活動を制し、而して印度穩和派を喜ばす爲に、英政府が止むを得ず所謂「モンタグ・ケルムスフォード改革」卽ち一九一九年の印度政府條令を出すに至つたのも、彼等の働きである。歐洲大戰爭中、印度穩和派は英政府の側に加はつたが、獨立主張の青年派は印度兵及び印度大衆の間に入つて反英運動を宣傳した。これ等過激論者の本據はベンガル及びパンジヤブであるが、英政府は「印度防衞條令」――換言すれば、英國領防衞條令を適用して、數千の尖鋭分子を單に反英運動宣傳の廉で逮捕し、而してそのうち數百を死刑に處した。

因みにこれ等獨立一派は、現在、獨逸、土國其の他の國と非公式の外交關係を設定して、印度に於ける英政府轉覆のため外部より應援を求めてゐる。

ガンヂーは、後には、「印度に於ける惡魔的政府」に對する反抗者となつたが、其の間に於ては――例へば前大戰中の如き、極力英政府を支持して、英國のため義勇奉公する印度人兵の募集に從事した。此の功に依り英政府は彼に賞牌を與へたほどである。尤もガンヂーを公平に批判するならば、彼は其の性格上、穩和的意見の人で、彼に依れば印度人は「英帝國內の自治領」の程度で滿足するものと考へてゐるので、彼が大戰中、英國に盡したのも矢張りこの確信から來て居るのである。で、彼は現在は世界的に有名な非暴力主義の權威者であるが、戰爭中は、彼は人種自由のための戰ひだとて、壓迫政府のために、印度人に嘗て何等の危害も加へたことのない獨逸に反抗して、印度人を導いて鬪はしめたのであつて、これは正しく此の上もない暴力の唱導であつたが、但しこの場合、正直に云ふならば、ガンヂーの行動は機會主義に動かされたので、恐らく彼は英國を彼の大危機に於て援へば、英國は印度の國民に對し「責任政府」設立の特權を許すであらうと信じてゐたらしい。ガンヂー及び其の一派は、英國政治家が印度に於ける民族自決を約した言明に一杯喰はされたので、英人は約束しても實行しなかつたのである。チエツコ・スロバキア共和國の父、マサリツク博士の洞察力と悧敏しさが當時のガンヂ

ーに無かつたので、前大戰中、印度穩和派に依り、チェツコ援助にまで延ばされた對英奉仕は英當局を非常に喜ばせて、其の報償として、英政府は印度の獨立を唱導した極端派の一部を、何の容赦もなく一と束にして拘禁し、其の内かなりの數を絞殺し、殘りはアンダマン島に放逐した

印度人は勿論のこと、世界一般も、大戰に於ける印度の貢献が、如何に聯合國の勝利に大なる要素を與へたかを、今日は充分認めるであらう。確かな筋の測定に依れば、戰時中印度人の戰役應募者が約百十萬で（其の内ネパーだけで約六十萬近く）而してこれらのうち、戰鬪員が七十萬近くで、他の四十萬餘は種々の軍役に從事した。

で、斯して印度諸軍兵は、大戰の舞臺で活躍した。又一九一四年には、英國立法部の協贊を得て、英領印度に於ける英國軍隊は大戰從軍の爲め凡て引揚げられた。そして印度政府は引揚げた軍隊の經常費用に相當する額を英國に出金した。尙ほ一九一八年には、更に一億磅（後に一千三百五十萬磅）を献納した。英帝國に、將に晩鐘が鳴らんとする此の危機に際して、印度が示した同情と好意を、英國はよもや忘れ得ないであらう。

なほ又、印度は南アフリカ及び諸所の對獨戰爭に武器と軍事品を供給した。又、印度兵は佛

國に於て戰ひ、獨軍のパリ進擊を阻止せしめた。これに關し「印度兵隊」の中に興味ある觀察が出てゐる。

「我々は（一九一四年）八月の遠征隊を出發せしめた。當分の間は充分補充の出來る豫備隊も引卒した。而して我々は一案を立て、次年度に於て多數の增援兵を我々に供給し得るやうにして置いた。併し乍ら、相次ぐ數ケ月に於て訓練兵の要求があり、我々のあの企案では、とてもそれに應じ得ない。增援の要求はひつきりなしに來る。而して全般の戰局上より見て、差し當り其の要求に應じ得るのは印度だと云ふことになつた……。一九一四年十一月、聯合國の危機が到來した。獨軍の長驅は英佛海峽の海港に迫つた。聯合軍は援兵を渴望した。此の時印度軍隊は佛の戰線に現れた。聯合軍は斯して漸く獨軍を擊退し得た……」

佛國戰線に於ける印度軍隊の貢献に就て、英人中には輕く評價する者があるが、一九一四年七月十四日、七萬の印度兵が佛國に送られ、一九一五年末までに、印度駐在八萬の印度士卒の外に、二十一萬の印度士卒が送られた。

戰後、英當局の計算に依れば、戰時中、印度が海外に送つた人員總計一、二一五、三三八で

あつて、内、印度の損害一〇一、四三八で、其の内、佛國に於ける戰死が六、九〇〇、行方不明が一、一三〇、又捕虜が五三八と云はれてゐる――

「印度軍隊は最上の堅實と勇敢を以て、軍の要求によく適應して戰つた。……而して彼等自らの希望に依り、彼等は塹壕戰に於て活躍したので、彼等は最も有用で且つ貴重なる任務を遂行したのである」

又、大戰中、印度の財政的貢獻は、現金三億五百萬磅と計算されてゐる。而して此の内には印度政府の貢獻及び印度諸王族間に印度農民からの醵金を含んでゐる。で兎に角、印度の人民に對する割當率は、飢えた印度人に取つては何んな豪奢な御馳走にも價ひしたのである。尚また、其の外に印度政府が英國政府のために負擔した多額の費用がある。卽ち當時印度政府は、多くの軍事事務及び小麥、麻織維、皮革、其の他の軍需品の莫大量の輸出を、自分の財布で處辨したので、これが爲め、一九一八年三月の休戰までに於て、印度が英國皇帝政府に對し、戰時奉仕として費したる額は、約一億二千八百萬磅と云はれて居る。

此の世界大戰の歷史を見て、一つの國民が他の國民に對して幾十億弗の貢を醵出したと云ふ

例が他にあるか。英帝國のそん所そこらの「自治領」等と雖も、斯の如き氣前を見せなかつた筈だ。

若しも、印度國民が大戰中、英國の支配に反抗して、英國の爲に戰死したりすることを拒み而して其の代り、對英叛亂を計つたならば、英國は百萬以上の兵員を印度から海外に出す代りに大軍隊を印度に派遣せねばならなかつたであらう。而して印度に於ける多少の爭亂でも、英國が屈逸を屈服せしめる機會を得る前に、直ちに和議に入るを餘議なくせしめたであらう。

此の理由に依り、大戰終了後、英國當局は時を移さず、印度國民に對して嘉納と謝恩を表示して呉れた。それは「休戰虐殺」の祝賀壇に於て、五百の武裝なき印度人を射殺し、而して十五人を負傷せしめたことで、これが卽ち「印度獨立運動の血の日曜日」であつて、其の上なほ、ローラット條令と云ふものを制定して、印度人は何人に限らず審理を得ずして投獄し得る、と云ふことにした。

英政府のこれ等の處置に依つて、ガンヂー等の一派も、英國政治家――戰後、印度に「自治」を認めると確保した――に對し、其の不正直さに漸く目を覺ますに至つた。遲くても無きにま

さる。

然るに更に又、ジヤリアンワラ・バツグ（Jalianwalla. Bag）に於て印度人の男女及び子供等を機關銃で一と束の虐殺を命じだダイヤー將軍が、英政府に依り其の行爲を至當と認められて責任を解除せられ、而して印度に在る英人社會は、此の卑怯な野獸的行爲を非難するどころか、却つて數千磅を醵金して、賞讃の記念として彼に贈呈した。

此の事件は、ガンヂーを激せしめ、而して彼の頑强な主張に依つて、一九一九年、全印度國民會議がカルカツタに特別に開かれ、故ララ・ラジュパツト・レイ（Lala. Lajpat Rai）は議長となり、英政府に對する非暴力、非協力運動の綱領を採擇し、ガンヂーの唱導に依り、右の四綱目を定めた。

一、立法部に於ける凡ての名譽的地位、稱號、資格を忌避すること。
一、政府の下に於ける凡ての報償的地位を拋棄すること。
一、警察及び軍事關係凡ての任官を拒むこと。
一、政府に對して納稅を拒むこと。

ガンヂーは、印度の自由はヒンヅー族とモスレム族との結合にあることを認識し、而してこれが達成のため、印度に於ける回教徒問題に就き支持を與へ、又土耳古の案件に對しては、聯合國は正義を以て處さなければならないことを唱導した。回教徒關係に就き、ヒンヅー族に援助を與へたことは、ヒンヅー、モスレム二者の融合を大いに進めた。斯して非協力運動は印度大衆を把握し、一九二一年に於ては政府の行政を殆んど痳痺せしむるに至つたが、これが爲に幾多の黨員は投獄せられ、ラジコ・バツト・レイ、シー・アール・ダム等の最主要の指導者も其の内に含まれて居る。

非暴力、非協力運動は、印度政府の彈壓方策に依り、却つて黨員の一部を驅つて、一種の暴力的活動に進展せしめた。ガンヂーは凡ての暴力行爲に反對して、非協力行動に向はしめんと努めた。併し非協力運動は、一時はその本來の職能を飛び越えて——例へば、全印度國民會議が、故シー・アール・ダムの司會の下に、一九二二年ガヤに開催の際の如き、會議は決議をなして、各地に於ける州立議會を國民主義に依り占領して、政治妨害を實行せんとの所謂「ダルネライト政策」の遂行を定めた。

依つて國民主義者達は直ちに許多の州立法部を占領し、而して立法議會に最大多數の印度代表を出席せしむるに成功したが、併し英政府の國民主義者に對する迫害は、此の種の非暴力、非協力運動に決して劣らぬ恐ろしい險惡な方法を以て勵行せられた。が兎に角、國民主義者は其の妙策に依り、所謂「印度議會」なるものは、一つの兒戯に過ぎずして、現實の立法に就ては何等の勢力なきこと、恰も露國帝政下に於ける露國議會と同樣なることを、印度國民及び廣く世界に立證したのである。

多くの印度人及び諸國の自由主義者は、英國第一次勞働內閣は、印度の自治問題につき、印度を支持することであらうと思つてゐた。

併し乍ら此の勞働內閣はラムセイ・マクドナルド總理の下に於て、一九二四年十月二十五日のベンガルに關する法律」を成立せしめた。而して此の法律は、今日ベンガルに於て施行せられてゐる。所謂「無法の法律」として知られてゐるのが之であつて、當時其の實施と共に數百の印度志士が投獄された。其の規定する處は、現代の法律としては仲々興味があらうから內容を述べよう。

一、先づ印度人に對しては令狀なくして、逮捕及び家宅搜査をなすことを得るし、

一、而してこれ等の被疑者を、印度解放運動關係者として審理することが出來、

一、又、この法律の下に任命せられた委員は、被告人を審理のために引致することなしに犯罪者なりと認定することも出來、

一、而して何人の書いた如何なる陳述でも、法廷に於て人證又は對質することなしに、法律犯罪有效なる證據として採用することが出來る。

一、其の外、苟くも嫌疑者は、一ケ月の間は何等の理由なくして拘禁することを得るし、

一、又、審理は法廷を公開せずしてなし得るので、

一、被告人が其の防衛のため、辯護士を依賴する權利も拒否されてゐる。

以上、これを以て有名なるラムセイ・マクドナルド氏の下に於ける英國內閣により披露せられた「自由の爲の英國の正義と愛」の水準線の低き程度が判るであらう。で、これ等の法律に依り、英國當局が印度總督アール・リーディング（Earl. Reading）をして、鋭意彈壓方策を遂行せしめつゝある間に於て、印度立法會議に於ける國民主義者は、一九二三—二六年に於

て、壓倒的多數を以て――「印度に對する國民憲法を起草するために、英國と印度の兩代表に依り所謂「圓卓會議」を開くべきことを要求する」の決議を二回まで通過せしめた。

而して右討論中、若干の過激分子は公言して、「英國議會は印度國民に「書取り」をさせる權限はない。吾人は憲法的鬪爭に依つて、斷然たる改革を期待する……」とて、アヂ的氣勢を高調した。

然るに一方、印度穩和派に於ては、アンニー・ベザント博士（Dr. Annie Besant）指導の下に、一つの案――卽ち英國議會への參考までとして、印度に於ける改革の第二の段階たる印度自治領を實現せしむる趣旨の所謂「印度國家法案」を作り上げた。

印度穩和派の此の要求は、英國の保守、自由及び勞働の各黨をして、印度國民主義運動の深さを現實に認識せしめた。で、玆に於て彼等は、――「若し印度國民が其の要求に相當すると云ふの確證を擧げるならば、英當局に於ても何か適當な改革を考慮するの意向は充分あり」との「素振り政策」を以て、この改革要求にあたらうと決心した。斯して、英國の保守、自由勞働の各黨は、此の奸計に一致して、結局、圓卓會議の要求は當時其まゝ握りつぶした。

然る處、一九二六年、アーウイン卿（Lord Irwin）は印度總督に就任し、翌年十二月に至り先きに出したモンターグ・ケルムスフオード改革法（卽ち、一九一九年印度政府條令）に依る十年の試政期中に於ける印度の政情を調査し、之に對するに更に改革案作成のため、英國保守黨內閣は兩院の協贊を得て、保守黨三名、勞働黨二名、自由黨一名より成り、檢事總長サージョン・サイモン（Sirjon Simon）を委員長とする委員會を設けた。此の委員長は、印度政府條令の規定に依り、其の職能は次の通りである。

印度の政府側に關する其の後の成績の調査、敎育の增進、代表制度の進捗如何、其の他印度に關する現在事情の調査をなすこと。

而して委員會は、印度に責任政府を設立すると云ふの基本策が果して必要なりや否や、又、其の範圍は如何にすべきや、なほ又、現在印度に於ける責任制の擴張、改修、又は制限に關する事項、而して其の內には、地方立法部に於ける參事會の設立が必要なりや否や、等に關して報告することになつてゐる。其の他委員會は、印度に關する事項にして英國皇帝から適宜指示せらるゝ所につき調査報告するのである。

然るに、此のサイモン委員會は凡て英人委員から成り、印度人を除外してゐると云ふ報道が印度に達するや、苟くも自尊心ある印度人は黨派關係の如何を問はず極度に激昂した。印度の穏和派でさへ、例へばサー・ティ・ビー・サプル (Sir T. B. Sapru) 其の他の者も此の委員會の構成は、印度國民に對する研究的の侮辱に外ならずとして、委員にボイコットすべしと言明した。又國民主義は、此の委員會に對しては、恰もエヂプトに於けるミルナー委員會を、故ザグール・パシヤ (Zaglul Pasha) がボイコットしたと同一方法に依りボイコットすることを決した。

穏和的意見を有する若干の印度人は、サイモン委員會に多少協力する樣子を示したが、ボイコット派のアヂテーションは餘程效を奏し、サイモン氏が一九二八年二月八日附印度總督宛書翰を以て、印度立法議會及び州會をして委員會に或る範圍の條件にて協力すべき委員を任命すべき旨申出た。英國側が斯く急に多少讓步的に出たのは、一九二七年十二月中、マドラスに於て、全印度國民會議、全印度穏和派自由聯盟、全印度モスレム同盟、及び其の種々の團體が、該委員會に斷然ボイコットすべしとの强硬態度を採擇したからである。

然るに、一方、印度立法會議は壓倒的多數を以て、協力委員の任命を拒絶した。玆に於て、總督は止むなく之に代る委員を適宜任命した次第である。

サイモン委員會は、一九三〇年に至つて漸く其の報告を作成したが、其の勸奬の內容は反動的のものであつた。

即ち、其の報告の一部は六月十日に發表されたが、それは單に調査事項が記載されてゐるのみで、印度の將來に就ては少しも觸れてゐない。第二回の發表は六月二十四日であつたが、印度人民が特別に權利として與へられる點は何物もなかつた。强ひて求むれば、次の如き點——即ち印度立法會議は名稱を聯邦會議と變へて存續すること、地方立法議會の執行委員は二パーセントを一〇パーセントにすること、州參事會員を印度人に限り、英人を加へぬことにすることであらう。斯して特に選ばれたるサイモン氏以下六名の事務練達の能吏が、巨額の國費と、三年間の勞力 (?) を費した十二篇の此のサイモン報告書は、印度に對する無誠意の外何物もなかつた。

一九二七年十二月、マドラスの第四十二回印度國民會議は、色々の意味に於て印度獨立運動

の一轉期と見ることが出來る。卽ち、この會議では、青年派は、殊にテイ・エル・ネール（T. L. Nehru）氏指導の下に、更に進步的で且つ過激なる運動を建議し、而してガンヂー氏の暗々裡の反對にも拘らず、新綱領として、――「印度國民の目標は完全なる國民的獨立にあることを宣言」した。尙ほ、この會議に於てアンサー博士は演說して、――「印度國民は今や印度問題を國際的見地に於て思考せねばならぬやうになつた。而してこれが爲には、アジア諸國民との文化的關係を增進し、以て其の友好的聯絡を强大にせねばならぬ」と述べた。

此のマドラス會議に於ける決議には、印度國民會議派の態度を明瞭に示すものがあると思ふから。左に萃錄しよう。

「此の會議は、一九二七年二月ブルゼルに開催の反帝國主義會議に於ける、帝國主義反對聯盟の形成を歡迎する。而して其の帝國主義對抗運動の組織と、全印度會議は步調を合せて進むべしとする同會議の決定を採納する。又、此の會議は、支那に於ける凡ての印度軍隊及び警官隊は、直ちに召還し、而して苟くも印度人は、將來英政府の使用人として、支那國民――それは、本會議の意見に依れば、帝國主義反對鬪爭に於て印度國民の僚友である――に對し戰鬪を

なし、又は反抗するがために支那に行くことを禁止する。

更に又、會議は、印度の國民は勝邦諸國人と爭議せず、專ら彼等と平和的の交通をなし、而して彼等勝邦國民が、彼等の戰爭に關與するか否かは、彼等自身が自由に決定すべきものなる原則を尊重する。

尙ほ又、會議は、印度國境に於ける軍備を終止せしむること、及び英國政府が其の帝國主義を擴大するために何等か對外軍事的侵略又は印度を搾取するの行動を企圖する場合には、印度國民は斯の如き軍事行動に關與したり、又、如何なる方法に於てもこれ等の企圖に協力することを拒絕するは、印度國民の本務であることを宣言する」

これ等の決議は、要するに印度獨立問題を進捗さすために、全印度國民會議は一つの世界政策に進まんとしつつあることを示すものである。

尙ほ、此の會議に於て、印度の憲法を起草するために、印度全土のあらゆる政治的團體の協力を勸奬する旨の決議を採用した。で、此の決議に基づき、印度の凡ての政治團體の有力人民から成り、パンデイト・モテイ・ラル・ネール（Pundit Moti Lal Nehru）を議長とする起草

準備委員會が設けられた。而して其の後、此の準備委員會は「全黨派會議」を設立し、而して一九二八年後半に於て、全黨派會議の報告――卽ち、所謂「ネール報告」を公にするに至つた。

で、此の報告に依れば、將來印度政府の形式に關しては、各方面の一致及び協力を得るため差し當り、現在カナダ其の他、英帝國領內の諸自治領に於けるが如き、――國家立法部に責任を負ふ內閣が、同時に執行機關として現在印度政府の採つて居る各地方團體代表制を排斥し、從つて印度モスレムに對する選擧區分離制も廢すべしと主張した。これは國民主義と敎團主義は對立せずとの原則に基づいてゐるのである。

次に此の報告は、印度聯邦制憲法を提議した。而して印度諸王族が英本國政府と直接交涉する權利に反對して、これ等王族も――其の邦內保全のため正規の警備權は認めるが――均しく印度聯邦の一員として之に加入することを提議してゐる。

で、ネール報告は、全般として見れば、結局、印度穩和派の見解――卽ち、印度は自治領として英帝國內に存續しようとの說を具象化したものに外ならぬ。この次第により、印度國民主

義者中の長老派、例へばガンヂーとか、ビーエム・ラル・ネール、其の他の如きは「自治領制」を目標として、此の程度に於て英國政府との商議を計つた。

併し乍ら、青年派、例へば、サバース・チヤンドラ・ボース (Subhas Chandra Bose)――ベンガル地方會議の議長――の如き尖銳指導者等は決して之に滿足しない。彼は一九二八年三月プーナに於ける第六回地方會議に於ける演說に於て、表明して曰く――

「吾人としては、元より「獨立印度聯邦國」に加擔する。何となれば、これが吾人の前に立つ唯一の目標である。吾人は、印度が嘗て其の繁榮時代然りしが如く、印度自身の運命を左右する者は印度であらんことを慾する。斯して其の國民の天賦に添ふて、國家を發達せしめ得るからである。而して吾人は印度が完全に桎梏を解かれたる獨立を得んことを欲する。斯して印度は世界の獨立國民の間に立つて、頭を上げ進み得るのである。吾人は完全なる自由の享有を欲する。此の享有に依り、我が國民は自身のため、はた又世界のため、大なる業を創め得るのである。又吾人は我が國家自身の國旗を、我が國家自身の海軍を、我が國家自身の軍隊を、我が國家自身の外交使節を要求する」

一九二八年十二月、カルカッタ全印度國民會議に於て、ガンヂー・ネール、其の他は、若し自治領制が一年以内に於て印度に認めらるゝならば、國民は之を採納するが可なりと提議した。併し青年派は之に反對し、殊にボース氏は此處でも又述べた——

「印度の青年は、印度を解放するの任務を既に引受けた。吾々は、固より年長指導者諸君を尊重し、而して之を愛する。併しながら、彼等が「極端派中に於ける穏和派」と誹謗されてゐる我々とも協調して來ないならば、青年派と年長派との分裂は到底避け得られない。青年派の運動のお蔭で、青年印度の上に新しい自覺が黎明してゐる。彼等青年は、いつ迄も手を拱いて長老連のかれこれの政策に追從しない。彼等は將來印度の後繼者であり、且つ印度の解放は唯彼等の肩にかゝつて居ることを意識して居る。

印度青年派の躍進的なることは右の通りであるが、これに就ては、一米國學者の「印度青年運動」に關する叙述を見れば、更に明かである。曰く——

「大戰後世界一般に於けると同じく、印度に於ても、非常に強く、且つ恐らく革命的とも云ふべき青年運動が起つた。此の運動は、偶々印度に於けるモスレムとヒンヅーの不和を融合せ

んとの企圖から誘導された。即ち、印度に於ける宗教に起因する政治的分裂を清算するために彼等の努力は先づ向けられたのであつて、彼等の指導者共は唱導した——「年長時代者が老ひ逝きて、殊に宗教とか教會とかの觀念が凋落して來れば、二族間の敵意心の如きは、其の馬鹿々々しさに自體存續の餘地を失つて影を潜め、而して全部印度國民は、宗教的精進の上位に福祉と云ふものを第一問題として置くであらう。斯して遂に宗教精進の如きは然る可く大抵にあしらはれて、昔時の地獄の底に掃き流される時が來るであらう……」と云ふのである。

兎に角、印度に於ける青年運動は、疑ひもなく特例的の強さと確信を有して居るのであつて自分のこの豫言の正確さは、追つて「時」が證明するのであらう。

一九二九年、カルカッタ全印度國民會議に於ては、ボース氏一派の提起した獨立主張の決議案は破れて、ガンヂー其の他の指導者が勝を制した。但し此の會議に於て、獨立主張派の一指導者サチヤマルテイー (Satyamurti) 氏は、一決議案を提出して——「アジアの全諸國及び其の他の國の代表者を設けて、貿易、文化及び政治的關係の促進を計るべきこと」を會議に要求した。而してこの機關は差し當り、テーラン、カバル、君府、モスコウ、南京、東京、紐育、

伯林、巴里及び倫敦に駐在せしむべしとした。

一九二二年以來、既に全印度國民會議は、故シー・アール・ダス（C. R. Das）氏指導の下に、國民會議運動に隨伴する國民義勇兵の案を作つてゐた。而して一九二八年には、國民會議義勇兵の運動は「將來印度國民兵の基礎」とせらるゝに至つた。

スリペンドラ・カンドラ・バーネルジェー教授は、一九二八年十二月、カルカッタの第五回義勇兵會議に於ける演說にて、印度獨立運動と半義勇兵運動との關係を明かにした。卽ち、彼は曰く——

「印度は現在に於て、「羽翼の完備した國民獨立」と云ふものを求めて、其の出征の首途にある……。「自治領制」と云ふのは、帝國主義の圈內に於ける內部的行政である。併し「獨立」は英國の統制と主權の外に立つて、印度の國民的幸福と保安とを約束する所の凡ての方面に於ける自己統治である……」吾人は後者を採る。

全黨派會議及び國民會議に依り吾人に與へられた委任は、全印度國民會議に從屬し而して其の統制を受ける所の永續的全印度國民義勇隊に依つて執行せられねばならぬ。此の部隊の各員

は、將校でも私人でも凡て全印度國民會議派に忠誠を宣誓し、而して會議の信條と理想を體得して、會議が機宜に應じ採る所の企劃の作業に突進せねばならぬ。

義勇隊の組織は、州聯盟制とし、而して各州に比較的大なる活動餘地を認めるのである。又此の部隊は、彈藥と武器とを以て武裝して居ないが、一つの戰鬪組織である。自分は自分の心に聞いて、此の組織が果して其の思想及び動作に於て、絕對に非暴力であるか否か——と云ふことは全くの所、確言出來ない。唯だ自分が近い將來を見通した所では、此の部隊は其の行動に於ても、正面して前進する用意がある。而して敵を殺すことは欲しないだらうが自ら死するの覺悟は充分持つてゐる」

因みに、此の印度國民義勇隊は英官憲及び英軍隊の慘虐なる處置に屢々抵抗して、自らの價値を隨分表示してゐる。

有識階級の英人官吏や在印度人は、印度國民は其の自由の鬪爭に於て眞面目であることを認めてゐる。嘗て印度の官吏をしてゐた一英人曰く——

「今日の國民主義運動は……有識階級と明かに云ふことの出來る印度六百萬人の人を把握

してゐる。で、この階級に屬する者は、凡て尖鋭なる國民主義者であらう。從つて彼等と意見を異にする有識階級者は非常なる少數であつて、印度基督教徒の諸團體も、嘗ては「自治」を恐れたかも知れないが、今は明かに民衆的となつた此の運動に流れ込んでしまつた」

それ故、既に一九二八年に於て英當局に於ても、――印度國民主義運動は約二十年前までは少數派の運動であつたが、今日の國民的の一般的運動に進展した。と認むるに至つたのは當然のことである。

又、或英當局者は印度國民運動を次の樣に云ひ表してゐる――

「直截的ではないが、その眞をより能く傳へる表現法を以てするならば、印度の現在の狀況は有識印度人の間に於て、東洋の尊敬すべき理想と西歐の文明との間に於ける衝突の觀念增大の產物に外ならぬ。卽ち、白人の政治的及び經濟的統御に對する深刻化せる嫌厭の爆發であつて……勿論實際に於ては「自治」主張者及び其の支持者は……現存の比較的安定で有效なる政治上及び行政上の組織を唯だ漸進的に改善せんことを待望してゐるが、……併し乍ら、其の實體的基礎――卽ち、英國の權力と統制が取除かれる、と云ふことに就ては、其の人情自

然の利害觀、當然の歸結として、外國の統御を出來る限り早き日に於て排除する、と云ふことは、固より主要にして且つ差し迫つた要望でなければならない。而してこの準備的ではあるが併も最も有效なる手段、卽ち「自治」に依つて、地盤が淨められた上は、取敢ず釋放された印度は、爾後、適時に世界人類六分の一の爲めの將來の政策を組み立てることが出來ようと云ふのである」

されば「印度國民三億五千萬の內、宗教、國語の相違はあるが、これを縱貫してゐる「印度國民主義」と云ふものは、英領印度政府及英帝國が等閑に附し得ない所のものであつて「地理的區劃とか、統計上、人類、宗教、階級、言語などの混雜を理由として、印度國民主義運動なるもの〻重要さを輕減することは、大怪我の元である」に相違ない。

印度國民運動の背後には、アジアの凡ての國に於て顯著なる民族平等の要求がある。卽ち、「我々が何等躊躇なく云ひ得ることは、現代印度の有識階級に於ても最も廣く浸潤してゐる政治的感情は――其の表現方法及び程度の多種多樣なるに拘らず、――西歐との均等を要求する事と、これから何等かの差別待遇の疑惑に對する憤りの表明である。而して印度國民が、此の

問題に對して取る態度は、印度國民的自尊心の要求に基づくものであつて、決して其の場〳〵の私的感情に依るのではない。現在の狀態の正確なる認識と云ふことが東洋の要求である。

アジアの國民に此の平等要求の起つたのは、日本がロシアを破つた時に始つて居るのであつて日本のこの勝利は、東洋諸國に汎く亘つて大なる感動を與へた。而して印度に於ては、時あたかも有識階級一派が、其の國政につき過半的分け前を印度人の爲に要求してゐた際であつて從つて、其の感動は更に強いものであつた。しかのみならず、更に又、爾後二十年間の世界に於ける幾多の出來事は、印度の國民主義運動に非常なる加速度を與へた。——大戰中說かれた民族自決の原則、幾多の國に於ける國民主義運動の成功、尙また、土國の西歐諸國に對する反抗等々であつて、これ等は凡て印度に强く效果した。

で、官吏の要職にある經驗ある人士は、英政府の御利益を承認してゐる爲に、完全なる獨立政府と云ふ方式に依る理想の實現を困難なりと意識し乍らも、尙ほ又、穩和派は、極端派に對し——公然とは非難しないが、密かに怪げな眼を向け乍らも、これ等凡ては一樣に、西歐人との對等地位の要求に合致し、而して確信を以て、民族自決を印度の爲に宣揚してゐる」

一九二八年に於て、既に、將來の見える英國の或る政治家及び政論家には、印度の政治的情態が、恰も愛蘭が自國自由の承認を得る前に於けると同樣の狀態に推移しつゝあることが明かであつた。サー・チヤールス・ロスアトストンや其の他の人は、英國政府は、速かに英國民に對して完全なる「自治領制」を致さしむる所の待遇を與ふべきである、と提議した。

然るに之と同時に、印度國民主義者は英政府に對して警告して——印度國民は其の自らの權利に依り其の國防、對外政策及び內政事務に關し、完全なる統御を爲すの權能を認めらるゝにあらざれば、決して滿足するものではないことを宣言した。で、彼等國民主義者の考へでは——英國は追つて「自治領制」は承認するだらうが、其の時はもう遲しで、印度は、國民的獨立より以下のことで納得しないだらうと云ふのである。

其の後に續く印度國民主義運動は、右の警告に對して英帝國主義者が注意を拂つたことに依つて、進展して來たのであつて、ガンヂー一派の如き穩和派の國民主義者も、遂に一九二九年十二月ラホールに於ける全印度國民會議を一轉期として、印度獨立の急先鋒とならざるを得なくなつた。

ガンヂー等は其の前年、十二月カルカツタ會議には、青年國民主義派に反對して、唯だ「自治領制」を目標とすべきことを支持したが、ラホール會議では、ガンヂー自ら「英帝國を離れたる印度の絶對的獨立」を主張する決議を提起した。で、彼が此處に至つたのは、英國政府は所謂「自治領制」をも急に許すの意志なきを見通したのみならず、恐らく彼として其の從前のまゝのプログラムでは、新鋭多數派たる少壯組は彼の指導を受け入れないに至らうからである。

然るに一九三九年第二次歐洲戰爭勃發し、印度總督もまた對獨宣戰を布告するに及んで國民會議派内閣は一齊に辭職するに至つた。其直接の原因は印度總督が印度人の關僚に何等諮る事なしに印度を交戰國たらしめた事にあるが、間接且つ根本の原因は新憲法に對する不滿から發してゐる事が明かである。

斯かる情勢に狼狽した印度總督リンリスゴウは早速ガンヂー其他領袖と會見し、印度の立場を明かにせんとしたが、此會談の後ガンヂーは次の如く聲明した。

「英國政府が其戰爭目的を明かにし、且つ將來に於ける印度の地位に關し確約を與へなければ

余は最早如何なる解決案をも示唆する事を欲しない」

卽ち英國の參戰目的が小國の獨立權保護及びデモクラシーの勝利確保にありとすれば、それは先づ印度に適用せられねばならぬといふのがガンヂーの見解であつた。斯て其後總督とガンヂーの會見は數回行はれたが何等妥結に達せず、一九四〇年二月二十日國民會議派は遂に左の如き決議を通過するに至つたのである。

一、國民會議は英國政府が印度國民に何等事前の協議をなす事なく印度を交戰國たらしめた事、且つ戰爭に際し盛に印度の資源を收奪しつゝある事を以て、獨立自尊の心を持つ印度國民の堪え得ざるところなる事を表明する。

一、最近英國政府が印度問題に關し行へる聲明は、英國が帝國主義的目的及び英帝國强化の爲に今次戰爭を行ひつゝある事を示すものである。卽ち英國は是を機會に愈々印度を搾取し更に亞細亞及び阿弗利加諸國民より收奪せんとするものである。

是等の事情より見る時今次戰爭に於ける英國の立場は、搾取の强化を圖らんとするに外ならざるが故に、印度國民會議は印度が直接たると間接たるとを問はず英國を支持するべからざる

ものと思惟する。從つて國民會議は印度人部隊が英國の爲派遣を强制せられ、其他戰時必要なる人的及び物的資源が印度より持ち出される事に斷乎反對するものである。

「印度國民會議は、印度國民が完全獨立以外の何ものをも容認し得ざる事を玆に宣言する。卽ち印度の獨立は帝國主義或は自治領制等の埒內にあり得ざるものである」

印度國民主義者は單に此決議に贊成したのみでなく其贊意を實現せんとする急進主義者は直接行動を開始せんとした。

今日ガンヂーは依然漸進主義を執つてゐるがスバシュ・ボース及びジヤワハルラル・ネールは急進主義を持し、其下に相當の勢力をあつめてゐるのである。而して右大會の席上青年層に特に信望あるスバシュ・ボースは、英國と抗爭すべく卽時非軍事不服從運動を開始すべき事を主張したが、結局漸進を主張するものとの間に妥協が出來、非不服從運動を主義として認むるも其實行の時期をガンヂーに一任する事にした。猶ほ其際ガンヂーは自分と同樣大衆も非暴力主義を守る事が出來れば直ちに非軍事不服從運動を開始せんと述べたのである。

現在表面は兎に角印度青年及び急進派の人々は目的を貫くに暴力、非暴力を區別し居らぬも

のの如く、ガンヂーも是を認めて斯く言つたのである。現に六月一日のボンベイ電報は「ガンヂーが國民會議の內外に於て武力蹶起を說くもの多きに鑑み、非軍事不服從運動を直ちに開始し得ない」旨を報じてゐるのであつて、ガンヂーの主張に拘らず武力蹶起の情勢もある事を知らしめられるのである。

更に其後伊太利の參戰、佛國の對獨降伏と共に印度の事態も新局面を見せ、六月二十一日國民會議はガンヂーより國民會議指導の責任を免除し、且つ總督が印度の對英援助を活潑ならしむる目的を以て企圖せる戰時委員會の制度及び民衛の制度に反對を決議したのである。其後國民會議は戰時委員會に參加を禁止せられ、ガンヂーの對英協力に代りスバシュ・ボース等の意見が勝利を占める事となつたのである。

然るに七月二日に至りスバシュ・ボースを始め十四名の急進主義者は一種戒嚴令とも言ふべき印度國防條令に依り逮捕せられたのである。是は總督がスバシュ・ボースの勝利、ガンヂーイズムの敗退を以て危險と考へた爲に行つた措置である。

玆に於て七月五日にはカルカツタ其他に於てスバシュ・ボース逮捕反對の大デモンストレー

ションが行はれ英貨が全國的にボイコットされ、學生も反政府的スローガンを掲げ大示威運動を展開し、ボース釋放を叫ぶに至つた。

斯く大衆の反英氣運の高まると共に七月六日國民會議委員會は五日に亘る會議の結果印度問題を解決するには完全獨立の外方途なき事を決議し、中央立法議會員が完全に信任する印度獨立假政府組織を必要とした。

此委員會の決議は七月二十七日ブーナーに開かれる國民會議大會に於て可決せられるであらう。然し一方に於て英國は印度人の兵士、技術家、勞働者の强制徵集を行ひ、是が反對を彈壓する爲全國に亘り逮捕家宅搜索が行はれ、全印を不安に陷れてゐる。

勿論今後の情勢は豫言を許さないが、英國にして印度の完全獨立を認めない限り前述の如く武力革命の可能性もあるわけである、唯問題は今日の印度人が何等武器を有しない點であるが世界情勢の變化に依つては印度も武器を有し得るのである。猶ほ現在西北國境州のトライブのみは武裝解除を受けて居らず今次大戰亂勃發後各地に反英抗爭を行つてゐるが、是等と連絡する事に依つても武器を獲得し得るであらう。

要するに今次戰爭は印度獨立の千載一遇の機會であり、此機にこそ印度は完全獨立を達成せんとしつゝあるのであつて、既に六月九日スバシュ・ボース等急進派は早くも印度獨立政府の樹立を宣言したのである。勿論我々在日印度人は是に滿腔の贊意を表し、同月十日直ちに會合を開き其贊意を正式に決議し、更に一九四〇年春豫て印度人の敵とせられてゐたマイケル・オドイア（英人）を射殺せる印度青年アザード・シングの行爲を讃し、印度青年が今日アザード同樣の精神を持つべき事を印度本國に打電したのである。

印度新憲法批判資料

英國印度の政治力を認む

一八一三年より九年間總督たりしヘスチングス侯はアグラの砦塞につき

砦塞より寧ろ城ともいふべきこの巨大なる建造物を見たものは誰しも讃嘆する。高い壁、巨大な石等、設計と仕上げの巧みに打たれぬものはない。(註)

(註) The private Journal of the Marquis of Hastings (Panici offics edition) p. 194

更にまた言ふ

その立派な門を通つた時、私は是をつくつた民族が今どういふ狀態にあるかを考へた。今日この地方に住んでゐるやうな人が、このすぐれた設計をつくつたのではない。(註)

(註) Ibid. p. 198

氏が民族の「墮落」を悲まず、その事實が英國民のために都合がいゝと思つてゐたことは、北部に於ける回印教徒に就いて

此地方の人々が勇氣をもつてゐること、是は偉大なる仕事をなす上に、英國が指導しなければならない

と言つてゐることから窺はれる。

その勇氣の故に、東印度會社は、彼等を征服しなければならなかつた。かうした言葉は東印度會社及び自己の懐ろを肥し、不當な課税に依つて印度の産業を破壞し、自己の近親をしてハイデラバードのバーマ會社の會計課に任じた當の印度總督にふさはしいものである。しかも「世界の民主政治」の辯護者でないこのヘスチングス侯は、一八一八年五月十七日に次の如く記してゐる。

英國は遠からず健康な政治原則に依つて、今日己むを得ず行つてゐる印度の支配を放棄するだらう。而して、その時、英國は、この一時的の臣下を啓發し正義の道を獨り歩きさせ、單に緊密な通商關係のみを維持することを大いに誇り得るのである。

是は、將來に於て、印度が、英國の自由意志に依つて、政治的獨立を認められ、更に、英印間に强制せられざる通商關係のみを殘すといふことを現はしたものである。そして、吾人の知る所では、爾後百十五年他のいかなる總督もかゝる意見を吐露したことを聞かない。

ヘスチングス侯が、一八一八年印度の政治的將來について、かくの如き意見をもち得たのは當時印度に政治的自覺なく、また印度帝國の繁榮が、彼にとつて何等苦痛の種ではなかつたからである。然るに、印度に於ける英帝國支配の强化、その富と權力の增大は、英國政治家をして、英國が世界强國として印度領有を放棄し得ぬことを思はしむるに至つた、かるが故に、ヘスチングス侯以後の印度の支配者の中、一人として印度の政治的將來に留意したものをみぬのである。一方、印度は政治的に目ざめてきた。そして英國政府及び政黨人は、その原因が、重要ならざる部門に印度人の些少の權利を認めれば一般印度人の政治的關心を滿足せしめ得ると考へてつくつたかの「意思の宣言」Decralation of intension（マクドナルドに依れば、それは約束に非ずといふ）によると考へたのであつた。かの所謂圓卓會議の如きも、印度人の政治的自覺に僅か答へんとしてつくられたものである。

第一回圓卓會議には、印度最大の政治團體である國民會議 National Congress に屬さぬもののみが招請され、次で第二回目には、マハトマ・ガンヂー他少數のコングレス派が招請されたが、他の黨派代表がこの少數派の發言を封ずる位多數に招請された。果然、案件は不調になつたが、玆に吾人は、是を詳述する要はない。

唯、會議のある時期に於て、穩和派、回教徒、分派的代表者等に對し、彼等が欲せずまた不當とする個人的私慾名譽附與を以て臨まうとしたが、多數のものは、猶或る程度の自治を欲求し、民主的、國民主義的代表は、分派主義打破に向つて働きかけたことを述べた。彼等後者に屬するものは政治的に自覺せるのみならず、更に、英國官憲と交渉なき政治團體に於いて或る種の政治的權力をもつてゐるのである。そして、彼等は、帝國主義者の考と必然に全然一致しなかつたのである。

是はいかにすべきであらうか。そこで、悧巧な帝國主義者は、英領印度 British India と印度諸洲 Indian states（印度人の王に依つて支配される地域）との聯邦制をつくるといふ結構な考へに思ひついた。此考へが、英國人に依るものか、或はまた印度王族 Indian Frinces に

依るものかは問題でない。もし印度王族が考へ出したとすれば、それは英國政治家の示唆、卽ち聯邦が、結局王族の何等かの權力を奪ふものであるに拘らず、それが何等の損失をもたらさず、利益であると敎へられたに由る。

印度の政治的自覺及び能力の增大を知つた英國は、かくて他に類を見ぬ專制的聯邦首長、總督 Governor General 洲知事 Governor と貧弱な聯邦及び洲立法議會をもつ聯邦憲法 Fedral Constitution をつくつた。

從來英國政治家は、印度人中の僅かのものが言論の上だけで、英國に請願し抗議し、批難してゐると考へてゐた爲、言葉の上だけで是を慰撫し得ると思つてゐた。然るに印度人の政治的關心は全國に擴がり、一般大衆が暴力若くは非暴力的犧牲を念とせざるに至つたことを知るや英帝國主義者はもはや印度國民主義者といはゞ戲れてゐる秋でなく、專制的王族、總督、洲知事及び分派主義者と力を協せ、是を破碎しなければならぬと考ふるに至つた。一體國民主義がより高い原則に依らずしていつでも阻止されるかどうかは、今日の段階に達した印度國民主義に對する彈壓の結果が自ら示すであらう。

印度と大英帝國の「共通利害」

白書の第一節に曰く

一九三一年十二月兩院は陛下の政府が圓卓會議に宣言され、法令第三九七二號に依り發表せられた對印度方針を協贊する。該方針は印度責任政府の樹立が過渡期に於て相當の制限を要することを理解し、印度の現政府機構を聯邦性たらしめんとするに就き、研究討論の自由を包含する。而してその制限は、英印共通の利害の爲の「安全」Safeguard なる言葉を以て表はさる。

此章の起草者が印度の利害と言はず、英印の利害とした率直さは認めてやつてもいゝが、然し、問題は、主として何人の利害のための自衞であつたかといふことである。白書を讀んだ第三者は、安全其他の組立は、先づ第一に英帝國の爲、次いで印度のために卽ち英國を印度より重しとしてゐると述べてゐる。

何人の「責任」

印度は責任政府を得つゝあるといふが、誰に對しての責任であるか、勿論印度國民の代表者に對してゞなく、英皇帝陛下の政府、換言すれば、英國議會及び英國民に對するといふ怪奇なる責任自治なのである。

「過渡期」

印度責任政府は過渡期の間「安全」なる制限に服せねばならぬといふが、その期限は、白書の何處にも規定されず、また暗示すらしてない。また印度人は何を行ふべきか、また何を行ひ得ざるか、いかにして此過渡期を減少し得るかも示されてゐないので、その期限が印度人の希望、要求、行爲に何等の關係なきは明らかであり、英國民及び支配者は彼等の自利の爲、無限に長くし得るといふ奇怪なる責任自治なのである。

勿論、此新憲法に依り印度人が多少、いはゞ齒くそ位のものは得るのだが、それは別のことであり、それが立憲的であるとはいはれない。

聯邦論は不可

一般に聯邦制に對し、吾人は反對するのでないが、白書に規定せらるゝ如き聯邦制はどの人民に對しても幸福であり得ない。然し是は、英領印度と、印度諸洲の間にいかなる聯邦制も成立し得ないといふのでなく、吾人は全印度の進歩と繁榮の爲には、兩者が單一化する必要を認めるものである。蓋し、兩者の人民の種族、言語、宗教、習慣、文化が相等しいのであるからその融合歸一は自然であり、兩者の融合なければ、世界國民の内に伍し、人類文化につくす力は得られぬのである。然し、今日の聯邦案は斷じてかゝる融合を來すものではないのである。

聯邦の融和、利益、進歩の爲には、聯邦各部の行政其他の組織が均しくなければならぬが、今日の聯邦案はさうではない。何故なれば、その聯邦議會は、英領印度選出の代表と印度諸洲に於ける王任命の代表に依つて構成される、卽ち英領印度代表が洲人民に選出さるゝに拘らず、所謂印度諸洲代表は大體專制的といへる王の任命に依る。一體人民の代表と王の任命者が

どうして融合してゆけやう。加之、印度諸洲代表を任命する王は事實彼等を支配し得るのでなく、王自身、英國首長、駐在官はまた監督官に依つて英國に臣下の關係を結ばされてゐるものである。

玆に去る二月二十一日ビザガパタムでラマナンダ・チャツテルジーが行つた演說を引用してみるのは無用でないと思ふ。

印度諸洲の多くが今日のやうに王の意見に依つて統治され、英領印度が多少民主的な立法議會を有する場合、兩者を聯邦組織に單一化せんとするも、組織に於て異り、相反するものを一堂に合せしめんとする奇現象を呈するのであつて、かくの如きは今日いづれの聯邦にも類をみぬのである。今日の既存聯邦組織の特長は聯邦に於けると等しき政府が各洲にも存すべきを宣言してゐる點である。例へば、合衆國憲法は各洲が共和政體の政府を有すべき一章を規定し、スイス聯邦憲法も各州が各憲法を有することを保證され、共和的民主的政體をとることを認められ、同樣に獨逸新憲法も、共和聯邦各邦が共和憲法を有すべきことを規定してゐる。印度聯邦に於いて英領印度が多少進歩せる代議的政體を有するとき、印度諸州も當然

それをもつべきである。人爲的に兩者の政體の均齊をのぞむのでなく、印度諸州が代議制度をもつことはその人民のためであり、またそれは同時に英領印度の人民の爲に必要だからである。

白書に於て「印度聯邦の英領印度が多少進歩せる代議制をもつべき」云々とある時、チャツテルジー氏の右の言葉は、印度人現在の更に進歩せる代議制欲求に對し、誤解を與へるおそれがあるが、それについては後に述べる。

印度諸州と聯邦

所謂三度の圓卓會議及びその他の聯邦への運動が、印度諸州の人民八千百萬人の意思を無視して行はれてきたことは、英國政府及び印度諸州の統治者が深く責を感ずべきところでなければならぬ。人民八千百二十三萬七千五百六十四人といふ數は、當時支那及び合衆國をのぞく何處の國の人口よりも多いのである。この二十世紀に、苟くも文明政府がかくも多數の人々の重大な利害問題に就て彼等の意向、希望を考慮に入れず憲法をつくることは何たる事であらう。

白書に依れば、聯邦立法議會に於ける印度諸州の代表は統治者が自分の意思で任命するのである。サンキー卿の聯邦制小委員會に對する第三次報告案には「是」を印度諸州の判斷に任せるとあるが、もし其統治者が、王と人民との意思の一致する如き方法に依つて代表を選出するならば人民の幸福を增進し得るのであるが、然らざる場合州の利益が決して發展せしめられないことは言ふまでもない。

英領印度代表

英領印度が聯邦議會に送る代表者の數は次の如くきめられてゐる。

州	人口（百萬）	上院代表	下院代表
マドラス	四五・六	一八	三七
ボンベイ	一八・〇	一八	三〇
ベンゴール	五〇・一	一八	三七
ユナイテッド・プロビンス	四八・四	一八	三七

パンジャブ	二三・六	一八	三〇
ビハル	三二・四	一八	一〇
セントラル・プロビンス・ベラル	一五・五	八	一五
アッサム	八・六	八	一五
ノース・ウエスターンフロンテイア・プロビンス	二・四	五	五
シンド	三・九	五	五
オリッサ	六・七	一	一
デーリー	〇・六	一	二
クーグ	〇・二	一	一
ベルチスタン	〇・五	一	一
アジメール	〇・六	一	一

吾人は英領印度各洲への議席割當に對し、確一的原則はなく人口の數の比較的多い洲より、比較的少い洲に議席が多く與へられてゐるのをみる。例へば、ベンゴール、ビハル、マドラス

ユナイテッド・ペロビンスでは、人口に比して少なく、ボンベイ、パンジャブでは多くなつてゐる。是に對し、サンキー第三次報告案はパンジャブでは政治團體に重きをおきボンベイはその歴史的通商的重要性を考慮したものである云々と述べてゐる。

聯邦議會の議席

上院の議席二百六十名中、百名は事實上英國の輩下である印度諸洲の王の任命に依るもの、十名は洲知事の指名に依るもの、十名は在印歐洲人及び結婚等による英化印度人 Anglo indian の選擧に依るものである。以上は、いづれも英國びいきと見なされる、更に加はるべき五十名の回教徒代表中半數は反國民會議派とみられ、また、階級を代表する數人も是に計算されるから、上院の過半數は政府側と言ひ得る。

下院の議席三百七十五名中百二十五名は、印度諸洲の王に依り任命され、その他は英領印度の代表者であつて、その内譯は、不觸賤民十九、シック六、回教徒八十二、基督教印度人八、英化印度人三、歐洲人八、(例外的には)婦人九、商工十一、(多くは歐洲人)地主七及び勞働者十

其他ヒンヅ百五であるが、此中、前記王の任命者百二十五に加へ、政府側として英化印度人の四、歐洲人の十四、回教徒から少なくも四十、不觸賤民より九、地主より三、基督教印度人より四を得られるであらうから、合計百九十九に達し、是亦下院の過半數は政府側といふことになるのである。

總督の權力

「總督は、國務の或部門、卽ち國防、宗教、外交の權力を掌握す」と白書は規定してゐる。國防及び外交は自治國家の重要機能であるが印度國民には是が支配權を與へられてゐない。またそれが何時與へられるかも示されてゐない、宗教に就ては、印度は基督教國に非ざるが故に宗教監督の必要はないのである。

以上の他總督は次の事項に就て特別の權能を與へられてゐる。

一、印度またその一部に於ける治安維持

一、聯邦の財政及び信用の安定

一、少數派の法益の保護
一、公務に服するものの憲法に規定せらるゝ權利及び法益の保護
一、商業的區別の防止 Preventiou of Commercial discrimination
一、印度諸州 Indian state の權利の保護
一、總督支配下の凡ゆる行政に關聯せる事項

以上すべての事項に於て、總督は大臣の答申の如何に拘らず、自己が必要とするところを實行し得る。

更に總督は次の如き範疇に屬する諸權能を賦與せられてゐる。

一、立法議會を解散、延期、召集するの權
一、法案の承諾を留保するの權
一、或種の立法をなすに就き事前の承諾を與ふるの權
一、憲法に規定せらるゝ會期を延長する時

重大な結果をもたらす場合、聯合立法議會 Joint session of Legislature を招集する權

一、立法議會の多數採決に對し、獨自の行動を採る權
一、立法議會に於て法案審議を中止せしむるの權
一、總督の權力を行ふに必要なる立法

總督は必要と認むる時兩院の協贊を經ず總督宛の教書を發せしむることにより總督令を發布し得、該法令は立法令 Act of Legislature と等しき效力を有する。また總督は、何時でも自己の管轄する部、若しくはその權能を行ふ上に必要ある時布告 Ordinance を發布し得る。

更に總督は、「英領印度の良き政府の爲」For the good Government of British India 立法議會の閉會中、大臣の意見が非常時 Emergency なることを認めた時、他の事項に就ての布告を發し得る。

而して以上二種の布告は立法令と同一の效果を有する。

最後に白書は

「憲法機構が全然破壞された時、陛下の政府はかゝる狀態に備へる爲、かゝる事態が州若しくは聯邦に生起せる場合、當該州知事若しくは總督は、英國王の政府 King's Government の爲

必要なる凡ゆる權力を與へられることを規定す」

聯邦の財政及び行政

「聯邦內閣が組織さるる以前に於て政治關係より分離せる準備銀行 a Reserve Bank, free from political influence が設立さるべきものとする。銀行は通貨交換の業務を扱ふ」

印度準備銀行案は政治勢力より分離することを要すとせられてゐる。然し財政通貨問題を理解し得る多數の印度人資本家、產業家、商人は直接間接に政治關係を有してゐる。故にそれらの人が準備銀行と關係を有すべからずといふことは銀行が完全に英國人に依つて支配されることを示す。財政問題に理解なき印度人をもつてきても、英國人の主張に反對すらも出來ないのである。

印度聯邦銀行と英蘭銀行の間には類似性が見出される。然るに英國は被征服國でなく、大英帝國の政治生活及び政策と英蘭銀行を始めとする諸經濟制度の活動の間には密接なる關係がある。

準備銀行が政治關係より分離することを要すといふのは明らかにいへば、親英勢力より分離することを要求し、銀行を親英勢力の下に活動せしむるに遺憾なからしめんとするのである。

聯邦の下に於ける英領印度の行政、立法に就ては白書に何も規定せられず、また印度人よりその商業產業の正當なる權利を奪ひ、是を英國資本家に與ふる所の鐵道局案にも規定されてゐない。知事は州內閣閣僚の意見に反し、または是に諮議せずして知事令を發布し、閣僚若しくは立法部の意思如何に拘らず、財政を調節し、また憲法破壞の場合には、州政治を有效に運行し得る爲の凡ゆる權力を賦與さるゝことを認められてゐるのである。

印度最近の對日動向

一

從來、日本が印度の輿論に殆んど無關心な態度を執つて來たに反し、支那は英國の支持の下に執拗なる宣傳を行ひ來つた結果、支那事變勃發以來印度に於ては反日風潮の擡頭を見るに至つた。事變勃發當初日本が歐洲各國に對し盛んに眞相を傳へる方策を執つたに拘らず、印度に對しては何等の措置に出でず、反日策動の跳梁に委ねたことは洵に遺憾であつた。然るに元來宣傳に巧妙なる支那は、今事變が被壓迫者の爲の戰であると印度人を信じ込ましむる爲に凡ゆる手段を盡したのであつた。卽ち過去に於て印度と支那が友交的文化國として相互に文化を交換し來つた事、今日兩國は互に古代文明の保護者たる地位にあること、兩國が今や共に外力の壓迫を受けつゝあること等が支那人に依つて宣傳せられ、印度人も亦印度、支那兩國は共に其

獨立の爲闘ひつゝあるのだと信ずる傾向を生ずるに至つた。

他方に於て日本の膨脹に反對なる國に支配せられてゐる世界の新聞網は間接に印度に於ける支那側の反日宣傳を助長しつゝあつた。

私は先づ茲に支那事變に際し如何にして支那が印度に反日宣傳を行つたか二三の例に依つて檢討して見たいと思ふ。

先づ擧げねばならぬことは、國民政府が印度サンチニケタンのタゴールの大學に支那會館並びに支那文庫を造り、且つ數十萬圓の價格を有する書籍を寄附した事である。加之支那の大學教授は殆んど定期的に印度を訪問し、印度側の同情を求めてゐるが、是等教授がタゴール、マハトマ・ガンヂー等に面會することを忘れないのは勿論である。而して印度新聞に依れば、最近に是等指導者を訪問したのは陶教授といふ人物であると言はれる。また最近蔣介石はタゴールに宛てた書翰に於てタゴールの支那に對する同情を感謝し、今後の援助を要望してゐるが、其書翰に蔣介石は印度語の最大の敬稱グルデワ（大先生の意）なる文字をタゴールに對し使用してゐるのである。

以上の他支那人は印度に多數の回教徒が居住することに着目し、近東諸國訪問支那回教徒使節を印度にも派遣したが、其際該使節は支那回教徒將領白崇禧より印度回教徒の援助を希望せる書翰を携行せりと傳へられる。而して本使節は全印度を巡回し、頻りに反日宣傳に努めたのである。

更にまた、印度國民會議の領袖ジヤワハルラル・ネールが共産主義的思想を抱持せる事實に依り、支那共産軍の頭目朱德はネール宛の書翰を送り、對支援助の組織化を要望するところがあつたが、其書翰は印度の各新聞に掲載せられ、相當の效果があつたとせられてゐる。

玆に今一つ見逃してならないことは在印度支那領事が不斷の活動を行つてゐることであつて彼等は進んで印度國民會議の首腦部に接近し、支那側の立場の諒解に努めてゐたのである。

支那の宣傳方法の概要は以上の如くであるが、是に對し印度の有力人物は如何なる意見を持つてゐるであらうか。

先づ印度國民會議員ではないが、國民會議に對し絶大の勢力を有するマハトマ・ガンヂーは如何なる見解を有するかといふに、彼は支那事變の政治的意義に就ては終始沈默を守つてゐる

樣である。唯倫理觀は時折彼の唇から洩らされるが、それは勿論彼獨特のものである。例へば、前記陶教授が最近ガンヂーを訪問した際、支那人は暴力に對するに暴力を以てしてゐるから、支那人がよいとも言へないと述べたと傳へられる。彼の國際政治に對する考は全く彼の非暴力思想に基いてゐるといふの外ない。

次にタゴールに就て見るに、人道主義者であり、詩人である彼の考へ方は、詩的空想的人道主義的思想に支配せられ勝であり、支那側の宣傳は容易に彼の頭腦に浸潤しつゝある如くである。

更にジヤワハルラル・ネールは如何といふに、彼は從來一度ならず自ら社會主義的傾向を有することを宣言して居り、自然彼は其意味に於て反日的である。彼は從來筆に口に共産主義民主々義を支持し、ファシズム及び全體主義を排擊することを標榜してゐる。彼は永年歐洲に在つたが、歐洲に於て行へるインターヴュー或は演說等に於ても彼は卒直にスペイン人民戰線派、チエッコスロバキヤ、支那を支持し、伊太利、獨逸、日本に反對なる見解を述べたてゝゐる。然も彼は國民會議の議長であつたのであるから、今日の印度に於ける反日風潮は彼の影響に依

るところが頗る多いと言ひ得るのである。

然らば前國民會議々長スバシュ・ボースは如何なる見解を有するか、惟ふに彼が國民會議々長に就任して以來其の思想は相當變化した如くである。目下のところ彼はガンヂー一派の代辯者に過ざる如くである。從つて彼の意見として獨自のものはないが、國際關係に就てはジヤワハルラル及びガンヂーの見解と若干趣を異にしてゐる樣である。

以上の人々はタゴールを除き何れも國民會議に關係を持つ人々であるから、彼等の見解は當然に國民會議全體の外國に對する態度に甚大な影響を與へるのである。斯て國民會議は是等指導者の下に反日決議を通過し、また日本品ボイコットを提唱するに至つたのであるが、印度の新聞の傳ふるところに依れば國民會議の中にも反日ボイコット其他に反對の見解を有するものが少くないと言はれ、また印度よりの歸朝者の報告に依れば日本品ボイコットは未だ實施せられず、其提唱は殆んど效果がなかつたといふ事である。

二

次に印度新聞の種類を大別して見ると、一部は英國人のみの支配下にあり、一部は英印人の支配下にあるが、是等は共に英國支持派であり、支那事變に對しても英本國の新聞と歩調を合せてゐるわけである。然るに其他に印度人の通信網の支配下にある新聞があるが、それは國民會議派の支配下にあるものと國民會議より獨立的存在なるものゝ二つに分けることが出來る。而して前者が反日的たるは怪しむに足りないが、國際的價値を有し、且つ純印度的輿論を代表すると見るべき後者の支那事變に對する態度は英國の宣傳に對し懐疑的であり、必ずしも反日的でないのである。

玆に印度に於ては現在親日的態度を示す新聞は全然ないのであるか、といふ疑問が起るかも知れぬが、斯かる新聞は勿論存するのである。卽ちそれは國民會議と競爭的地位にあり、然も民族的文化的國民主義の上に立つヒンドウ・マハサバの意見であつて、ヒンドウ・マハサバは從來、屢々國民會議の對外政策中就中支那事變に對する態度を攻擊し來つたのである、ヒンドウ・マハサバの對外政策の基本は、總裁サバルカル氏に依れば、次の二つの點にありとせられる。卽ち一は「英國の難局は印度にとつての好機」今一つは「英國の敵は印度の友」といふ事

である。而して彼の指導下にあるマハサバが國民會議の反日態度に反對なることも亦怪しむに足りないのである。

マハサバは勿論其支配に屬する數種の新聞を有して居り、それら新聞は支那事變の責任が日本にのみあるのではなく、支那にもあるが、最も大なる責任を負ふべきは西歐であることを屢々說いてゐるのである。プーナに於て發行される「マーラツタ」紙は此種の新聞に屬するが、特に注目すべきはムリク氏なる人物が同紙に發表せる所說である。卽ち其論文は極東に於ける衝突の題下に一八六一年より一九三七年蘆溝橋事件の勃發迄の日本の對外關係を各方面より論述したるものであるが、氏は先づ地圖を擴げれば滿洲及び朝鮮が日本の生命線なることは明らかであるとし、日淸戰爭の眞義に就て述べ、其後に起つた三國干涉、更に獨露英佛それ〴〵の支那に於ける利權獲得、次いで日露戰爭に於て日本が多數の人命と巨額の國幣を費し、露西亞の東亞侵略を阻止したることを述べ、最近に於ては西安事件以來の國民政府の共產黨との合作事情を明かにし、日淸戰爭日露戰爭及滿洲事變並びに蘆溝橋事件の勃發が決して偶然のものでないことを明示し、最後に「若し日本以外の國が日本の地位に置かれたら日本と同樣の行動

に出でざるを得なかつたであらう」としており、其所論は日本人一般の讀讀する價値あるものである。マハサバに屬しないが然も親日的社說を發表しつゝあるカルカツタのフオワード紙はまた特に日本人の注意を要する新聞である。同紙は今日迄三回親日的社說を揭げ、その中二回は「英文每日」にも揭載せられたのである。

更にまた注意を要するのは訪日印度人歸國後の報告或は談話が支那の印度に對する反日宣傳の效果を少からず減殺しつゝあることである。支那事變勃發直前來朝した穩和主義的政治家コレンダ・ダス氏は歸國後プーナのサーバント・オブ・インディア紙に反日ボイコットの愚を戒める論文を寄稿したが、また最近反日態度を警告する單行本が昨年世界教育會議に來朝した一印度人に依り出版せられたと言はれる。

私としては何分遠隔ではあるが、印度に於ける印度人の反日態度を是正する爲、事變發生以來及ばずながら凡ゆる手段を盡して來たのである。卽ち支那事變發生の責任が主として英蘇兩國に屬することを始めて決議したのは、私の主宰する印度獨立聯盟であつたが、またガンヂー及びタゴール氏に對し、國民會議の反日態度に反對する電報を送り、或はまた印度の新聞に日

本の立場を正解せしむる寄稿を屢々なし來つたのである。

顧つて日本は印度に於ける誤解を解く上に如何なる措置に出でゝゐるかを見るに、事實上殆んど何事もなされてゐない樣である。故に私は印度の反日の責任の一半は日本にありと斷言して憚らないものであるが、斯かる不幸なる狀態は兩國の爲勿論速かに匡正せられねばならない。

最後に私は日本國民の注意を喚起したい事がある。印度の人口は三億五千萬を算するが、其大部分は印度敎徒であり、從つて大部分が佛敎徒である。日本人とは信仰上に於て兄弟である關係上、自然日本に對しては好意を持つてゐるのである。勿論環境的立場に對する同情といふ傾向はあるが、國民會議に於ける反日態度は、其中の社會主義、共產主義的分子が標榜するところであつて國民會議中にも親日的のものは少くないのである。然も國民會議は全印度を意味するものではない。國民會議に於ても宗敎的信仰を有する多數の印度敎徒は反日的でなく、また反日的たり得ないのである。宗敎は印度に於て極めて重要なる役割を果してゐるが、日本に反對するのは概ね非宗敎的な社會主義者乃至共產主義者である。

惟ふに現下日本として最も緊要なることは、今次大東亞戰爭の眞義に就き印度其他亞細亞の大衆を啓蒙するにあることは論を俟たざる處であるが、その具體的問題は既に日本の最高指導者によつて、自ら決定せられて居るところであり、我々は只この道義國家日本の態度に全幅の信賴を寄せると共に、東亞の目的である印度獨立問題の解決に向つて一大實踐運動を展開したのである。

印度獨立と大東亞戰の意義

一

世界戰爭は西歐文明發達の最高頂に於て勃發せるものであるが、それより百年前卽ち奈翁戰爭頃迄の歐羅巴と亞細亞を比較するに、兩者は凡ゆる點に於て略々同等程度の發達をなして居り、或方面に於ては寧ろ亞細亞が歐羅巴より優れてゐたのである。然るに其後一方に於て亞細亞が衰微すると共に歐羅巴獨り興隆するに至つたのは如何なる原因によるか、其理由は一二に止まらぬが、主なるものとして宇宙の森羅萬象を支配する自然の法則をあげ得る。

凡そ地球上のものは生物たると非生物たるとを問はず、悉く自然の大法則の適用を受けてゐる。而して生物は人間たると植物たるとの別なく、此法則により、出生、幼年時代、青年時代壯年時代、老年時代、死、再生の課程を經なければならぬのである。然し此の法則は單に個人

に適用せられるばかりでなく、國家民族も亦同樣の法則に支配せられるのである。嘗ての羅馬帝國の俤は今日何處にかあらむ？　又一時世界の二分の一を領有した西班牙の現狀は如何？

是、一に自然の法則により免れ得ざりし運命に從へるものに外ならない。

昔時世界文化の上に輝しき業績を示した亞細亞も一九世紀以來次第に衰微し、是に代つて歐羅巴が擡頭したが、歐羅巴は是を機とし、亞細亞を侵略し始めた。而して亞細亞は愈々衰微の一途を辿るに至つたのである。

然らば英國は如何なる方法により亞細亞を侵略したか、其方法は英國の傳統的なる離間政策であつた。此政策は單に印度に對し用ひられたるのみならず、埃及、アラビア諸國、イラン、アフガニスタン、支那、馬來等に於ても行つて來たのである。卽ち印度に對する離間政策の例を擧げれば、印度敎徒を回敎徒に對し操縱し、或は其逆を行ひ、又は王侯と王侯とを相食ましめたのである。條約の作成破棄には何等信がおかれず、何等名譽信義を顧みることなく、朝に一方に味方し、夕に他方に味方する有樣であつた。王位は最も高い値で賣買せられ、軍事的支援と言ふことも、商品の如く取引せられたのである。使用人は其主人を裏切り、兵士は軍旗を

捨てることを唆かされ、其行爲の德義問題に對しては寸毫も顧慮せらるゝ處がなかつた。王侯を戰爭、紛亂に捲き込む爲には口實、つくり事がどし〳〵工夫せられた。凡ゆる法といふ法、—國際的のものと國內的のものとを問はず、道德的のものたると、宗敎的のものたるとを問はず—は弊履の如く捨てられた。幼いけなきもの、夫を失へるものに對し何等斟酌が加へられず、老いたるも若きも同樣に扱はれた。而して其唯一の目的は利益をあげ、英帝國をつくると言ふ事であつた。其目的の爲には總てが犧牲に供せられた。實に英國の印度征服は僞證、僞造、詐欺、虛構の連續的記錄であつた。それは政治的野心行爲、政治的虛僞、政治的不德の記錄であつた。

所謂「デビデ・エト・インペラ」卽ち分割し支配する政策は、英國の對外政策の根本をなすものであつて、今日も英國は此政策を用ひ、自己の地位を保持するに努めてゐるのである。而して支那事變も單なる日支の抗爭ではなく、實は世界大戰後英國が支那に對して用ひ來つた離間政策のために勃發したのであり、これを回顧すれば事變勃發以來英國は、一方に於ては世界の輿論の反日化を誘導するに躍起となると共に、他方に於て兵器、彈藥、飛行機等を盛んに國

民政府側に供給し、以て日支間の鬪爭の永引くことを策したのであつた。常に口に平和を呼號する英國が、何故に斯かる陋策を執つたかと云へば、日支兩國の疲弊に乘じ、東亞に於ける自己の立場を固めんとするに依ること勿論であつたが、特に英國の勢力に挑戰し得る如き强國の出現を封ずるを以て傳統的政策とする英國として、日本の國力を殺がんとしつゝあつたことも明かである。英國は嘗て自國の競爭者たる國力を有せる西班牙を敗り、次いで佛、露、更に前世界大戰には獨逸をその敵としたが、當時の歷史を一瞥すれば、英國が常に離間政策を以て最も效果的武器としてゐたことが首肯せられるのである。今や大東亞戰爭の創造する世界新歷史の躍動は遂に暴英帝國の桎梏から印度を解放せんとしてゐる。余らが指導者日本への信賴と感謝は宿願の中に崇祀し、今暫く彼れ英國の老獪なる策謀史を顧ることにする。

抑々世界史の上に大なる時代を劃した前世界大戰の原因は何であつたか。ヨーロッパのセルビアに於て、オーストリアの皇太子殿下が暗殺されたといふことが、其の發端であつた。卽ち當時に於ける獨逸の狀態は、宛かも大東亞戰前の日本に類似せるものがあつた。人口は增加し獨逸の製品は世界至る所に進出したが、獨逸發展の道は英帝國のため各所に於て塞がれつゝあ

つた。斯て獨逸は何等かの打開策を講ぜざる限り全滅の運命に陷らなければならなかつた。玆に於て着目したのが、世界の寶庫と云はれる印度であつた。是がため獨逸は伯林・バクダッド間に鐵道を敷設することを計畫し、更に伯林・バクダッド間の鐵道が完成すれば波斯、アフガニスタンまで延長敷設する計畫であつた。然るに其結果は獨逸が直接印度を脅かすことゝなるため、英帝國の生命を脅かすことゝなる。仍つて英國は大いに狼狽し、數回に亘り獨逸へ使節を派し、右計劃の實行を斷念せしむべく凡ゆる手段を講じた。然るに、獨逸としては獨逸の發展か否かに關する問題なるを以て、萬難を排し豫定の行動に進まんとした。英國としては、獨逸が既定方針を變更せざる以上、自國の利益の爲に是が非でも獨逸を討たなければならぬ。斯て國策は決定したのである。

故にセルビアに起つたところのオーストリア皇太子殿下暗殺の有無に拘らず、世界戰爭は英國の案通りに必然勃發すべき運命にあつたのである。卽ち右暗殺事件が全然關係ないとは云へぬが、これありし爲に多少戰爭を早めたといふことは認め得るのである。

二

支那事變に於て、支那の背後に潜在して居る勢力、それはどこから來たかと云へば、結局は英國の斯かる國策に胚胎した。卽ち世界大戰後交戰國は何れも疲弊し、僅かに二つの例外國、卽ち、その一つはアメリカであり、他の一つは日本があつたのみである。然るに人種より見ても、宗教より見ても、風俗、習慣、その他凡ゆる方面より見て、アメリカは英國と共通點を持つて居る。のみならず、政治、外交、軍事、何れの方面に於てもこの二國は利害關係の衝突が非常に少い。これに反し、日本は人種的には勿論、凡ゆる方面に於て英國と利害相反する。殊に日本は大戰前の獨逸と同じく、その人口も增加し、製品は殆んど世界市場を席捲せんとする勢ひで發展しつゝある。この情勢を以てすれば、英帝國崩壞の前夜、卽ちけふこのことに思ひやるのも笑止の沙汰であるが、結局日本は近き將來に於て、英國の勢力に挑戰する國となるとして、英國は此の時期の到來せざる中に、日本の勢力を減殺せねばならぬといふ事を國策に定めたのである。是は今より二十年前、卽ち世界大戰直後のことであつて、爾來英國はその國策

に基き、支那の背後に於て巧みに反日宣傳をなし、また支那以外の亞細亞の諸國——例へば印度内に於ても、或は土耳古、波斯、アフガニスタン及びその他の國々に於ても、排日的輿論の導入に努めたのであつた。

斯て今次の大東亞戰爭、又支那事變も、かの世界大戰同樣不可避の運命におかれてゐたのである。支那事變が英國の策動に基くものなることは支那事變に對する英國の態度を見れば一層明かになる。卽ち、一方に於ては香港を通じて兵器、彈藥、飛行機などを供給し、日本との抗爭を繼續するやう煽動し、他方に於ては世界到る所に反日的輿論を動員し、結局ブラッセルに於て九ケ國會議を招集するに至つたのである。而して九ケ國會議に參加したのは九ケ國以上の國々であつたが、その指導精神は實に英國の勢力を保護するといふ事にあつたのである。故に九ケ國會議なるものは唯各自のみであつて、實は一ケ國會議に過ぎぬと斷じ得るのであつた。

また同會議に於て、英國のみ獨り日本を非難するものでなく、米國もまた日本の行動を非難しつゝあるかの如く裝ふため、英外相イーデンは九ケ國會議の發案者が米國なりと公言し、却

つて米國の憤慨を買ふといふ醜態を呈出した。ブラッセル會議は實際のところ全然英國外相イーデン單獨の發案によるものであつたのである。世界の凡ゆる禍ひの因が英國に在ることはこの一事に依つても證明されるのである。

また世界の反日輿論を動員するに當り、英國は、日本の南京空爆等を物々しく非難してゐたが、余は最近の新聞で英國はさきの盟約國であつた佛蘭西の然も非武裝地として獨逸軍もこれに手を着けなかつた巴里を盲爆したことを知つた。余は玆に於て特に强調する。卽ち日本は軍事的に必要なりと認むるものに限り空爆を行つて居るのであつて、南京に於ては支那軍は完全な防備を施し、高射砲、飛行機、機關銃等を具備して居るのである。それ等をものともせず日本の飛行機は軍事上必要な爆擊を敢行したのである。然るに英國自身は、今回の巴里盲爆といひ更に從來戰略的に何等の必要もないのみならず、機關銃もなければ、高射砲も飛行機も持たぬ、全然武裝のない印度に對し屢々爆擊を行つてゐるのである。また阿弗利加に於ても、前獨逸植民地たりしタンガニカルに爆擊を行つてゐる。斯の如く、英國は世界に向つて他人の行動を非難しながら、自ら却つて文字通りの非道を敢てしてゐるのである。日本の空爆は軍事施設

乃至武裝地帶に對するものであるからその非難はあたらぬ。非難すべきは英國自身の行動であるに拘らず、日本の空爆を以て日本孤立化の武器に使用してゐるのである。

三

印度征服以來英國は、亞細亞の各地に領土、勢力範圍を設定し、亞細亞に大なる帝國をつくるに至つた。卽ち過去百年間に亞細亞は完全に英國を主力とする英米系白人勢力の支配下に歸するに至つたが、其の結果亞細亞は英米系白人文明を以て優秀なりとする一種の催眠術に罹り英米系白人文明に心醉し、英米系白人勢力を脅怖するに至つた。亞細亞は政治的に經濟的に西洋に征服されたるのみならず、文化的にも英國に支配せらるゝに至つた。爾來亞細亞は自己本來の文化のあることを忘れ、歐風のもの、英國的なるものと云へば、其の價値の如何を批判することもなく直ちに是を禮讃した。而して政治的支配、軍事的支配を排擊することは猶比較的容易なりと云へるが、文化的勢力の支配を排擊することは、最も困難なることである。

然るに一九〇四年勃發せる日露戰爭は、永年英米系白人文明の催眠術に罹れる亞細亞人を一

瞬に覺醒せしめた。抑々日露戰爭は單に日本と露西亞との戰爭ではなく、それは東洋精神を代表する日本と、西洋精神のチャンピオンたる露西亞との戰ひであつた。更に言葉を換ふれば、それは善が惡に對する戰ひ、德の不德に對する戰ひであつた。其の結果は周知の如くであるが勝利を收めたのは單に日本だけではない。勿論それは德の不德に對する勝利、善の惡に對する勝利であつたが、同時に東洋精神の西洋精神に對する勝利であつた。西歐の侵略勢力が初めて亞細亞人によつて喰ひ止められたのであつて、この亞細亞の勝利は全亞細亞を感激せしめ自覺せしめたのであつた。

斯て亞細亞の覺醒運動は日露戰爭に始まるのである。青年土耳古黨が歐洲勢力の傀儡たる當時の支配者を排斥する運動を起して新土耳古を建設せんとし、ペルシヤ革新運動が起り、印度に獨立運動が始まり、支那に革命が起つたのは、何れも日露戰爭に於ける日本の勝利に刺戟せられたものであつた。衰退の亞細亞は日露戰爭以來新しき魂を以て更生せんとするに至つたのである。

惟ふに支那事變は、日露戰役の亞細亞的意義を有するものでなければならぬ。亞細亞は今や

一大轉換期に入つたのであつて、亞細亞人は一致して英國以下の白人勢力を亞細亞より排擊し亞細亞人の亞細亞建設に努めねばならぬ。支那は印度と同樣百年間、其程度こそ異れ、英國の勢力のため惱まされて來たのである。故に支那から英國の勢力を驅逐することは、支那自身のためのみならず、印度、否全亞細亞に於ける英國の惡勢力を打倒する上より急務であつて、この意味より支那は一日も早く英國の操縱に依る抗日の愚を悟り、亞細亞人の亞細亞を建設するため、反英に一轉し、進んで日本其の他の亞細亞諸國と提携し、全亞細亞反英抗爭の目的達成に邁進しなければならぬ。大東亞戰爭の勃發は實に全亞細亞が日本を盟主と仰いで翼望し續けた熱願が達成されたものであつた。然も日本軍の征く所、亞細亞は甦りつゝあるのだ。余は敢て言ふ。暴戾英國の桎梏に苦しんだわれら被壓迫民族が忍苦の百年は將來の平和に比ぶれば短かい惡夢と替る日の訪れ來りたることを。

四

然らば亞細亞回復の使命、即ち今日からの建設は如何にして果されるか。惟ふに英米人勢力

の據點は印度に在る。今より二百年前迄は薄漠たる島國であり、人口、文化、軍事、經濟、凡ゆる部門に於て後進國であつた英國が、今日世界に日沒することなき帝國を築くに至つたのは如何なる理由に依るかと云ふに、それは百年前印度を征服したことに依るのである。即ち印度の財力、經濟力、文化力、戰略的地位を利用したからである。今一例として印度に於て英國は如何なる經濟政策を執つたかを一瞥しよう。

十七八世紀頃迄印度は莫大なる富を有し、其の統治者の倉庫には金銀寶石等の財寶が充滿してゐた。國內の商工業又殷盛を極め、巨額の輸出貿易に對し金銀が盛んに流入して來た。亞細亞、歐洲、阿弗利加の港々、貿易場に印度商品の聲價は極めて高いものがあつた。即ち印度のモスリン、絹織物、毛織物、眞鍮、青銅製品は世界市場の寵兒であつたといつても過言ではない。然るに今日印度は世界中で最も貧乏な國になり、印度人の一ヶ年平均收入は四十五留比に過ぎないのである。然らば是は如何なる理由に依るのであるか。

一七五七年プラッシーの戰勝により印度の最も豐饒なる地域を收めた。英國は史家の云ふ「幾世紀に亘る幾千萬人口の蓄積」を奪取し、是を倫敦に送付したのである。英國史家自ら「其財

産の價値は測り得ないが、數百萬磅に達したに違ひない」と云ひ、マコーレイは「英國に向け財寶を積んで航海する船が印度、大西兩洋に充滿した」と述べてゐる。又アダム・ブルツクスは「プラツシーの戰よりウオーターローの戰迄の五十七年間に印度から英國に向け輸送せられた財貨は五〇、〇〇〇、〇〇〇弗乃至五、〇〇〇、〇〇〇、〇〇〇弗に上る。而して當時英國人が印度に於て行つた掠奪搾取の方法は其後漸く廢せられたが、然も搾取其のものは依然として行はれてゐる。卽ち往時と現代との差異は、今日英國の印度に對する搾取の方法が法律制度化され、間接的に是を行つてゐると言ふだけである。今日と雖も毎年一七五、〇〇〇、〇〇〇弗が鐚一文缺けず印度から英國へ送られてゐるのである。」と述べてゐる。嘗て印度に任官してゐたジョン・スリバンの言によれば「英國の印度に於ける統治機構は海綿の如きものであり、ガンヂスの兩岸より價値あるものを悉く吸ひ上げ、是をテームス兩岸に吐き出させるのである。」とのことであるが、以上に引用した英國人の言に徵するも、英國が如何に印度を犧牲として其富を增大したかゞ明かである。

而して英國は今日猶印度を利用し、印度人を彈壓し、不當なる法律を制定し印度人を苦しめ

つゝあるのである。過去三十年間に逮捕、投獄、死刑に處せられたもの、虐殺せられたものは數十萬に上るのである。其一例をあぐれば世界大戰中、印度は英國が戰後印度に自治を與ふと約せることを信じ是を支援した處、戰後ローラット法と言ふ彈壓令を布き、前言を顧みず印度人を强壓したことがある。是に對し印度人は大いに憤慨し各地に集會を開いたが、北部印度のアムリツサアルに於て人民が何等武器を帶びず平和的集會を行つてゐた處、突然軍隊を會場に派し、無警告に一齊射擊を行ひ、逃げ迷ふものを追つて彈丸全部の發射を命じた結果、五百名の男女及び小兒が卽死し、千五百名が負傷するに至つたのである。斯の如き例は枚擧に遑ないが、今日猶逮捕、投獄、死刑は毎日の如く行はれ、一種の脅怖政治が全印度を掩つてゐるのである。斯かる英國の統治は如何なる效果を生じたか。

ウイルフレツド・スカウエン・ブラントに依れば英國の統治の效果は次の如くである。曰く「印度に於ける印度人、英國人のいふ所謂土人は常に脅かされ、やせ細つた不幸な奴隷である。余自身歷乎とした英國保守黨員であり、且つ倫敦カールトン倶樂部員であるが、印度に於て余の見聞せるところは余の心に大衝擊を與へ、英國の統治制度及び其將來に就き此上なき不

安を感ぜしむるに至つた。余は優れた先輩、政府官吏、或は各種委員會其他に依つて印度財政の秘密を研究しつゝあつたが、今日の狀態を以て進めば印度人が早晩人肉を食ふ時代を來すと言ふ結論に達した。蓋し印度人としてそれより他に食ふものがなくなるからである」

印度に於ける英國の統治が天人共に許すべからざるものたることはより以上に明かであるが英國の印度統治は同時にまた世界平和のため放棄し得ないものである。何故ならば英國の印度支配は亞細亞支配の上に最も有力なる作戰基地を有せしむるからである。卽ち英國が埃及、アラビア、イラク、ネパール、ブータン、西藏及び支那の一部を支配し得るは印度に有力なる兵力を存有するからであり、又事實過去に於て英國は是等の地方に印度より派兵し、是等亞細亞民族を壓制し、或は又得意の離間政策を用ひて擾亂を策して來たからである。故に英國にして印度より撤退する時は亞細亞は始めて和平を得ると言ふべく、是に反し英國の印度に於ける帝國主義が打倒せられぬ限り、亞細亞解放は未だしと言ふの他はないのである。

嘗て外國の支配下に立つたことのない國民は印度に於ける印度人が如何に地獄苦に等しき苦痛を味はつてゐるかを想像し得ないであらうが、被征服國では人間として活きる生甲斐を感じ

ないと言ふことを擧げれば稍々其實情を髣髴し得られるであらう。

斯て印度解放は印度人として最も切實な、已むに已まれぬ叫びであるが、それと同時に亞細亞解放の鍵たることは前述するところに依り明らかなることゝ信ずる。

五

然らば印度解放の具體策は如何、勿論印度には前述の如く日露戰爭以來澎湃として革命運動が勃發してゐる。それは或時は印度總督暗殺其他直接行動による革命運動となり、或時はガンヂー指導の下に非軍事不服從運動として展開せられ、今日では上流階級、中流階級は言ふまでもなく、農民より下層階級に至るまでのものが國民的獨立の達成に努めてゐる。

然し重慶が英國の勢力に支持せられてゐる時は印度として英國勢力の禍を如何にしても脫却し得ないであらう。故に重慶が英國の魔手に踊り抗日を續けることの愚を覺り、日本と提携し日支相共に英國勢力の驅逐を計ることが必要である。

最後に此亞細亞解放、卽ち亞細亞に於ける英米勢力の代表たる英帝國主義打倒のため指導的

役割を努める日本が最も重大なる責任を有すること前述の如くである。而して日本が此大使命を果すためには日本人が今日の世界的地位を自覺することが最も必要である。日本は御維新以來旭日の勢にあり、國家として將に青年期にある。大東亞戰果が示したる如く、今日日本の躍進を阻害することは何人もなし得ぬところであつて、是冒頭に述べた自然の法則から云つて當然である。

日本は遂に起つた、世界の指導者として。最早や英米人と雖も認めぬことは出來ない。從來日本は極東の舞臺にのみ蹈躇してゐたが、それは自ら其實力に氣づかなかつた如くであつた。然るに今日の日本は亞細亞復興世界新秩序建設を實現する千載一遇の機會に向つて邁進してゐる。日本は此見地より、歐洲に於ても物質主義の弊を悟り、高貴なる精神主義に目ざめ、亞細亞の盟邦となつた獨逸及び伊太利と提携し、世界的國家として亞細亞解放、英、米擊滅の鉾を持つて遂に起ち上つたのである。

印度を狙ふ共産主義

一

共産主義南下問題が大東亞戰、歐洲戰の進展に伴つて議論されるに至つた今日、余は忠實なる愛國心を捧げて眞劍に印度と共産主義問題を考へる一人である。惟ふに今日世界が直面せる共産主義の禍害は如何にして發生したか、勿論産業的に發達した國に於ては共産主義の生れる前から或種の社會主義が存在したが、共産主義の害毒程激しくなかつた。然るに今日の如く共産主義が世界に害毒を流すに至つた原因が何處にあるかを知る人は極めて少ないのである。

世界大戰中露西亞皇帝ニコラス二世は國内の形勢惡化に堪えず、内々敵國獨逸と媾和談判を始めた。然るに此の事を知つた英國政府は大いに狼狽し、極力露獨間の媾和談判を阻止しようとした。然し、露西亞としては戰爭を繼續すれば、結局内亂に直面しなければならぬので、英

國の反對に拘らず獨逸との媾和談判を進めたのである。

玆に於て老獪なる英國は、露西亞帝政の轉覆を企て、露都ペトログラード駐在英國大使に莫大な軍用金を送金した。駐露英大使は此の軍用金に依つて當時の露西亞有力者及び軍隊を買收し、帝政を轉覆させ、社會黨の巨頭ケレンスキーを首班とする政權を立てさせたのである。是が切掛となり、レニン、トロツキー等が露西亞の政權をとるに至つたのである。故に露西亞共產主義が成立したのは間接に英帝國主義のお蔭である。手段を選ばぬ英帝國主義の危險以て知るべし、是を破壞せぬ限り世界の平和を望み得ないのである。

二

其の後共產主義が世界に進出する機會を得たことに就ても、また英國は責任を持つのである。蓋し英國は最初こそ共產主義を斥けたが、元來英國人は奈翁の言へる如く商人 National shopkeepers であり金にさへなれば如何なることをもなしかねないのである。斯して英國は一方に於て蘇聯に莫大なる金を融通すると共に、他方英國商品を以て蘇聯市場を獨占せんとす

るに至つた。英國は數年前敵視した露西亞を親善國とし、玆に蘇聯は英國の間接的援助によつて世界に共產主義を傳播しつゝあるのである。

露西亞共產主義の始祖レニンは政權獲得以來世界共產化を目指し、金員は勿論、使節、或は印刷物を送り、世界に動亂を起すことを目的とした。然しそれは驕て失敗に歸し、亞細亞の共產化のみを目標とするに至つた。蘇聯が當時支那の孫逸仙を支持し、或は土耳古、波斯、アフガニスタン等を援助したのは斯かる理由によつたのである。然し是も亦成功しなかつた爲、再び歐洲及び亞細亞を共に宣傳の目標として進むに至り、其の結果として生れたのが今日の歐洲に於ける西班牙、東洋に於ける支那である。

印度の共產化はレニン在世中より蘇聯の重要なるプログラムであつた。其の目的は印度を民族的に獨立せしむるに非ず、思想的に蘇聯の配下に屬せしめんが爲、英國よりの分離を實現するに在つた。斯て印度の青年をモスコーの共產大學に送り、共產主義を傳授して是を印度に派し、また資金、印刷物、蘇聯指導者達を印度に送り、其の目的の達成に努めた。而して土耳古、波斯、アフガニスタンを援助した場合と同樣、表面上印度國民に同情を寄せ、印度民族運

動を支持するかの如く振舞つたが、眞の目的は印度を共産主義圏に導入せんとするに在つた。斯かる中に印度の政治運動の中心機關たる國民會議指導者にも共産主義の影響を蒙るものを生じ、現に間接的ながら共産主義を唱ふる有力者もある有樣である。

然しながら、共産主義運動が成功するか失敗するかの基準は、宗教心の有無に依存するのである。卽ち宗教心に富める國に於ては、決して共産主義成功の怖れはないのであつて、土耳古、波斯、アフガニスタン等に於て、結局共産主義が失敗に終つたのは、是等の國民に培はれたる宗教心の極めて鞏固なるものがあつたからである。

今日印度人は教育的には無學であり、政治的には壓迫されてはゐるが、宗教的に頗る豐富な心を持つてゐるのである。試みに印度の農夫に向つて政治思想を說けば、彼等は恐らくその意義を充分に理解し得ないであらうが、一度問題を宗教或は宇宙觀に轉ずれば、彼等の答は急に雄辯となるのであつて、是、彼等が代々口からロへと宗教問題の重要性を敎へ諭されてゐるが爲である。

三

抑々歐洲文明の基礎は個人主義、物質主義に置かるゝに對し、東洋文明の基礎は精神主義、家族主義に置かれてゐる。卽ち一方は自我の幸福をのみ追求するに對し、他方は自己を犧牲にして他の人の幸福を願ふものである。而して共産主義は自我の物質的利益のみを目標とするものであるから、宗教心に富む東洋に於て根を張る可能性はなく、宗教心に乏しき西洋に於てのみ普及の可能性あるものである。現に共産主義は西洋に於て盛んに唱へられ、また東洋に於ても是を奉ずるものは西歐文明に心醉せる人々、所謂西洋式教育を受けたるものに是を見るのであつて、東洋文明を重んずる東洋人の多數は寧ろ是を排擊せんとしてゐるのが現狀である。

印度に於て共産主義の影響を受くるのも亦歐洲文明に心醉せる印度人である。而して是等印度人が印度獨立より寧ろ印度共産化の爲努力し、蘇聯及び英國の共産主義者と提携せんとしてゐることは怪しむに足らぬ。

玆に興味あることは英國共産主義者の印度に對する態度であつて、彼等は印度共産主義者に

同情するのみならず、印度の獨立をも支持してゐるが、其の獨立の意味は民族的獨立に非ずして、言はゞ共產主義的獨立である。蓋し印度が民族的に獨立する時最も苦痛を受けるのは英國の社會主義者、共產主義者自身だからである。彼等は富裕でもなく、貯蓄もなく、勞働賃銀に依つて生活してゐるものである。而して印度が民族的に獨立すれば、英國の工場は自然に閉鎖せざるを得なくなるが、其の結果は英國の資本家よりも寧ろ共產主義者、勞働者が最も打擊を受けるのである。勿論資本家も困却するには違ひないが、貯蓄に依つて生活することを得、また軈て其の資本を外國に投資することが出來る。然るに其の他のものは生活そのものを脅かされるに至るのである。故に英國共產主義者の言ふ印度獨立とはイデオロギー的、寧ろ英國共產主義下の印度共產主義國の實現にある。此の問題は英帝國主義の問題と一心同體に重大なる意義を有するものであつて、印度に於ける英帝國主義と共に共產主義の問題に就き其の禍根にメスを加へねば、亞細亞の和平を期待し得ないのである。

印度の國民的指導者サバルカル

一

一九三七年六月二十五日の事である。其日V・Dサバルカルは長年の禁錮生活から自由の身となることが出來たのである。彼の釋放のニュースが一度傳へられると彼の無條件釋放を悅ぶ數百の電報と書信が彼の許に寄せられて來た。悅びの辭を寄せた人の中には現代印度の有力な指導者も少からずゐた。それらの慶祝のメッセーヂにはサバルカルの指導者としての地位、彼の性格が述べられ、彼が今日の各政派のそれ〴〵の先輩である旨が述べられてゐた。

例へば新憲法に於ける三聯邦判事の一員たるジヤカルはサバルカルに就て次の如く述べてゐる。「サバルカルを稱讃することは犧牲の精神と愛國心を稱讃する事である。加之サバルカルは忍耐、勇氣の權化ともいふべき人物である」

現マドラス州內閣首相ラヂヤゴパラチヤリヤは國民會議內に於ける長老政治家であるが、彼はサバルカルに就て次の如く述べてゐる。

「サバルカルの嘗ての活動力、其組織力は余の今日と雖も忘却し得ざるところである。……彼が嘗て船にて英國より印度に護送せられる途中、マルセイユ附近の海中に飛び込んで逃亡を企てたる事は今猶眼前の光景たる如き感がする。當時フランスが國際法に違反し、彼を英國側に引渡した事など次から次へと思ひ出されるのである。彼の最近の意見、演說はサバルカルと同一の經驗を持つて來たもののみが是を評し得るであらう。余の見るところに依れば彼は常に獨立の炬火を燃さんとして苦鬪して來た人である。彼は英雄主義、勇氣、冒險、愛國主義の權化と言ふべきである」

次に前國民會議々長シュバース・ボースは彼に就て何と言つてゐるか。

「サバルカルが自由の身となつた事を何より悅ぶものである。彼の將來は光輝に充ちてゐる。余は彼が國民會議に參加し、獨立運動を强化せんことを希望して已まぬものである」

また印度に於ける共產主義系の革命主義者たるM・Nロイは言ふ。

「サバルカルは二十世紀初頭印度獨立運動のため生命を賭した僅かな志士の中の一人である。余は彼と政治的見解を異にするものであるが、彼の犧牲的精神と勇氣を尊敬せざるを得ない」

最後に中央立法議會員M・Sアネイの言を聞かう。彼は次の如く述べてゐるのである。

「彼サバルカルの釋放に依り印度有識層はサバルカルの文化的獨立の思想と印度に於ける既存の三個の政治思想を調節すべき局面に達した。右三個の政治思想とは絕對愛及非暴力主義に基くガンヂー派國民主義、社會主義的色彩あるネール派の國民主義、ロイ一派の革命的社會主義のことである。斯て以上四つの思想が統合せられて生み出さるゝものは印度の國民的獨立達成の上に確定的役割を演ずるものと考へられるのである」

以上有力者のサバルカル觀を綜合するに、サバルカルは「英雄主義、勇氣、冒險、愛國心の權化」であり「彼を稱讚することは犧牲精神を稱讚すること」であり、彼こそは「常に印度獨立の炬火を燃しつゞけた人であり、二十世紀初頭に於て、印度獨立の爲生命を賭した志士であり、現在は文化的獨立の理論を樹立主張してゐる人」である。

然し以上は勿論サバルカルの人となりのほんの一面を示すものに過ぎない。故に以下彼の人

となりの大略を記述することゝする。

二

彼は一八八三年マーラストラのナンクに於て孤々の聲をあげた、一九〇一年入學試驗を受けプーナのフーガソン大學に進み、一九〇五年同大學に於てB・Aの學位を獲得した。然るに此年は印度近代史に於て多端なる年であつた。英國に對する不滿反感は既に拔き難きものとなつてゐたが、宛かも斯かる感情を一層激發するかの如くカーゾン卿のベンゴール分割案が提唱せられ、是がため國內の穩和的分子迄が反英運動に投ずるに至つた。反英運動はベンゴールからマーラストラ、パンジャブへと擴大したが當時の國民會議は此運動も大いに支持するところがあつた。然し國內の青年層は單なる立憲主義的反英運動には慊らぬものがあつた。愛國の熱火は青年の胸を燃し、彼等は筆に口に革命思想を鼓吹した。斯て政府は漸く彈壓の擧に出づるに至つたが、それが爲武力革命の思想は愈々刺戟せらるゝに至つた。我々は大學時代のサバルカルの背景に斯かる時の勢力のあつた事を先づ認識する必要がある。

彼はナシクの高等學校生時代から既にソサイティ・オブ・フレンドと呼ぶ青年の結社を組織してゐたが、此協會の目的は各國就中伊太利及びアイルランドに於ける革命運動の研究、モルグ人の侵入に對する印度人の鬪爭の研究、革命的文獻の普及等を目的としたものであつた。サバルカルは幼時より作詩に對する才能を有してゐたが、彼は此才能を驅使し歷史的材料を扱つた幾多の詩をものしてゐた。斯かる詩は忽ち發禁となり、現在も禁止せられてゐるが、それは青年を武力革命運動に奔らせるからであるとせられてゐる。斯の如く高等學校時代から有名であつたサバルカルが、大學入學後間もなく大學に於ける政治運動の中心人物となつた事は當然であつた。勢ひ彼は校長より政治運動を中止せぬ限り放逐さるべしといふ脅威を常に受けて來たのであつた。然しサバルカルは斯かる警告には一顧だに與へなかつた。玆に一言しておく要ある事は校長がサバルカルの活動に就て左の如く述べた事である。曰く「彼の辯舌は凡常ではない、まるで火の如きものである」是によつてもサバルカルが既に若冠にしておそるべき雄辯家であつた事を窺ひ得るのである。加之彼は學校に通ひつゝタルワル（劍）といふ雜誌を發行し此方面よりの宣傳にも乘り出したのであつた。また彼は伊太利の革命家ヂウセツプ・マツチニ

の傳記を書いたが、それは非常にオリヂナリティに富んだものであつた。其本の半分は緒言に依つて埋められてゐるが、其處には彼の武力革命に對する確信が充分に窺へるのである。勿論此本は直ちに發禁になり、今日も依然禁止せられてゐるが、マーラストラの青年は原稿を手に入れてコピイをとり、次から次へと回讀して行つたのである。

サバルカルはまた大學在學中西部印度に於ける英國製綿布燒却運動の口火を切つたものであつた。

三

斯かるサバルカルの活動は、有望なる青年との接觸に常に深い關心を持つてゐたチラークの注意を引くに至つた。近代印度國民運動の父チラークは青年の急進的愛國思想を此上なく愛してゐたのである。チラークは一八九七年チヤペカル兄弟がランド及びイエルスト兩名を暗殺した廉で處刑さるゝや、右兄弟の遺族に財政的援助を與へてゐたといはれる。因みに此チヤペカル事件はサバルカルの生涯に深刻なる影響を與へたものであるから玆に事件の概要を誌しおく

ことは必ずしも徒爾に非ざることゝ信ずる。

事件勃發の頃はプーナ地方にペストの猖獗を極めた頃であつた。政府は人民に豫防手段を講ぜしむる事としたが、其政府の態度は不遜を極めたものであつた。政治運動發展の機をかねてから窺つてゐたチラークは其機關新聞を通じ、政府が人民の宗教に對する心情を無視してゐることを激しく攻擊するに至つた。是に刺戟せられたプーナの青年は防疫官の暗殺を企てるに至つたが、此計劃の中堅分子であつたチヤペカル兄弟は一夜物寂しき箇所に防疫官を待ち伏せ是を暗殺し、其際一緒に歩いてゐた英人をも殺害したのである。當夜チヤペカル兄弟は今一人の同志と事を共にしたのであるが、右三名は決行後姿をくらまし、暫らくの間は發見されなかつたのであつた。然るに警察側は犯人一名に就き六千ルピーの懸賞をかけ其潜伏箇所をつきとめんとした。其中嘗ての同志二名が三名の潜伏箇所を密告したため、三名は一人宛逐次逮捕せられ三名共絞首臺の露と消えたが、其際三名のものは懷中にギタ聖典を所持してゐたといはれる。

斯てチヤペカル事件はマーラストラの各家庭々々に於ける語り草となり、沈着と勇敢の典型として今日も尊崇の念を以て回想せられてゐる。また此話はサバルカルの生涯に深い影響をも

たらしたのである。

チヤペカル兄弟には今一人の弟が居り當時十六歳であつたが、彼は二人の兄の處刑の話を聞くと齒をくひしばり、「裏切者には金も生命も持たしておかない」と叫んだ。果然チヤペカル兄弟處刑後一ケ月にして二人の兄の仇は討ちとられたのである。或夕刻裏切りを行つた嘗てのチヤペカルの盟友である二人の兄弟は其自宅附近に於て死骸となつて横はつてゐたのである。然し若きチヤペカルは悪びれもせず直ちに警察に自首して出たが彼も亦處刑されて兄の後を追つたのであつた。一方チラークは文書に依り殺人を使嗾した廉を以て逮捕せられ三年の投獄に處せられたのであつた。

四

却説前述の如くチラークはサバルカルの將來を大に有望視し、彼に英國留學を進め、彼の英國行に關しては援助する旨を申傳へたのであつた。サバルカルは長兄及び學友と相談の上チラークの提案を受諾したのでチラークは在倫敦のシヤムジ・クリシンナバルマに通信し、サバル

カルに奬勵金を與へしむることゝしたのである。かくて一九〇六年サバルカルは法律研究のため英國へ渡る事になり、留守中の政治運動を長兄に托することゝしたのである。

倫敦に於てもサバルカルは其熱心と才能でクリシナバルマをいたく感心せしめた。然しサバルカルは倫敦滞在中勉學の傍青年印度協會を組織し、在印英人學生の間に革命思想を宣傳し他方つとめてロシヤ及びアイルランド革命家との接觸を計つたのであつた。そして是等革命家の助力に依り多數の拳銃を印度へ密輸することに成功したのである。

斯て一九〇六年より一九〇八年迄の間外觀は大きな辭書の形で多數の拳銃が印度へ到着したのである。彼は是等の武器を以て、マーラストラ五區の英人徴税吏十五名を一齊に暗殺せしめる計劃であつたのである。然るに熱氣の餘り彼の部下は指定の日の前にナシクの徴税官を射殺したため計劃は齟齬するに至つた。卽ち直ちに射擊決行の少年の逮捕を始め大量檢擧が行はれサバルカルの長兄も逮捕せらるゝに至つた。そして右少年は絞殺に處せられ、サバルカルの長兄はアンダマンに流刑に處せらるゝに至つた。またチラークも捕へられてビルマの獄に六年間繫がれる事となつた。

是等の事柄は一九〇八年に起つたのであるが、是より先一九〇六年にはミントー總督がアーメダバードに於て襲撃せらるゝ事件が起つたため政府はサバルカルの弟が本事件に關係ありとして逮捕し是を九ケ月の懲役に處するに至つた。是等のニュースを受けとつたサバルカルは最早じつとして居れず倫敦印度會館に於ける演說に於て必ず復讐すべきところある旨を述べた。數日にして青年印度協會のヂングラなるものが突如會員たることを辭するに至つたが、其後數日にして青年印度協會に對する政府のスパイと見られてゐたウイリー大佐が倫敦の繁華街に於て射殺せられ、其下手人ヂングラは直ちに警察に自首して出たのであつた。

五

其中穩和派の印度人がヂングラ糾彈の會合を開く事となつたが是には英國人數名も出席し議長バオナガル卿はヂングラの行爲を批難する決議文を讀み上げた。すると一隅から「異議あり」といふ聲が鋭く叫ばれたが發言者は他でもないサバルカルであつた。彼は判決決定以前にヂングラを批難するは奇怪であると述べた。其瞬間誰かゞサバルカルの顏面を毆りつけたが、同時

に毆つた男はサバルカルの同僚からラティイ棒の痛擊を受けた。之を見た參會者はサバルカルの一黨がピストルと爆彈を持ち込んだものと早合點し滿場騷然となり、會は滅茶苦茶に終つた。

やがてサバルカルは病氣の爲フランスに向つたが、一方ヂングラは審理の結果處刑された。其中サバルカルに對しても逮捕命令が發せられ且つ辯護士の資格も剝奪せられた。サバルカルは病も癒えた爲、ロンドンに歸還せんとしたがハルダヤルは頻りにロンドン行中止を勸告した。然しサバルカルは之を肯かずロンドンに赴いた爲、彼は到着と同時に一隊の武裝警官にとりまかれ投獄せらるること丶なつた。英國に在獄中の期間は短かつたとはいへ、此間愛蘭の革命家が彼を救ひ出さんとした計劃は遂に失敗に終つた。

彼は投獄せらるゝ前英國博物館に熱心に通つて彼の著書の材料を蒐集した。彼の著書といふのは二冊より成り、其一つは「一八五七年印度獨立戰爭」今一つは「シック教史」であつた。而して前者は出版後間もなく發禁となり、後者は出版差止となつたものである。バレンチン・チロルは前者を讀む機會を得た時、其內容にいたく感動し、サバルカルは立派な革命の指導者であると述べたといはれる。

一九一〇年英國政府はサバルカルを印度に送還し、彼地に於て審理を遂げしむることゝした。然しフランスを通過せしむることは、フランスに印度革命黨員が多數居住することに鑑み英國より海路彼を送還することゝ決定した。然かも尙サバルカルは汽船がマルセイユに近付くや海中に身を躍らし、フランス陸岸に向けて泳ぎつかうとした。船からは直ちに射擊が開始されたが幸に彈丸は彼に命中しなかつた。彼は陸地につくと直ちに最寄の交番に出頭し、自己が政治的亡命者なることを述べフランス官憲の保護を求めた。然し彼を追求し來つた英國官憲はフランス側を說き伏せ、サバルカルは再び英國官憲護送の身となつた。

斯て彼はボンベイに送られ審理を受けることゝなつた。其間彼が汽船より脫走を計り再び英國官憲に捕はるゝに至つた事を聞き知つたパリに於ける彼の友人達は英國官憲の行爲に就きヘーグの國際裁判所に訴ふるところがあつたが此事はサバルカルの許にも傳へらるゝに至つた。軈て彼はボンベイ高等法院に對し、ヘーグに於ける判決が決定する迄はボンベイに於ける審理續行に反對なる旨聲明したが彼はヘーグ裁判所に於てフランスが英國官憲の行爲に抗議することを期待したからであつた。然し英國側は十萬磅を支出し、フランス側の抗議を封じた爲

彼の期待は水泡に歸し、玆にサバルカルは一九一一年アンダマン島に終身追放の刑を宣告せられた。

六

其後十三年を經過してから彼はアンダマン獄を出で印度に歸つて來たが健康をいたく害してゐた。彼は肺を冒されてゐたのである。然し彼の自由を制限しておくことを必要と考へ、今後政治運動に携はざることを誓約せしめ、且つボンベイの南方にあるラトナギリの片田舍に禁錮した。サバルカルは更に十三年此地に事實上の禁錮生活を送つたのである。

然し元來が活動的な彼である。かの永い期間を決して無爲に過しはしなかつた。彼は文學、社會改良の問題、歷史研究等に携はり、それらの中に彼獨自の國民主義の焰を燃さしめてゐた。或人はサバルカルを評し、「彼は如何なる仕事の部門に於ても彼の活動的精神の痕跡を殘す」と言つてゐるが、是等の三つの分野に於ける彼の業績に就て其儘適用し得る許である。卽ち彼は文學の分野に於ては言語の純粹化を志し印度語の中から凡ゆる外來語—英語、アラビヤ

語、ペルシヤ語を除かんとした。斯て彼はデバナガリ典籍の純粋を計る運動の事實上の主唱者となつたわけであつた。一九三七年彼が禁錮を解かれた後ボンベイに於けるマーラストラ語會議々長に推さるゝや、次の如き演說を行つてゐる。

「諸君が閑暇を利用してタキシラの遺趾を訪ねんことを余は希望して已まない。若し其處に行けば嘗て立派な大學が外敵の爲數ケ月も燃えつづけてゐたことを知るであらう。今日其地が單なる遺趾に止つてゐる所以のものは、文學者、詩人、哲學者、思想家が少いが爲ではない。今日の如き運命に陷つた所以は實に是を防ぎ止める勇敢なる軍人が居なかつた事に基く。諸君は此地を訪ねられることに依り、藝術は劍の保護に依り始めて生きるといふ教訓を得られるであらう。同時に死を怖れぬ軍人は國家に於て單なる文人以上のものであることを知るであらう。故に諸君が我國に於て文學を保護し是を隆盛ならしめんと欲せばよろしくペンを捨て敢然銃を執るべきである」文化的會議々長の演說としては洵に奇異な言葉であるが、其處にはサバルカルの眞面目が躍如としてゐる。

七

次に社會改良の方面に於て彼の志したところは、カースト制及不可觸賤民の廢止である。而して彼はラトナガリに禁錮同樣の生活を送つた十三年間に同地方の不可觸賤民の差別を撤廢するに成功したと言ふ事である。是が爲彼が全然自由となり各地に於て祝賀會が開催せらるゝや舊式印度教徒の若干は是をボイコットしたといふ事である。

次に彼の歷史に對する研究の重點は印度人の文化的獨立鬪爭におかれてゐた。英國の印度侵入二三百年前迄印度人は文化的獨立と政治的獨立を同時に考へてゐた。然るに英國の統治になつてから政治的獨立を以て文化的獨立より重しとするに至り、文化的獨立の基礎も民主々義と自由主義でなければならぬとする風潮を生じた。彼は此傾向を防止する爲二つの書物を著したが、それは幸にして何れも官憲の壓迫より免れることが出來た。その一つは一九二六年出版のヒンドトバであり、他は一九二七年のヒンド・パダ・パダシアヒである。最初の著書に於ける論點は印度の民族的文化的國民主義の解明にある。彼の言葉を引用すれば次の如くである。

「印度教徒を印度に於ける一つの社會とすることは不條理である。獨逸に於ては獨逸人が國民であつて、猶太人は獨逸内の一社會である。トルコに於てはトルコ人が國民でアルメニヤ人やスラブ人はトルコ内に於ける社會である、同樣に印度國に於ては印度教徒が國民であり、回教徒其他は印度國内に於ける特殊社會である」彼が印度教徒といふのは「印度洋及インダス河の間の地域を聖なる祖國とする印度教徒を言ふのである」

八

禁錮中のサバルカルは政治方面に於ても全然無爲には過さなかつた。彼の長兄は彼と同じ頃アンダマン島から印度に送り歸されたが兄の方は運動方面の制限を受けてゐなかつたので彼は此兄を通じマハ・サバの政治運動に絶えず連絡を執つてゐたのである。加之彼はベンゴール州ユー・ピー州、パンヂャブ州の革命黨と連絡を執つてゐたのである。また彼はボンベイに於て弟が主宰してゐる週刊紙に對し幽閉の地點から何彼と指導を怠らなかつた。同紙に現はれる論文の調子、言葉使ひ、思想は全くサバルカル自らのものであつて、マーラストラの青年は同紙

を通じてサバルカルと精神的連絡を保つことが出來たのであつた。

彼が幽閉生活中斯の如く政治活動を行つてゐたことは幽閉解けて後彼が印度の政界に重要なる地歩を獲得する上に役立つた。多數の人は彼が獨立運動に力强き且つ新鮮なる指導者として加はることを豫想してゐたが、然し一般大衆は政府が彼を全く自由とすることはあるまいと考へてゐる。

然るに思ひがけなくも一九三七年國民會議の州内閣が出現することゝなり、同内閣は直ちにサバルカルの行動に關する制限を撤去したのである。聽て國民會議は彼を引き入れることを欲し、スバシュ・ボース議長自ら彼の國民會議入を希望するメッセージを發表した。またマーラストラの人々はサバルカルが國民會議の幹部に反感を有することを知りつゝも結局彼が國民會議に加はるものと豫想した。然るにサバルカルは國民會議に加入せず、ヒンドウ・マハサバに加入したが此事は各方面の批難を惹起した。國民會議側は「サバルカル自らその將來を葬つたものである。反動主義者は彼を先鋒とすることが出來るから雀躍してゐるであらう」と述べたが、是に對しサバルカル支持者は次の如く述べた。

「サバルカルが國民會議に入らなかつた事は彼の英雄的素質を示すものである。彼が國民會議に入れば州委員會の議長となり、やがて全印國民會議の議長となる事は確かである。然し彼は國民會議幹部の意見に反對なるが故に敢て是に加入しなかつたのである」

マハ・サバ側の悦びは言ふ迄もなかつた。同團體の長老であるムーンジ、バイ・パルマナンド兩氏はサバルカルの加入に依りマハ・サバは新活力を獲得せんと述べた。一方彼は椽の下の力持の役割をさせられるのみだと言ふものもあつたが其實彼は其赴くところ何處に於ても大歡迎を受けた。

九

彼の意見と國民會議の意見が如何に異つてゐるかは、彼が自由の身となつてまもなくボンベイに於て試みた次の演說を讀めば明らかである。

「好むと好まざるに拘らず武力は國民にとつて不可缺である。國民は武力を强うすることによつてのみ尊敬せられる。絕對平和及絕對眞理は存在し能はざるものである。武器携提禁止法は

一刻も早く撤廢せしめなければならぬ。同法廢止が今日の叫びでなければならぬ。……我國今後の運命は國際政治の急變を如何に巧みに利用するかにかゝるところ最も大である。獨立の獲得が凡ゆるイデオロギー問題より先である。先づ獨立し强力となることである。日本が支那を討つてゐることは正當であるかも知れず、或は不正であるかも知れない。然し我々が支那やエチオピヤに同情して何になるか、世界は自國を大切にすることが第一であるといふ仕組になつてゐる。外國の援助を期待しようとするのは生きる權利を自ら放擲するものである」

また彼は非暴力主義に就き他の場所で次の如く述べてゐる。

「虎と群烏が對した場合烏の消極的抵抗を以てしても虎に敗けるに決つてゐる。烏の場合は積極的抵抗を試みても何にもならない。抵抗、不抵抗でなく、力が鬪を決するのである。力强い虎となるかおとなしい烏になるかは將來の印度青年の上に課された題目である」

最近にはブーナに於て三萬の聽衆に對し、印度の外交政策に就き次の樣に闡明してゐる。

「ヒトラーは獨逸に何が最も適するかに就きネールより以上に知つてゐることは言ふ迄もない。獨逸がナチズム、伊太利がファシズムに依つて嘗てなき隆興を示したのは是等の主義が獨

伊に最も適してゐた何よりの證據である。印度も其政治的必要に應ずる政府をつくるべきである。故にネールが印度國民を代表する如き口吻にて獨伊を批難するのはあたらない。

日獨伊國民は我がヒンドウ・マハサバがネール其他國民會議一部分子と異り、日獨伊に何等惡感を有するものに非ざることを承知せられたい。

獨逸が墺太利の合邦を行ひ、またズデーテンを併せたることに就て我がマハサバは是を正當と認むるものである。獨逸は人民投票を要求したのであつて、英國が獨逸はデモクラシーを脅威すると言へる如きは見えすいた虚構である。

若し英國にして眞にデモクラシーの脅威を叫ぶならば、先づ以て印度より英兵を撤兵し、印度人に民主的國家を創造するの自由を與ふべきである。

嘗て獨逸が敗戰せる時英國は獨逸を分割したのである。而して今日獨逸が其力を回復するに至り、嘗ての失へる地を糾合せんとしつゝあるは當然の事である。

ヒンドウ・マハサバは印度の獨立運動を援助し、または是に好意を寄するものに對しては友好的であらうが、獨立運動を阻止せんとするものは敵國と見なすであらう。また印度に對し中

立的なる國に對しては印度もまた中立的であるのみである。而して印度の英國に對する態度も此標準に依つて決せらるべきである」

以上の如く彼の見解は國民會議と正反對である。彼はマハ・サバに加入すると間もなく、同團體の一九三七—三八年度議長に押された。而してマハ・サバは彼の議長の下に於て先づ印度の完全獨立達成の方針を決議した。彼は其の際次の如く述べた。

「諸君にして自信をさへ失ふ事がなければ過去に於て失へるものもやがてとりかへす事が出來るであらう。諸君の中には世界に類のない傳統的な力が潜んでゐる。諸君の歴史は紀元前二千年の古きに溯つてゐる。激しき生存競爭場裡に於て適者のみが生存して來たのである。古代インカ、フアラオ、ネブカドネザルは既に歴史上の民族となつたが、諸君は適者として現代に迄生存し得た國民である。すべて國民には浮沈がある。今日大帝國を支配する英國も嘗てはローマ人、デーン人、オランダ人、ノルマン人に攻略せられたものである。我等も亦屢々大なる國民的苦盃を嘗めたものであるが其都度我等は起ち上り狂瀾を既倒に返した。アレキサンダー大帝は世界を征服せんとしたが印度を征服することは出來なかつた。卽ちチヤンドラグプタは起

つてギリシヤ人を追ひ軍事的文化的に彼等を敗退せしめた。其後三世紀にしてフンの來寇があり、歐洲全體と亞細亞の半が其の鐵蹄の下におかれた。彼等はローマ帝國を粉碎した。然し我等の祖先は彼等と二世紀に亙り生死の爭鬪を演じ、遂にビクラマデイタに至つて彼等を敗退せしめた。スキチヤ人に對してもサクバハン、ヤショダルマンが是を擊破した。今日フン族、パルチア族、スキチヤ族は如何なつてゐるか、其名すら殆んど忘れられてゐる。然も我民族は今日の世界に其活力を保持し來つてゐる。

其後回教徒の侵入があり、回教王朝は絕對的のものに見えた。然しシバジが生れて以來戰運我に利し、我等は幾百回となく回教軍を破つた。回教王朝の君主は我等の戰士に屈し遂に印度教徒軍司令官パウはデイリーに於てモグール王朝の最後の止めを刺し、印度教徒の覇權が再び打ち樹てられることゝなつた。

然し我等は蒙古人、トルコ人と數世紀に亙り爭鬪し、是を擊滅する前に英國人が侵入し我等の虛に乘じて勝を制した。然も我等は彼等の勝利を彼此言ふものではない。蓋し我等は昨日の戰に破れたりと雖も今日充分の戰鬪力を有してゐる。また我等は此戰鬪を放擲したものでもな

いからである。

將來マハ・サバの議長にして此演壇に立ち、此國に於ける英國の統治をギリシヤ、フン、スキチヤ族の場合の如く過去のものとして演說することがないと誰が言ひ得よう。卽ちヒンドウ國の旗がヒマラヤ高く飜り、ヒンドウ國は獨立せりと」

十

彼の指導の下にマハ・サバが强力化した事は當然である。サバルカルは大會終了後國內行脚に出かけ、シー・ピー、グヂュラート、ユー・ピー、シンド、パンジヤブ各地を巡遊し、到るところに於て大歡迎を受けた。講演、新聞記者との會見、他黨指導者との意見交換等で多忙を極めたが、その中最も注目すべきは國民會議々長スバシユ・ボース、國民會議社會黨領袖ナレンドラ・デオ、舊革命黨領袖サチンドラナート・サンヤル等との會見であつた。ナレンドラ・デオがサバルカルに對し「反動的マハ・サバと如何にして獨立問題に就き意見を調和せしめ得るか」と尋ねたところ、彼はマハ・サバに新しき空氣を吹き込むのだと答へた。

彼は冊子を發行し、ステートメントを發しまた批難に答へ或は是を反駁する。斯て彼の議長就任と共にマハ・サバは俄然活氣を呈して來た。次いで彼は一九三八—三九年の議長に滿場一致再選せられた。其時の大會には二萬五千といふ未曾有の會員が參集した。サバルカルの此大會に於ける演說には左の如き言葉がある。

「我等の背後には涕泣の聲が聞える。我等は齒を喰ひしばり戰に赴かう、而して勝利を收めたる時笑を交さう」

是に對し感動した青年の一群は其場でマハ・サバ運動の爲獻身することを誓ふ爲血判を押し多額の金錢はマハ・サバの爲に據出せられ、會の空氣は戰鬪的氣分に充滿してゐたのであつた。

以下サバルカルの當時の演說から重要なる點を引用して見よう。

「マハ・サバ黨員なることは決して利益ではない。マハ・サバ大會に出席することは權力を持つものの怒を招き、非印度敎徒の暗殺の刄を蒙らぬとも限らない。……

歷史の示すところに依れば我等の祖先は過去少くも五千年間我等を宗敎的、民族的、文化的

政治的單一國民たらしむることに努めて來た。斯かる有機的成長の結果としてベダ時代のシンドウ Sindhus が今日のヒンドウ國民となり、全印に擴り、印度を聖なる祖國としてゐるのである。印度國民程古くから其成長を繼續してゐるものはない。印度國民は此國の土から生れ、深く其處に根を張つてゐる。それは回敎徒其他を苦める爲にわざとつくられたものではない。それは北境にそびゆるヒマラヤと同樣嚴として動かすべからざる事實である。

然り、我等印度敎徒は國民である。宗敎的、民族的、文化的、歷史的紐帶は我等を單一の國民たらしめてゐる。加之我等の住む土地印度は我等民族の國である」

サバルカルの意見に贊同すると否とは兎も角彼の政治的活力、彼の印度解放運動に於ける地歩は動かし難いものである。

辿り來し道

一九一二年事件

一九一二年十二月二十五日のことである。印度の新首府デリーの市街は、今日しも正式に入都せんとする印度總督ハーディング卿を迎ふるための市民の群を以て混雜を極めてゐた。街を南北に貫く大通りの兩側は市民の垣を作り、その前には多數の警官が警戒ぶり物々しく立ち並んでゐた。

やがて行列の一行は肅々と街路を練つて來た。先頭に立つたのは案内の役人達を乘せた象、次が警固の騎兵隊を乘せた象、三番目が總督とその從者達を乘せた象であつた。この行列が丁度總督府に至る中程まで來た時のことである。突然異樣な音がして、總督の乘つた象の背中の邊にあたり、ぱつとばかり閃光があがつた。その瞬間總督及び二三の從者が倒れた。

あまりの突發事件に、市民は何事の起つたかを知らず、暫くは啞然としてゐるばかりであつた。しかし警官は急に騷ぎだして、右往左往狼狽した。總督を助け下す者と、犯人を捕へんとする者。觀衆も漸くその事件の内容を悟つて一時に崩れだした。警官の罵り騷ぐ聲が一きは鋭く響いた。

捜索網が直ちに全市にわたつて張られたことは云ふまでもない。そして警官達は血眼になつて犯人を捕へんとした。しかし犯人は天に向つて逃げ去つたか、それとも地に潜つて逃れたか遂に捕えることが出來なかつた。そればかりか、如何にして爆彈がハーディング卿を傷つけたか（卿は重傷を負ひ、從者數名は卽死したのであつた）そのよつて起るところを突とめることすらできなかつた。或者は觀衆の中から爆彈を投げたのだと云ひ、或者は總督の椅子の下に爆彈が仕掛けてあつたのだと云ひ、今日に至るまでその犯行の何人に依つて、如何にして行はれたか明かでないのである。しかし革命の徒によつて計畫されたことである點だけは疑ふ余地もなく、政府は其の後一箇年余に亘つて嚴重な捜査を續けた。

其の日の私

さて爆彈事件の起つた丁度其の時のことであつた。雪崩をうつて四方に崩れ行く群集の中に交つて、一人の青年を連れた大柄の男があつた。總督の遭難所より少し離れた所まで來ると青年を顧みながら

「落着いてをれ。慌てゝはいけないぞ」

と注意したが、ふと青年の膝のあたりに異臭を發する粉末を見つけると、徐ろに懷中からナイフを取り出し、青年の着物の端を切りすてゝ、又悠々と停車場の方へむかつて歩を移した。

街には行く先き〳〵に警官が眼を光らせてゐた。青年は胡散な男のそばに寄りそつて

「先生、大丈夫でせうか？　あんなに嚴重に見張りをしてゐますが」

とさゝやいた。

「大丈夫だ、きよろ〳〵脇を見ないで、平氣な顏をしてついておいで。おど〳〵すると却つていけない」

例の男はこうたしなめておいて、懷中から卷煙草を出すと、それを一本口にくはへ、大膽にも群集と警官で混雜してゐる停車場の中へ、しかもわざと警官の鼻さきを通つて入つて行つた、そして列車に乘り込み、何處ともなく去つて行つた。

この胡散な男こそ、私が今から顧みるその日の私自身なのであつた。思へば今昔の感無量なるものあり、烏滸がましいやうではあるが、印度民族運動の重點にも觸れるのであるから、この際詳しく述べたいと思ふ。

印度革命運動の發生

先づ印度革命運動の發生と私自身の經歷に就て一言することを許されたい。

そもそも印度の革命運動は何時頃に端を發したかといふに、一九〇五年に印度總督のカーゾン卿がベンゴール州を二分する計を立てた時にある。由來ベンゴール州は印度國民の知識が一般に發達し、從つて國民運動に狂奔する者が多かつたことから、カーゾン卿は同州を二分することに依つて交通不便ならしめ、彼等の運動の勢を矯めようとしたのである。ベンゴール州民

がこれに反對したことはいふまでもないが、カーゾン卿はその反對を押し切つてまで斷行した。そこで州民の反抗は益々猛烈になり、その反對運動はやがてベンゴール一州のみに止らず、全印度にまで擴大し、その目的も亦印度の獨立と云ふ方面へ轉向して行つた。

こゝに於て政府の彈壓と印度國民の反抗とが漸層的に激成され、その結果、印度國民は政府のこの彈壓政策に對しては武力に訴へるより他に策がないと云ふことを知り、秘密結社を作つて兵器彈藥をあつめ、全國革命を起す計畫を立てた。

この運動に携はつたものの大部分は智識階級の青年學生等で、政府の彈壓が激しくなればなるにつれてその數を增し、また直接行動を續出せしめたが、一九〇五年から一九一五年に至る十箇年間に官吏の襲擊暗殺された數は頗る多く、またその爲に死刑或は終身黥役に處せられた青年も多數に上つた。

私の如きも實にこれ等青年の一人で、恰度十五歳の時分には既に革命的な志を抱いてゐた。一八五七年の印度軍隊反亂に關する小說物語等は非常に私の心を刺戟し、印度の革命を實現させる爲には印度の軍隊と聯絡をとり、これが力を借りなければならぬとの確信を抱くに至り學

業を抛擲して軍籍に身を投ずることを企てたこと再三であつた。しかしその都度失敗に歸し最後に森林局の書記に雇はれたのであるが、幸運にも四五年にして營林署長の位置にまで昇進することが出來た。

印度革命運動はこの間に著しい進展をなしたので、表には忠實な英國官吏を裝ひながら裏には暇ある毎に全印度を歩き廻つて、密かに運動を續けたものであつた。ハーディング卿の爆彈事件も實にこの間に起つたのである。

一九一三年始め、負傷せるハーディング卿は私の任地であるデラドウンに來て靜養した。私は卿のために一夕歡迎の宴を催し、一場の演說をなしたが、最後に卿のために敬意を表すことを提議して滿場の贊成を得た。これに對し卿の感謝したことはいふまでもないが、一人の高等警視の如きは幾度となく私の許を訪れて、何彼と革命家搜索に關する內容を打あけ、書類を示し、萬一の場合の援助を依賴したりなどしたものである。

同志家宅搜索から發覺

越て一九一四年の二月、デリーに居る同志の一人である中學校教師のアボット・ビハリが突如として家宅捜索を受けた。そしてその押收品のうちにあつたのが、私の鞄である。私は前の年の夏に九箇月の休暇をとり、全印度に亘つて革命運動の旅をなしつゝあつたが、その途次デリーなるアボット・ビハリの家に立寄つて鞄を托して去り、その當時はラホール市の大學校長の息子バルラージを訪れて、その附近に下宿してゐたのである。

英國官憲はアボット・ビハリの家宅捜索によつて私の鞄を發見し、初めて私が革命運動に深い關係を持つものであることを知り愕然としたのであるが、運悪くも家宅捜索の矢先きに、ラホールの同志デイノ・ナツドよりの書信がアボット・ビハリの許に屆いた。無論アボット・ビハリの手に入る前に官憲に依つて開封され、私がラホール市に居ることが判明したのである。

或る朝デイノ・ナツドが私を訪れ、正午頃までゐて歸つたが、間もなく同志の一人が慌だしく驅け込んで來て、デイノ・ナツドの家が家宅捜索を受けてゐることを告げ、身邊を注意して呉れと云つて立ち去つた。しかも夕方再び注進に來た時には、既にデイノ・ナツドは五時頃逮捕されたと云ふことであつた。

そこで最早一刻の猶豫も出來ない。私はターバンを頭に卷いて北印度人を裝ひ（ターバンはラホールその他北印度人のつける風でベンゴール州の人はつけない）一人の部下をつれて、こつそりと下宿を出ると、馬車を傭つてラホールの停車場に走つたが、實に間髪を入れず、五分の後に警官の一隊は下宿を襲つたといふことである。私は同志數名に送られながら六時半の汽車でラホールを去つて行つた。

警戒網を潜つて鄕里へ

翌朝九時頃汽車がデリーに着くと、私は此處の様子をさぐらんとして下車し、ターバン姿で大通りを濶歩し、警視廳の前まで來た。無論私はアボット・ビハリ檢擧のことは知らなかつたのである。見ると門の前に十五六才の少年が佇んでゐたが、遠くから私の姿を認めると急いで傍へやつて來て、

「小父さん、お歸りなさい。けれど用心して下さい。みんなつかまつてしまつたのですよ」

と云ふ。そこで私は少年を横町へ誘ひ入れ、

「さうか、伯父さんもつかまつたのか？」
と尋ねた。伯父さんとはアボツト・ビハリのことで、彼を初め中學校長のアミール・チヤンドなどみな逮捕されたといふことである。
「わしの鞄も押收されたかな」
「さうです。だから、うつかりすると小父さん危いですよ」
「よし／＼、でお前はこんなところで何をしてゐたのだ？」
「伯父さんの差入れ物に來てゐたのです」
「さうか、で伯父さんに面會できたらな、わしは大丈夫だと告げて呉れ、わしのことは心配しないでも好いぞ」
私は初めてすべての眞相を聽き、己の身の英官憲につけねらはれてゐることを知つた。しかし私はなほも市中をあちこちと見て歩いた後に停車場に來り、カルカツタまでの切符を買つた。
列車が私の鄕里であるチヤンダルナーゴルに着いたのは翌朝の四時頃であつた。その頃は既

に私の事が肖像入りで新聞にあらはれ、或はヒマラヤに逃げたとか、或はアフガニスタンに逃げたとか、また或新聞には外國に逃亡したとか、種々の憶說が書き立てられてあつた。
私はそこで下車した。見ると構内のベンチに二人の警官が網を張つて待ち受けてゐたが、早朝のことゝて氣をゆるしてか眠りこけてゐた。その前を靜かに通り過ぎて改札口に來ると、見知りごしの驛夫は私の顏を見て、ちよつと笑つただけで通して呉れた。私が驛から數町の我が家へと急いだ。
家に着くと、それを知つた同志たちが心配して駈けつけて來た。
「まあ／＼寢かしてくれ、おれは汽車でよく寢なかつたのだ」
私は、朝飯をすますと、床に入つて一眠りした。
目を覺ましたところへやつて來たのは、デラドウンで變意になつた高等警視の弟であつた。面會を求められて會つて見ると、
「今デリーの兄のもとから電報がまゐつて、何かあなたが革命黨の首領であると云ふ疑を受けてゐるさうで、非常に心配して居ります。これから私と一緒にカルカツタの警察に行つて

辯解をなすつては如何ですか」

と飽くまで私を忠實な英國官吏と信用しての言葉である。そこで私は落着き拂つて、皮肉な笑を顏に浮かべながら言つた。

「それはどうも御親切にありがたう。しかし兄さんに傳へて下さい。御期待にそむいて相すまないが、私は立派な革命黨員です。デラドウンでは、兄さんにいろ〳〵機密を打ち明けて頂いて、非常に便宜を得ました。お禮を申しますとおつしやつて下さい」

以外の言葉——何と云ふ以外の言葉だらう！　兄は全くこの革命家に翻弄されてゐたのだと思ふと、警視の弟は眞赤になつて歸つて行つた。

その後でも私は全く落着き拂つて、逃げようともしなかつた。なぜなれば、この町は佛領に屬してゐるから（印度國内で佛領はこの他にも四個所ある）佛官憲に交渉なしで、やたら英國の警官が逮捕することはできない。警視の弟から兄に電報を打ち、英國の印度總督から佛國の官憲に交渉があつて、初めて手を下すとして、それ等の照會の時間を見積つて見ると、裕に一日は安全だからだ。

私は其の日一日大手を振つて町を歩き、同志の革命青年達と共に何回となく會合を開いて協議した。

さて其の夜は、部下の父親が行政長官をしてゐるのを幸ひ、そこに泊ることにして、夕方こつそりと家をぬけてそこに忍んだ。そこは私の家より僅か半町程隔てたに過ぎなかつたので、翌朝早く佛國及び英國の警官が私の家を包圍して捜索してゐるのがその家の窓から手にとる如く見られた。警官の一隊は正午頃までかゝつて近所を虱つぶしに捜索してゐたが、遂に何物も發見することが出來ないで引き上げて行つた。その後へもつて行つて、私はゆつくりと我が家へ歸つたものである。

「それは余りに危險でせう」

と心配する部下達に對して、

「檢査濟みの家ほど安全な隱れ場所はない」

と一言殘して、歸つて行つた。果してそれから四五日は無事で、いよ〳〵もうこゝも危險と感じて五日目に居を移すと、翌日二度目の捜索があつて、危いところを逃れたのであつた。

隱れ家に待機

次ぎの隱れ場所は同志の兄の妾宅を選んだ。こゝに面白いことは、同志の兄といふのは、素行のおさまらない道樂者であつたが、弟が面に熱誠を表はして賴むと、

「よし、おれも同じ印度人だ。同胞が英國人に苦しめられてゐるのを、見殺しには出來ない。命を的にかくまつてやらう」

と、いつにない眞摯な顏つきで誓つた。そしてその日から彼は生れ變つたやうな人間になり一滴の酒も飲まなければ、內外の聯絡のためのほかは決してその家に足踏みもしなかつた。しかも女も亦女丈夫で、何くれとなく私のために世話して呉れた。そしてこれは後の話であるがその後男は女に暇をやり、女はこれを轉機として尼になり、清い生涯に入つた云ふことである。男と云ひ女と云ひ、何と云ふ不思議な變り樣をしたものであらう。私はその時賞金七千五百ルピー（約九千圓）のお尋ね者であつた。普通ならその賞金欲しさにでも、密告しさうなところである。それがこの豹變である。彼等に久しく眠つてゐた愛國心が目覺めたのである。

それはさて置き、私は一人の部下と共に、遊廓の眞中にあるこの妾宅に、十日間潛んでゐた。賞金をかけて血眼になつて搜索してゐる英國官憲は、よもやこんな處に潛んでゐようとは想像だにしなかつた。

しかしそのうちに、そこも長く居ては危險と考へたので、また他に一軒家を借りてそこに移つた。そして一日黨員の會合を開いて協議した。その結果一同の意見は、最早國內に居ては危險である故、外國に逃れたがよいと云ふことに一致した。しかし私は未だ首を縱には振らず、

「まあ、もう少し考へて見よう」

と云ふことで解散した。

翌日再び會を開いたが、愈々外國行を勸める者が多く、中には日本行きの切符を買つて來てまで、決心を促す者があつた。その時私は暫く沈思してゐたがやがて口を開いて云つた。

「僕はいろ〳〵考へた。その結果、こゝに取るべき手段が二つ殘されてゐる。その一つは、どうしても捕へられるなら、他の者の手にかゝるよりも、諸君の手によつて突き出してもらひ度いと云ふことだ。僕の身體には一萬二千ルピーといふ莫大な賞金がかけられてある（數日

の間に增額されたのである）資金の不足してゐる我々にとつては實に貴重な金だ。その金に依つて我々の運動を有效に導いてくれ、さもなければ僕は、外國へ逃れる氣は微塵もない。捕へられるまでも國內に踏み止つて、尙運動を續けたいのだ。外國に行けとの好意は謝するがそれは僕の本意ではないのだ」

かう云ひながら私は、外國行の船の切符をびり〳〵に裂いてしまつた。室內は急にしづまり返つて、無言の感激が一同を捉へた。

各地呼應して反亂を圖る

そのうち官憲の搜索の手もゆるんだので、或る夜私は船に乘つてガンヂス河を溯り、明け方ノユツデイツブに上陸し、汽車によつてベナレスに至り、その地の同志と逢つて、豫め借りておいた家に住んで夏をすごした。

折しも四月頃から歐洲大戰がおこり、世界を擧げて動亂の渦に卷きこまんとしつゝあつたところ、米國にある革命黨員が續々と歸國し來り、頻りとドイツが印度革命を援助するといふこ

とを傳へた。そこで全印度の革命支部に急遽檄を飛ばして、蜂起を促し、或夜ガンヂス河に船を浮かべて、同志の會議を開いた。集る者はドイツの報をもたらしてアメリカより歸つたビングレー、カルカツタより馳せつけたチヤテインドラナツト・ムカルジ、ロシアに行つて現在は投獄されてゐるローイ等總てで八名いづれも首領株であつた。これ等の志士等が集つて相談したことは、革命反亂の決行に關する問題で、結局ドイツの援助が有る無しに拘らず、今日をおいて革命の好機會はないから蹶起しよう、今北印度に革命を起せば、英國はこれを押へることが出來ないといふのであつた。

そこで四方に人を派して、いよ〳〵反旗を翻す準備にかゝつたが、何より必要なのは兵器彈藥で、あらゆる方法をもつてこれが蒐集を圖つた。これより少し以前、カルカツタのローダ商會と云ふ英人の經營にかゝる武器彈藥の輸入商が、本國より五十挺の拳銃を輸入して、印度人の書記がそれを受けとりに稅關へ行くことになつた。この書記こそ革命黨の廻し者で、稅關で品物を受取ると、そのまゝ黨の本部に運び込み、直ちに黨員の間に配布を終つたことなどがあつたので、一同これに力を得て意氣軒昂であつた。

ところが或夜のこと、私は彈藥を吟味中、突然爆發して、同志と共に負傷をした。私は直に自動車に乘つて知人の醫者を訪ね、手當を受けてそこに二箇月間寢て暮した。

思ひがけない椿事のために蹶起の日が延び〳〵になつた。それでいよ〳〵活動の中心をラホールに移すことにして、或る者にはベナレスの軍隊を煽動する任務をさづけ、また或者には中央州のシヤバルブールで同じ行動をとるやう命令を殘して、或夜私はラホール行きの列車に乘り込んでベナレスを去つた。

ベナレスからラホールに至るには、途中デリーに於て一度汽車に乘り換へなければならない。丁度眞夜中のことである。私はあたりに氣を配りつゝ、漸く汽車に乘り換へて、ほつと一息つく間もなく、ふと前を見ると、そこに腰をかけてゐるのは、デラドウンの任地で見知りどしの警視であつた。さすがに私もはつとして、思はず身のすくむ心地をしたが、更に心をしづめてよく見ると、天の佑けか警視は身をはすにして依りかかつたまゝ眠つてゐた。私は從へた青年を顧みながら、

「別の車に換へるぞ」

と一語さゝやいたまゝ、つと立上ると、列車の中を次ぎから次ぎと車室をぬけ、最後の室におさまつて漸く危難をのがれた。

內通で計畫齟齬

ラホールに着いてからの私の責任は大きかつた。ラホールから北部印度をつらねてベンゴルに至るまでの連絡をとり、そこで各地の同志、軍隊等はひたすらラホールの蜂起を待つた。機はいよ〳〵熟した。一九一五年の二月二十一—二日の夜半こそ、蹶起の日と定められた。

ところが四五日前に至り、黨員の中に間諜があつて、逐一英國の官憲に報告されたらしいことが分つた。なぜかと云ふに、英國の官憲が急に印度人の武裝を解除し、ラホール附近に於ける英國軍隊の動員を行ひ出したからである。それで最早二十一日を待つことが出來ず、急に日を繰り上げて十九日事を擧げることに決し、取あへず、附近の聯隊にある印度軍にこれを通じた。

當時ラホールに於る革命黨の秘密本部は四箇所に分れてゐた。そのうち私は同志の一人ラ

ム・テラン・ダースの家にあつたが、折からダースの妻は姙娠九ケ月の身重であつたので、よもやかゝる所に革命黨の本部があらうとは誰も想像しなかつた。この家では、常に二階に干物を出しておいて、これを異常のないと云ふ目印とした。若し干物が出してなければ變事があるから入つて來るなと云ふ知らせで、このことは幹部だけが承知してゐた。他の三箇所の本部も壁に紙を貼りだして無事の合圖にするといふ風で、それ〴〵しめしあはせておいた。

ところが十九日の朝に至つて、突如として本部の一軒が警官の手に依つて包圍された。そこで黨員は屋内から拳銃を發射し、爆彈を投げて防ぎ戰ひ、警官隊また發砲して、暫くは靜かな朝の街に時ならぬ激戰を交へてゐたが、遂に彈丸つきた黨員は或は傷つき、或は斃れて、警官隊の捕ふるところとなつた。

殘るは三軒の本部である。自重して樣子を窺つてゐるうに、夕方停車場から汽車を降りて來る二人の革命黨員があつた。待ち受けた警官に誰何されると、不覺にもいきなり拳銃を出してこれを射殺した。これがために二人は直ちに他の警官に依つて捕縛されたが、その懷中から出たのが一軒の秘密本部の住所である。それに依つてその本部も亦警官に依つて包圍され、黨員

の幾人かは捕へられた。

かうなつては最早手も足も出なくなつた。今はラホールの近くにあるフエローズポール聯隊の蜂起を賴みに、それを待つばかりであつた。しかしこれまた約束の時間である夜の十二時に先立つこと三時間にして暴動をおこしたが、かねてこの事あるを知つて備へてゐた英國軍隊の機關銃の的となつて、哀れ五十名の印度兵は無殘の死を遂げた。

この他各地の軍隊も陰謀發覺したと云ふ報告が次々に入つて來るので、私は斷腸の思ひであつた。

二十日の朝になると、革命黨の出資者の一人である某老人が私を訪ねて來て、

「最早擧兵の機は逸しました。これを以て直ぐに立ちのき、再擧をおはかり下さい」

と云つて、英金貨二百枚（二百ポンド）を入れた袋を渡してくれたので、取り敢ずラム・サラン・ラース夫妻を歸國させ、私自身は豫め他に借りておいた家の三階に一先づ移つた。それが正午頃のことで、一時頃には既に警察の手が廻つて空家を襲つたが、見出されたのは地圖一枚のみで、武器彈藥は勿論のこと、用意して置いた獨立宣言書、各地の革命軍に對する訓令、軍

旗等重要なる品物は一つ殘さず持ち去つてゐた。

斯して印度革命史上に名高いラホールの反亂は、遂に雄圖空しく書餅に歸したのである。

危く虎口を脱す

三階の隱れ家に移ると、直ちに會合を開いて協議したが、前後の事情は最早一刻もラホールにあることをゆるさないので、一先づベナレスに退去することにして、部下一人を連れて停車場に來つた。烱々たる警官の眼を逃れて、汽車に乘り込んだまではよかつたが、ガヂアバーで乘り換へようとすると、一人の紳士がホームのベンチに腰をかけてゐる。見ると、デラドウン知事の官房主事をしてゐる男である。汽車に乘り換へるには厭でもその前を通らなければならぬ、その前を通れば直ぐと見つけられることは知れきつてゐる。

「萬事休した。もうどうでもなれ」

私は覺悟をきめた。そして部下にむかひ

「あすこにデラドウン知事の官房主事がをる。おれは捕へられるかも知れない。お前は別に

離れてをれ」

と云つて、懷中から煙草を出し、それをくゆらしながら（これが危機に際するときの私の常套手段だ）強ひて平氣を裝ひ、官房主事の前を靜かに歩いて行つた。官房主事はちらりと私の顏を見たが、すぐと面をむけて、その通るのを見逃して呉れた。

安宅の關の辨慶ならぬ私は今、虎口をのがるゝ思ひをしながら汽車に乘り込んだものである。官房主事は富樫の雅量にも劣らず、別に人をして追はしめる風もなく、汽車は無事にベナレスに着いた。英國官憲の高い椅子をしめてはをつても、さすが同胞と、この時ばかりは私も胸の痛くなるほどその好意を嬉しく感じた。

遂に日本へ亡命

ベナレスに數日滯在してから、今度はカルカツタに至つて今後の協議を遂げやうと考へ、私はベンゴール風に變裝し、下髭を生やして汽車に乘りこんだ。途中で一度故郷を訪れてと、三つばかり手前の停車場で下車し、夕方馬車に乘つて鄕里へ入つた。その夜は同志の家に泊り、

數人集つて會議を開いたが、その時、今度こそ自分から外國行きを決心し、その問題を持ち出した。しかしそれは單に亡命すると云ふだけの意味ではなく、外國に至つて武器の密輸入を圖らうと云ふのが目的であつた。そこで私は一先づ聖地ノボッディッブに至り、頭を剃り僧服をまとひ、カルカツタに至つた。

私の考へでは、さしあたり日本に渡り上海に渡つてそこで活動せんとしたのである。恰もよし五月に詩聖タゴールも日本に行くと云ふ噂があつたから、私は名をビー・エヌ・タゴールと呼ぶ親戚の者といつはり、タゴール翁の渡日準備のため且つ留學の目的で豫め日本に行くのだと稱して切符を買つた。

船は日本郵船の讃岐丸であつた。出帆の當日私は同志達に送られて港まで來た。くれ〳〵も後を賴むと云つて、同志達の手を握ると、途中無事に、そして向ふでの活動を待つと云つて、彼等も眼に涙を浮べてゐた。私も暫くはこれで祖國とも別れるのかと思へば、さすが涙なきを得なかつた。

やがて私はあたりを憚りながら隱しから二挺の拳銃をとりだし、

「我が黨にとつては僅か二挺の拳銃といへども貴重な武器だ。これは殘して行くから使つて呉れ給へ」

と云つて渡した。

「しかし君はこれから單身遠い旅をする身體だ。萬一の場合に」

「船の中で武器が何の役に立たう。却つて怪しまれるが落ちなくらひだ。それよりもそつちで有效に使つてくれ給へ」

と僅か二挺に過ぎないが、もはや私自身の手にあるより彼等の手に殘した方がどんなに貴重であるかも知れない武器を無理に彼等に持たせた。

いよ〳〵船に乘りこむと、私は出帆の時を一刻千秋の思ひで待ちながら、甲板の椅子に腰をかけてゐた。やがて出帆の間際になると、警官が入つて來て船客を調べはじめた。三等の印度人が四五名革命黨の嫌疑で拘引されたらしく、三等、二等と次第に私の方へ順番が廻つて來た。私は一等の切符を買つてゐたのであるが、この他に一等船客は日本人一名、ユダヤ人一名印度人の商人が一人だけであつた。私はどうなるかと胸を躍らせながらも、例の如く煙草をく

ゆらし、平氣を裝つてゐた。

「この他に一等船客はまだゐるのかね」

と、尋ねる英人の警官の聲が聞えた。

「もう一人、タゴールさんの親戚の方と云ふのが居られます」

事務長が答へると、

「あゝ、そうか、それで宜しい」

警官はそのまゝ立ち去つてしまつた。

やがて船はスクリュウの音高く、カルカツタの港を離れた。私はほつと一息したのであつた。

寄港地でも嚴重な檢閲

しかし未だ油斷は出來ない。シンガポール、香港と行く先き〳〵の寄港地で、英國官憲の眼を逃れることはかなり困難だ。それを私はどうして切り抜けたものであらう。

シンガポールでは果して警官が二十人もどやどやと乘りこんで來たので、私はいよ〳〵出奔が露顯したかなと思つてゐると、その少し以前シンガポールに印度兵の反亂があつたので、こゝに上陸する印度人は指紋をとるといふのである。

「あなたはどうなさいますか」

と事務長に尋ねられて、上陸しないといつては却つて怪しまれようと考へ、

「せつかくですからちよつとぐらゐ見物したいと思ひます。指紋なんかいくらでもおします よ」

と、私はむざうさにかまへて、お義理に港見物をして歸つて來た。

香港では、こゝを經由する印度人は誰でも新しく香港の警視總監から旅行免狀を下附してもらはねばならぬと云ふので、厄介なことになつたと當惑しながら警視廳に出頭すると、生憎の日曜で、總監がゐないから免狀は出せぬと云ふ、しかし總監がゐなかつたことが却つて幸となつて、マニラから來て廣東に行くといふ印度商人は免狀がもらへないのに、私の方は印度人の書記が好意をもつて書いてくれた。

こんな危い瀬戸際を通りながらも、私は遂に始めて見る日本の神戸港に、無事に着いたのである。

上海での活躍は成功しなかつた。日本では英國大使館からの依頼によつて、日本政府の手に追ひまはされ、危く捕はれるところであつたが、頭山翁の仁俠に救はれて今日に至つたのである。私は四箇月餘の間かくまはれた東京・新宿中村屋の令嬢と不思議な緣によつて夫婦の契を結び、不幸にも妻は若くしてこの世を去つたが、その間に二人の子供までもうけた。今は日本に歸化して、堂々と白日の下を濶歩できる身であるが、夜半靜かに故國を憶ふ時、深き感慨を禁じ得ないのである。

昭和十七年六月十六日初版印刷
昭和十七年六月十九日初版發行
〔四〇〇〇部〕
定價壹圓八拾錢
送料十六錢

著者　ラス・ビハリ・ボース
發行者　東京市京橋區銀座西八ノ七　八幡兼松
印刷者（東東三四八八）東京市麴町區飯田町一ノ十六　西田昌義

（認承協文出あ 90088 號）

發行所　東京市京橋區銀座西八ノ七　株式會社　照文閣
電話銀座(57)三六〇三番　振替口座東京三〇〇八一番
六九三〇番　會員番號一一二三五二番

元給配
日本出版配給株式會社
東京市神田區錦町一ノ九

永井柳太郎著

最新刊

興亞論集 世界に先驅する日本

規格判B列6號
二百六十頁

定價一圓七十錢
（送料十六錢）

著者序文より……萬一此等内外の建設を誤り、大東亞の天地を通じて八紘爲宇の大理想を顯現すること態はず、皇軍の赫々たる戰果を水泡に歸せしむるが如きことあらば……中略……

本書は大東亞再建の指導精神に關する私の論文、放送講演の集錄である。……

然し私の抱懷する興亞理念に至つては、全篇を一貫して毫も渝る所ない。これ私が本書の公刊に同意し、敢て本書を以つて江湖に訴へんとする所以である。

昭和十七年五月　珊瑚海々戰の大捷報到る日　永井柳太郎識

内容概要

興亞運動の指導理念
光は東方より
アジア民族よ團結せよ！
世界史の創造者日本
共に戰ふ心
興亞倒英論
興亞に先驅すべき青年の使命
大東亞教育體制の確立

全國書店にあり　實切の折は、直接振替で本社へ！

東京・京橋
銀座西八ノ七

株式會社 **照文閣**

電話(銀座)三六〇三・九六三〇
振替 東京三〇〇八一番

終